
カンピオーネ cross × cross

坂川 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ crossxcross

【Nコード】

N7598R

【作者名】

坂川 一

【あらすじ】

草薙護堂は神殺しである。この作品はカンピオーネ！の二次創作です。かなりオリジナルの性質が強くなっており、登場人物の大半がオリジナル設定になるかと思えます。多重クロスです。小説は初挑戦です。未熟者ですが、頑張っていきたいと思えます。

プロローグ（前書き）

この作品はカンピオーネ！の二次創作です。オリジナル設定多数で原作の登場人物がでなかったり、ほかの作品のキャラがヒロインになったりします。なのでこんなのカンピオーネ！じゃねーという方は見ないことをおすすめします。

プロローグ

とある空港のロビーに三人の人影がある。少年と少女そして彼らの祖父である。

「ねえ、ほんとうにいつちやうの？」

不安げに少女が少年に問いかける。彼女の名は草薙静花、少年、草薙護堂の妹である。周囲の大人が破天荒なためか、齢11にしてなかなかのしっかりものだ。普段勝気な性格であるためこのような表情をするのはとてもめずらしい。

「いまさら行かないとは言えないだろ」

「それはそうだけど、やっと歩けるようになってきたのに・・・もう少いでちゃんと治るかもしれないんだよ？」

そう、護堂は歩くことすらままならない体だったのだ。小学校入学前に倒れ、それ以来入院生活、学校には数えるくらいしか行っていない。原因は不明。そんな彼が9歳の時突然イギリスで暮らしたいと言い出したのだ。テレビや雑誌の影響もあったが、自由を好む護堂にとって入院生活は苦痛だった、外への憧れは人一倍強かったのだ。反対する周囲を説得し、ついに半年前、小学校を卒業し、イギリスへ向かうことになったのだ。

そんな護堂を悲劇が襲う、空港へ到着したとき大災害に見舞われたのだ。空港から火の手が上がり周囲の民家まで焼き払う大火事だ。しかし心肺停止状態で救出された護堂は、医師も驚くほどの回復を見せる。

あつという間に傷が治り、立ち上がれるようになったのだ。半年という非常に短いリハビリを終え、護堂はいま別の空港にいるのだ。

「そういうことは言わない約束だろう静花、護堂の気持ちはおまえもよくわかつているだろう」

祖父・一郎の言葉に静花は言い返すことができなかった。実際この話はいままで家族会議でなんどの繰り返し返されてきたものだ。静花自身もそのときは納得していたはずだったが、いざ兄がいなくなるとなると引き留めたいという思いがでてしまったのだ。

「むこうにいるのなんてたったの三年だぞ？一生あえないってわけでもないんだからそんなに気になくてもいいと思うんだけどな」

そついいながら護堂は静花のあたまを撫でる。彼女をおちつかせるにはこれが一番であることを護堂は長年の経験からわかっていた。

「ちゃんともどつてよね！」

気持ちを切り替えるためか静花の口調がつよくなる。

「おつ」

「連絡入れてよっ」

「もちろんさ」

「めんどくさがっちゃだめだからね！」

「……おつ……あつもう時間だから行くね」

「ちょっと間が気になるけどしょうがない、いってらっしゃい」

「がんばってこいよ。彼女ができて連絡しなくていいからな」

「なにいつてんだよじいちゃん」

祖父らしい別れの言葉に苦笑しながら（静花が激しくにらんでくる）
護堂は歩き出した。杖をついていたがそれでも彼は自分の足で歩いていた。

「いってきます」

このとき護堂は気づいていなかった。これからの人生が彼の想像の斜め上をいき、K点を軽く突破するほどでたらめなものになること

プロローグ（後書き）

いろいろと自分のなかに疑問符がつかんできます・・・本当に・・・
これで・・・いいのか？

設定

登場人物

・草薙護堂

中学校をイギリスで過ごし、高校入学のため帰国した。日本でアマテラスを、イギリスでランスロットをたおしている。そのためゲイネヴィアから恨まれている。収集癖があり自分の好みにあつたものを集めたいと思っているがほかのカンピオーネに比べて良識的なため略奪などはさすがにしない。わりといいかげんでさぼり癖があり授業をさぼることもある

・能力・権能

【アマテラス】

その名の通りアマテラスをたおして得た権能、金色の炎を自在にあやつり物質化することも可能

【ナイト・オブ・オーナー】

手にした物品に最高位の霊格を与え支配する能力。ランスロットの騎士としての技術も付属している

【ゲート・オブ・バビロン】

ギルガメッシュの宝物庫を開き神具を自在に取り出す能力。

強大すぎるため使いこなせず一度に取り出せるのは最大七つ。また、取り出した分は十分ほど経たなければ再使用できない。つまり七つ同時に取り出せば十分間何も使えず、一つずつ小出しにするこ

とで無防備な時間を補うことができる。

【鬼食い】

護堂が生まれつき持っている異能で周囲の魔力を体内に取り込む力護堂はこの力による魔力の取り込みすぎで体調不良に陥っていた

・万里谷祐理

正史編纂委員会霊視部に所属する媛巫女、世界トップクラスの霊視力を持つ。専門ではないが汎式陰陽術も基本なら使用できる

・明智光

ヒロインその2容姿は戦極姫の光秀。天海『明智光秀』を祖とし武士の出であるために剣術もこなす。明智家は秘伝としてBLEACHの斬魄刀を伝えている。光の斬魄刀はBLEACHの白夜のものと同じ千本桜。祖父、父、母が呪捜官。

法術に関して造詣が深い。

・エリカ・ブランデッリ

原作と違い護堂ではなくサルバトーレ側の人間。サルバトーレに振り回される生活をおくっており、リリアナにまで同情されている

・リリアナ・クラニチャール

原作とほぼ同じだがヒロインにするかは未定

・リタ・モルディオ

護堂が留学したばかりのとき大英図書館で知り合った一つ年下の少女護堂と出会ったときにはすでに大卒の資格を持っており、大英図書館で魔術の研究をしていた。

その後わけあってフランスへ逃亡。そこで『凛々の明星』^{フレイク ウェスベリア}にはいる。騎士のように近接戦はできないが、強力な詠唱魔術を使用する。周囲からは浮いていたために、護堂は人生初の友人であり、少し気になっていいる様子。

その他 用語等

・異能

魔術に必要な過程を抜きにして魔術的現象を引き起こす能力

・霊視部

援巫女のような霊視能力者が多く所属する正史編纂委員会の部署

・呪搜官

魔術の警察官、正史編纂委員会の呪搜部に所属している

・被魔官

正史編纂委員会の被魔局に所属している魔術師。陰陽師が多く地脈の乱れや霊災に対応する。高位の術者は独立官とよばれ単独行動が認められる。

・霊災

地脈の乱れなどが原因で起こる霊的災害フェーズ1からフェーズ6まであり3以上は実体を持つ『魔』となる。6はまつろわぬ神の降臨

・生成り

霊災などの影響で体に『魔』をやどした人間。霊災の種類によって力が異なる

・法術

仏教系の魔術の総称。空間に作用するタイプの術が多い。

・明智家

本能寺の変によって武士として生きていけなくなった明智光秀が天海と名を変えて徳川家康に近づくことで成立した魔術師の家
江戸時代は明田家と称し、関東一帯の魔術師を統括する役目を負った。

明治維新の際本家以外は朝敵として処刑された。

明治十年明智姓にもどる

設定（後書き）

こんな設定でやっていきたいと思います。

第一話

「さすがイタリア人。呼び出しておいて遅刻とはね。」

不機嫌そうにつぶやいているのは草薙護堂、日本人である。なぜわざわざ日本人と喋っているなかとすると護堂がいるのはイタリアだからである。

フィウミチーノ空港。レオナルド・ダ・ヴィンチ空港ともいう。イタリアの首都ローマにある国際空港であった。

そのため、護堂のほかには日本人がいるはずもなく見知らぬ土地のど真ん中で東洋人であるが故の好奇の視線にさらされながらまぢぼうけをくっているのである。

「はじめて会ったときから感じてたことだがあいつは本当に人の都合を考えないよな」

あくびをかみころしながら、知人の顔を探す。

目当ての人物は非常に目立つ。

なぜか王冠のように思える金髪。女性にたいしてあまり興味のない（だからといってBLではない）護堂からしても素直に超美人と認めてしまうほどの美貌。衆目をあつめることが当然だと言わんばかりの横柄さ。接近してくればすぐにわかる容貌の持ち主なのだ。

しかし彼女、エリカ・ブランデッリは一向に現れない。

現れないなら現れないで別にかまわない。なぜなら護堂にとってエリカ・ブランデッリは明らかな天敵だからだ。平穏を望む彼にとつて厄介ごとを100%持ち込んでくる彼女との接触は可能な限り避けたいところなのだ。しかもエリカは護堂の味方というわけではない。サルバトーレ・ドニというイタリアのカンピオーネの側近であり護堂がカンピオーネであるとリークした張本人だ。

なぜ護堂がそんなエリカの呼び出しに応じたのか・・・それは先日、唐突にかけてきた電話が原因だ。

『聞いて護堂。いまあなたがわたしのところに来てくれるとすぐ都合がいいの。ということだから、明日の朝一番の便でこっち来なさい。迎えに行つてあげる』

開口一番これである。四月も終わりに近い金曜の午後、帰宅の徒についていたときのことだ。

「そこでなんで」ということだから『なんて接続詞がでてる？おまえの都合に合わせる義理はないぞ。なんかあるならサルバトーレにやらせればいいじゃないか』

いきなり何を言うのかこの女は・・・

『そのサルバトーレ卿がいないんだからしょうがないじゃない。護堂だつてわたしに会えるんだから嬉しいでしょ？』

「べつに嬉しくなんか無い。俺の感情を捏造するのはやめろ。だいたい前に会つてから半月しかたつてない」

なるべく淡々と答えるようにする。できることならこのまま電話を切つてしまいたいのがそれを許す相手ではない。相手のペースに巻き込まれないようにしながら話を進める。

「サルバトーレがいないつてなんでだよ。おまえともう一人優秀なのがお目付役なんじゃないのか？」

『護堂につけられた傷がうずくつて言つて療養のために南の島よ』『療養？カンピオーネにそんなんいるか？。だいたい俺のほつが重

「傷だったじゃないかっ！」

カンピオーネの身体能力は人間のそれを軽く上回る。腕力や脚力はもとより魔術に対する抵抗力【抗魔力】等も桁違いだ。彼らにとって大魔術ですらそよ風のようなもの。「ちよつとした」重傷程度寝ていれば治るのだ。実際、護堂もかつて何度もただの人間なら死んでいるような怪我を一晩で治している。魔術師のサポートのあるサルバトーレの傷が半月もふさがらないはずがない。

「そんなことはわかってるわ。あの方はただバカンスがしたいだけなんだってことくらい。でも私たちがあのサルバトーレ卿をとめられるはずないでしょう？それに今回は護堂の責任でもあるのよ・・・あなたがあの方に一見もつともな理由をあたえてしまったから」

この件、断じて自分のせいではない。あれは正当防衛だった。いきなり嬉々として斬りかかってくるアホを死にもぐるいで追い払っただけ。一歩間違えば自分は死んでいたのだからそれは間違いない。護堂はそう自分に言い聞かせながらも日常的に奴に振り回されているエリカに同情心がわいてきた。それが運の尽きだったのかも知れない。平穩を望むならこの電話を切るべきだったのだ。

「それで俺がイタリアに行ったとして何させるつもりだ？わざわざ日本から呼び出すんだぞ。それなりの理由があるんだろうな？」

これ以上のおふざけにはつきあわない。そういった意図をこめて言葉を紡ぐ。彼女もそれを察したのだろう。きゆうに雰囲気を変えた。

「確かに頼む側の態度じゃなかったわね。ごめんなさい。改めて言うわ。草薙護堂すぐにイタリアへ来てちょうだい。あなたの借りる

必要があるの。私だけの力じゃ解決が難しい案件だから、真剣に考えて。このエリカ・ブランデッリ、我が誇りをかけて嘘は言っていないわ。』

エリカから『誇り』の一言がでた以上これは嘘ではないだろう。たいして長いつきあいではないが、彼女が誇りを大切にしていることくらい知っている。となると『案件』の内容だがこれは容易に予想がつく。サルバトーレがいけないことに加え、自分を必要としているのだから十中八九『神』がらみの問題だろう。そうなると断るわけにはいかない。

「わかったよ。行ってやるから迎えに来い」

『うれしい回答ねあなたの騎士道精神に祝福がありますように』

電話を切ってから護堂は大切なことに気がついた。

「チケットとかどうするつもりだ？金ねえぞ？チケットとれなかったって理由でキャンセルできるかも」

結果的に護堂の考えは否定される。家に帰ってみるとエアメールが届いていた。差出人はエリカ・ブランドゥリ。言質とったら即行動外堀を埋めて『やっぱやめた』を封じる彼女の手腕はさすがとしか言いようがない。

これから必ず起こるであろう厄介ことにはやくもブルーな護堂だった。

第一話（後書き）

ネットにつながらないという悲劇！！を乗り越えやっと投稿です。
遅くなりましたすいません。

第二話

「あの、すみません」

所在なくエリカを待つ護堂の物思いは、日本語の呼びかけで中断させられた。

流暢な、しかもネイティブの発音である。

「身長百八十センチ程度、しゃれっ気のない東洋人で造りは悪くないくせになんとなくやる気のなさそうだから減点二十点の顔……草薙護堂さん、ですよね？」

声の主を見ると、黒髪の女性だった。おそらく護堂よりも二つか三つ年上だろう。

「わたし、アリアンナ・ハママ・アリアルディと申します。エリカ様のお申しつけでお迎えにあがりました。よろしく願います。」

「はあ、こちらこそよろしく。ところでエリカの奴はどうしたんです?。」

一見虫も殺さないような顔をしているがあのエリカの関係者だ、一応の用心はしておこう。

「エリカ様は大切な会合があつて、そちらに出ておいでなのです。終わり次第あいいらっしやるということなので、それまではわたしが責任をもってお世話いたします」

「それじゃあアンナさんは俺が何をしたらいいのか、聞いています

か？あいつ詳しい話をしないで俺を呼び出したんですよ。」

「申しわけありません。私も存じあげてはいないんです。ただ護堂さんはエリカ様の大切なお客様だから粗相の無いようにと言われただけで……」

「それだけ？俺のこと何もきかされてないんですか？」

「はい。……もしかして護堂さんは超重要人物だったりするんでしょうか？」

「いいえ全然つ。ただの日本人高校生ですよ」

わざわざ吹聴することはない。今までだって隠してきたのだ。サルバトーレのような奴もいることだし、自分のことはあまり知らない方がいい。

「あ、こんなところで話し込んでいちゃダメですね。街へ出ましょう。わたしがローマの街をご案内して差し上げます。車も用意してあります」

「えっ。マジで！そういうことなら喜んで！」

一気にテンションをあげる護堂。護堂にとって神は二の次三の次、文化遺産を愛でることが護堂の隠れた趣味なのだ。

「ああ、でも車って言うてもあまり派手なのは勘弁してください。ああいうのは好かないんです。」

「そんな贅沢なことはしません。運転手さんはわたしですから。」

安心させるようにほほえんでからアンナは歩き出す。エリカの人選にしては、アンナ嬢はおそろしくまともだ。護堂は警戒していたことがなんだか恥ずかしく思えてきた。

気配りも細かそうだし、普通の人間っぽい。

この感想が早とちりだったと痛感するのはもう少し先の話だった。

サヴォア公家の姫君が使っていた館を改装したとかいうホテルの一室で会合は行われていた。

大きなテーブルを囲む人数は四人。

まずは彼女エリカ・ブランデッリ。そして老人が二名。《老貴婦人》と《雌狼》この国の爛熟した魔術界で特に強力な騎士団の総帥たちだ。

最後に騎士団《百合の都》を代表する若き総帥。三十前の青年だ。この男は《赤銅黒十字》を代表するエリカと同じく『大騎士』の位階をもつ騎士なのだ。

世界各国、古来より多種多様な魔術師が存在している。刀槍の技と魔術をともに修めた『騎士』もその一員だ。エリカたちは中性を闊歩したテンプル騎士団の末裔なのだ。

「さて諸君、そろそろ結論を出すべきではないかな。われわれ全員にとって頭痛の種である、ゴルゴネイオン。はたして誰に預けるべきか？」

《老貴婦人》の総裁が提言する。

即座に異を唱えたのは、《雌狼》の長であった。

「預ける？どうか、それは。我らの盟主たるサルバトーレ卿が不在だからといって、異邦の王を頼ったとあつてはあまりに情けない。いい笑いものではないかね？それに王の怒りはどうだ。王がお怒りになったなら首が飛ぶだけではすみませんぞ」

「笑いたい者には笑わせておけばいい。重要なのはゴルゴネイオンが本物で仰ぐべき王がないという状況だ。一時の恥など些細な問題だよ」

「それにあのサルバトーレ卿がそのような些細なことを気にするとは思えぬ。あの方は我らのことを蜂の巣に集まるミツバチ程度にしか思われていないでしょう」

「とはいえ、どの王を頼るべきか私には見当もつきませんが。ゴルゴネイオンは古き地母の徴、最古の女神との対決といえば、ヴォバン侯爵などは興味を示すでしょうがね。『まつろわぬ神』から免れるためにバルカンの魔王を呼び寄せては元も子もない」

かの魔王が本気で戦えば都市のひとつたつは簡単に消し飛んでしまう。彼の所有する『権能』はそういった類のものばかりなので。

「頼るべき王はいます」

潮時か。そう判断したエリカはようやく口を開いた。

「そういえば、アメリカのジョン・ブルートー・スミス氏は我ら民

草の保護に熱心な珍しい王と聞く。彼にしてはどうか？」

「いいえ、あの方は西海岸を『蠅の王』から保護するので手一杯だと聞いています。呼び出しに応じる余裕はないでしょう。そこで・
」

エリカはいったん言葉をため、三人の顔を見回す。彼らの記憶の中にいる六人の王にジョン・ブルートー・スミス以外に頼れる王はいない。ほかの王を頼れば必ず何らかの形で見返りを要求される。下手をすれば今後の組織運営に支障をきたすおそれもあるのだ。三人そろって不安げな面持ちだ。

「わたしは草薙護堂、七人目もカンピオーネである彼を選びます」

「草薙護堂！」

《雌狼》の総裁がうめくように短く言った。

「近頃よく聞くようになった名前だな。イギリスでカンピオーネとなったとか・・・所詮は噂だ。確証はない」

「グリニッジの賢人議会が作成したレポートは私も読んだ。あのランスロットを倒して騎士の権能を篡奪したという話だろう。しかもその時点ですでもう一つ権能を所持していた可能性があるとか」

「ではこの情報はご存じですか？いまサルバトーレ卿が行方しれずなのは傷の療養のためで、その傷を負わせたのは草薙護堂だということ。今から半月前による二人の王が決闘し死力を尽くした結果引き分けたのです。ともに重傷をおいしましたが幸い草薙護堂は快癒しております」

「なんだと!」「信じられん!」「サルバトーレ卿と引き分けただと!」

三人そろって驚きの表情を浮かべる。それも当然、サルバトーレ・ドニはすでに四柱の神を倒しているのだから

「ひとつ、うかがわせていただきたい。エリカ・ブランデッリ、あなたは我々や賢人議会も知らないカンピオーネ同士の決闘をご存じだ。どうやってお知りになったのですか?」

『紫の騎士』この称号を持つはずの青年が言った。これは《百合の都》に属する大騎士が代々受け継いでいく称号なのだ。

「簡単です、わたしはあの決闘の立会人ですもの。サルバトーレ卿に草薙護堂の情報を伝え、決闘を行う場所や日時を整えたのも私です。サルバトーレ卿は草薙護堂をたいそう気に入っておられます。草薙護堂のことを友と呼んでいらっしやるのですから間違いないでしょう」

「ほうサルバトーレ卿のお墨付きというわけですか。しかし我らは草薙護堂についてほとんど知りません。ほかの王を頼った場合と同様、めぐりめぐって我々の害になっては本末転倒」

「ええ、当然そうおっしゃると思っておりましたわ。ですからこのエリカ・ブランデッリが王のお相手を相務めましょう。今宵あの方の戦いぶりご覧に入れ、頼りに足る存在であることを証明して見せましょう」

「なぞめいた若きカンピオーネと『紅き悪魔』の対決、たしかにお

むしろいいカードです。エリカ嬢、ここはあなたの目論みに乗らせて
いただきますように」

第二話（後書き）

原作とほとんど同じになってしまった（泣）

第三話

「やってくれたなあ雌狐め」

今、護堂がいるのはローマ市内にあるとある店、本格的なエスプレッソを飲みながら呪詛のようにつぶやく。こころなしか元気がない。

それもそのはずこの十数分の間に護堂は十回以上死にかけているのだ。

時間までローマを案内するというアンナの言葉に感動し、言われるがままに車に乗りこんだその瞬間シートベルトをつけるまもなく急発進、一般道を平均時速八十キロで爆走し、ハリウッド映画さながらのドライビングテクニクで車を縫うようにかわし、最終的に川につっこむ手前で停車した。護堂はこのときかつてアホにプスツと刺されたときよりも死を身近に感じていた。

「アンナさん俺やっぱり歩いて回ります」

「え？でも護堂さんにローマを案内しないと・・・」

「いえ、せつかくローマに来たのですからゆっくり歩いて回りたいのです」

有無を言わず車から飛び出し、もう車は結構ですオーラを発して意思表示をする。アンナも案内する相手が車から降りてしまったはどうにもならない。しぶしぶといった様子で駐車場へ向かった。

「エリカはこのこと知ってて案内役を決めたんだな」

エリカ・ブランデッリは基本的に礼儀正しい。が、しかし、いったん気を許すとその本性を露呈させてくるのだ。おもしろいことが大好きで実年齢イコール傍若無人という本性が。

彼女に関わってしまった己の不運を恨みながらエスプレッソを飲み干したその直後一人の少女と目があつた。

まずい。

その少女はただ者ではない。そう直感が告げていた。

時差ぼけと爆走でだるい体が一気に持ち直す。前進に力が行き渡り自動的に臨戦態勢へ移行する。

少女もまた仇敵の存在を感じ取ったのか護堂の顔をじつと注視している。

「……この地には、騎士を自称する神殺しがいると聞いている。この世のすべてを断ち切る魔性の剣を持つという……そなたのことか？」

いつのまにか少女が近づいてきていた。肩のあたりまでのびた銀の髪は月の光を溶かし込んだかのように輝き、瞳は夜闇のごとく黒い。

「ちがうよ。あなたが言っている男は少し前に怪我をして療養中。今は南の島でバカンスだとか言ってたよ。ちなみに俺は旅行で来たんでね、戦う気はないぞ」

護堂は相手の様子をつかがいながら答える。戦う気はないと言っ

ているがむこうがわずかでも攻撃のそぶりを見せたらすぐに応戦できるように一挙手一投足を見逃さないようにする。今までにこういった相手とは何度か戦ったことがある。皆それぞれ異なる力を持ち、外見からは想像のつかないような化物じみた力をふるっていたのだ。相手が少女だからといって油断していたら痛い目を見る。

「……そうか。では、あなたは異邦人なのだ。妾と同じように」

少女もまたこちらをじつと観察するように見つめている。理由はおそらく護堂とおなじだろう

「妾にも成すべきことがある。あなたに戦う気がないのであれば疾く去ることにしよう。だが神殺しよ、あなたは嘘をついている。」

「ウソ？」

「然り。我らとの決戦を楽しませぬ者が神殺しになるわけがない。あなたは嘘つきだ」

その言葉を残して少女は護堂の前から立ち去っていった。

どうやら荒事にならずにすんだようだ。それにしても神殺しと戦うこと以外の神様の目的とはいったいなんだろう？ 自分に関わるものでなければいいのだが……

その後やってきたアリアンナから携帯を貸してもらった。電話の相手はもちろんエリカだ。

「何、アリアンナ」

数回のコールのあとであいては出た。

「俺だ。訊きたいことがある」

『来てくれたのね、護堂。アリアンナとはうまくやれてる?』

「それについてもいろいろ文句を言いたいところだが今はそれどころじゃない。今回俺を呼んだのはやっぱり神様の相手をさせるためか?」

『神様関係ではあるけれどまだ可能性の域をでないわ。・・・もしかしてもうあった?』

「ああさっきな、女神様だったよ」

『そう、なら急がないとね。今夜の決闘の準備をしないといけないし』

「はあ!?!?どういうことだっ」

聞き捨てならない発言が出てきたため護堂は問いただした。

『決闘。あなたと私で。今夜。キャンセル不可』

要点のみで構成されたエリカの言葉に護堂は深いため息をついた。厄介ごととは思っていたがまさか半月に二度も剣を向けられることになるうとは・・・

護堂は自分の運のなさ、特にエリカに出会ってしまったこと（本日二回目）を激しく後悔していた。

第三話（後書き）

次から決闘に入ります。戦闘シーンうまくかけるといいな！

第四話 決闘

「ここがわたしたちの闘技場よ」

すでに太陽は沈み、天高く月が輝いている。

時刻は午前二時、一般的な家庭ではその多くが眠りについているころだ。当然護堂の周囲に月明かり以外の光はない。

それでも護堂とエリカは迷うことなく目的地にたどり着いた。魔術師は夜目がきく、カンピオーネならなおさらだ。

辺りを見回してみると、中途半端に巨大で細長い壁やかろうじて立っているもののほとんど横倒しになっている石の円柱群、それらに囲まれて緑の空き地があり、そこに三人の先客が待っていることに護堂は気づいた。おそらくエリカが言っていた魔術結社の総裁だろう。

「はじめまして、草薙護堂。お会いできて光栄ですよ」

型どおりの挨拶をする青年へ護堂は頭を下げた。

「草薙護堂です。俺はみなさんに恐れ入ってもらえるような人間じゃないんでどうか普通に相手をしてください」

「ご謙遜をおっしゃる。そのイタリア語、普通に習い覚えたものではありませんまい」

「左様。それは『千の言語』、長年魔術を学び言霊の奥義を悟ったもののみが扱える秘術です。あなたほどのお歳で使いこなすものはなかなかありません」

見知らぬ魔術師の言葉に護堂は内心非常に驚いていた。イギリスへ渡ったとき、三日もしないうちにコミュニケーションがとれるようになったという経験をしていたからだ。今日イタリアに来てからほとんど日本語での会話だったため気づいていなかったがイタリア語でも意思疎通ができるようになっていた。

不気味には思っていたがそんなタネがあつたとは……

返答に詰まっていたいと隣でエリカが高らかに言いはなった。

「さあ、役者もそろつたことだし、そろそろ始めましょう。『紫の騎士』殿、立会人をおねがいできるかしら？」

「いいでしょう。長老方はお下がりください。カンピオーネと《赤銅黒十字》の大騎士が相まみえるのです。距離を置いた方がいい」

『紫の騎士』の勧めに老人たちはうなずく。その直後、ふたりの姿はかき消えてしまった。

「は？消えた？姿くらましかよっ」

「あら、意外ね魔術に関しては何も知らないものだと思っただけれど……あの方たちは離れたところから見物しているから問題ないわ」

別に護堂に魔術の知識があるわけではない。ただ世界的に有名な某魔法ものの小説に出てくる魔法の名前を言ったただけだったのだが……どうやら本場でも‘姿くらまし’と言うらしい
心底驚きあきれ護堂に対しエリカは五メートルほどの距離をとる。

そして

「では、おふたりのご武運を祈ります。始めよ！」

『えっ！いきなり！』突然の開戦宣言に護堂はびっくり仰天だ。そもそも戦意も無ければ闘志もない。さらに加えて心の準備もできてない。啞然とした様子で『紫の騎士』を見つめる護堂。

そんな護堂（獲物）を『紅き悪魔』が見逃すはずはない。詩でも謡うように高らかに、それでいて一瞬の隙もなく呪文を唱える。現れたのは剣だ。

剛剣と呼ぶにはほど遠い細さで、振り回せば柳のようにしなりさえる。その銘は『クオレ・デイ・レオーネ』エリカの半身ともいえる魔剣だ。

直後、エリカが間合いを詰めてきた。

クオレ・デイ・レオーネによる稲妻のような突きが護堂の胸元に放たれる。

「ふっ」

護堂は素早く息をはいて全身の無駄な力を抜き、ギリギリで突きをかかず。

かわされたと見るやエリカは横薙ぎの一閃を放つ。突きから斬撃までが完全な一挙動。

しかし護堂はその先に行く、エリカが斬撃を放つそのときにはすでに間合いの外まで逃れていた。重心を安定させたまま、大地を滑るように……

護堂の動きを予測した上での攻撃、そしてエリカの攻撃を完全に読み切った上での回避だった。

この一連の攻防が護堂とエリカ両名の實力、そして常人ならざる力の持ち主であるということを示していた。

「俺を殺す気がっ！そんなんでいきなり斬りかかるなっ！」

「これは魔術師の決闘よ。真剣も魔術も普通に使うわよ」

「俺は魔術師じゃない！ただの高校生だ！」

この会話のなかですでに護堂は六太刀の斬撃をかわしている。完全にかわしていながら体のあちこちに何かがぶつかったように思えるのはおそらく目に見えない魔術、風の類を使っているのだろう。

カンピオーネには基本的に魔術は効かない。故にそちらは無視して良いだろう。

「逃げるばかりじゃ勝負にならないわよ。第一、わたしがつまらないわ」

「そんなこと言っただけで俺の力にだっていろいろと条件つてのがあるんだよ。」

カンピオーネがその権能を使うとき何らかの条件が必要な場合がある。といっても護堂の場合はあまり気にするようなものではない。『ナイト・オブ・オーナー』は常時発動、『アマテラス』も一応条件こそあるが使えないわけではない。今護堂が気にしているのはその使い方だ。

『アマテラス』はエリカに使うには強すぎる。かすただけでも重傷は間違いない。『ナイト・オブ・オーナー』を使おうにも今自分に強化すべき得物はない、クオレ・デイ・レオーネを奪えばその問題は解消されるが今度はエリカの得物が無くなる。エリカのことだから無手になっても決闘を続けるだろう。

結果、護堂は『ナイト・オブ・オーナー』によって手に入れた『最高の騎士』としての力のみを使いエリカの攻撃を避け続けている

のだ。

「相変わらずお人好しね。なら、まじめに戦える相手を用意してあげる！」

エリカはほぼ垂直の壁を軽やかに上っていく。

身体強化魔術と自重制御魔術の重ねがけがもたらす超人技だ。

「クオレ・デイ・レオーネ！鋼の獅子に使命を授ける。引き裂け、穿て、かみ砕け！打倒せよ、殲滅せよ、勝利せよ！我は汝に此の戦場を委ねる」

一番上まで登り切ったエリカは自身の愛剣の刀身に軽く口づけをした。

そして投じる。

「？」

騎士でありながら愛剣を投げるという行為に護堂は首をかしげる。エリカに限って魔術戦をしかけてくることはないだろう。カンピオーネには魔術が効かないということも護堂に教えたのは他でもないエリカだ。

すると突然、地面に突き刺さった剣が変形と膨張を始めた。

クオレ・デイ・レオーネは瞬く間に銀色の獅子に変化したのだ。しかも巨大化のオプシオンつき。

加えてこの獅子はただの彫像ではなかったようだ。低いうなり声をあげながら、首を回し、護堂をにらみつけてくる。大きさと体色以外は本物とほぼ同じだ。

(こいつ、動くぞ!!！)

一度は言ってみたいと思っていた台詞を心の中でつぶやきながらも獅子を観察する。

護堂がただの人間ならここでなすすべ無くがぶりとなるところだが、この程度’の相手に恐怖をいだくことはない。むしろ相手が入ではなく無生物であることは護堂にとって好都合だ。

「よっしゃー。遊んでやろうじゃないか」

護堂の発言にカチンときたのか獅子がその前足を叩きつけてきた。鋭い爪と圧倒的な質量で地面が抉られ陥没する。そんな一撃を護堂はひらりとかわす。無駄な動きのない最小限の回避行動だ。

「王はこの決闘にあまり乗り気ではないようだな。これでは彼の力の証明にはなりません。まあ近接戦闘の実力は認めますが……」

『紫の騎士』がエリカの隣でそう評価を下す。

「ええ、ですがそれも今のうち……ほら！ごらんさい、『紫の騎士』殿！」

護堂がはじめて攻勢に出た。獅子によって砕かれた石のかけらを拾い上げ、投擲する。放たれた小石は銃弾並の速度で空を切り、獅子の右前足を打ち砕いた。

「なんと！ただの小石で！」

「そう、あれこそが草薙護堂の権能の一つ、自身の手で触れたあらゆる物を最高位の呪具に変え、自在に操る『ナイト・オブ・オーナ』なのです！」

エリカが興奮気味に解説する。彼らの眼下では行われる戦闘はすでに終わろうとしていた。

全身に傷を負った獅子が今度はその牙で護堂を仕留めようと突撃する。が、その攻撃もまた空振りに終わる。手負いの獅子は恐ろしいというが、捨て身の一撃であろうと護堂の脅威にはなりえない。獅子の動きを読み、手に持つ石の棒で顔面を強打する。獅子は完全に手玉にとられていた。

「そろそろヤメにするか」

正直飽きたしな。

最後は言葉に出さず胸にしまい込む。同時に右手の平に力を集中させる。

護堂の手に真っ白な輝きを放つ球体が出現した。

人工の光とは根本的に異なる、命の息吹を感じさせる『太陽』の力だ

「これで終わりだ」

野球ボールほどの大きさの太陽は、護堂の手を離れ、目にもとまらぬ速さで獅子の頭を打ち抜きその巨大な体を内側から焼き尽くす。白い炎に包まれて銀色の獅子は断末魔の叫びを上げるまもなく消えていった。

第四話 決闘（後書き）

やっと終わったー自己最長記録ですね。たぶん。
次回からは日本です。護堂やっとなります。
これからも応援よろしくお願いします。

第五話 巫女と忍者

都内某所に七尾神社は存在する。

都心のまつただ中であるためか大きな神社の割に鎮守の森と呼べるほどの木々はない。

それでも緑に囲まれた社の中はなかなか静かでここちよく、二百段近い石段を登った高台にあるために景色もよい。

境内には拝殿から少し離れた場所に社務所がある。

そのとある一室でふたりの人間が向かい合って座っていた。ひとりには二十代後半ほどの地味な男性、もうひとりは白衣と緋袴をまとった茶色味の強い髪をもつ少女だった。

男性の名は甘粕冬馬といい少女の名は万里谷祐理という。

「正史編纂委員会の方がどのようなご用があるのですか？」

不審に思い祐理は尋ねた。

冬馬は正史編纂委員会（日本呪術会を統括する公的機関）の使者として自分を訪ねてきた。つまり十中八九自分の能力を必要としているということだろう。

「いえね、我が国に未曾有の災厄となるかもしれない火種がありまして、少々手を焼いているのですよ。そこで、媛巫女のお力を貸していただきたく思い、ぶしつけにもおじゃまいたしました。あなたの霊視の力が必要なのです。ま、それ以外にもふたつ理由がありますけどね」

日本古来の呪術を継承する魔術師、霊力者たちがいる。

万里谷祐理もそのひとりだ。

関東一帯を霊的に守護する一団に属し、若いながらも媛と呼ばれ

る高位の巫女として責務を果たしている。そのなかでも祐理は非常に強力な霊視力を持ち、その力は西洋でも名が知られているほどだ。とはいえ祐理はまだ十五の少女である。最前線でバリバリ働くことはない。平時は学校に通い、その後神社で巫女の基本的な職務を行うだけなのだ。

そのため肩書きは正史編纂委員会霊視部外部協力者となっており成人するまでは緊急時以外で委員会の仕事をすることは禁じられている。

青少年の安全と健康のためであり、能力の乱用を防ぐためだ。

そういった法律がありながらあえて祐理に話をするのだから甘粕冬馬の言葉に嘘はなく事態が一刻の猶予もないものであるうことは想像に難くない。

「私はいったい何をすればよいのでしょうか」

「とある日本人の少年がいます。彼と会って、その正体を見極めてもらいたい。草薙護堂といましてね、真正銘のカンピオーネではないかと疑惑のある人物なのです」

「カンピオーネ？」

欧州における最大最強の魔王を呼ぶ称号。

思いがけない単語に、祐理はひどく驚いた。

「あなたを選んだ理由のひとつがもうおわかりですね？あなたは幼い頃、デヤンデル・ヴォバンと遭遇した経験をお持ちだ。鑑定もたやすいはずですよ」

「でもカンピオーネになるためには神を殺める必要があるんですよ。そんな奇跡を起こせる人がこの国にいたなんて！」

最強最古の魔王デヤンデル・ヴォバン。

祐理と直接の面識のある唯一のカンピオーネ。

その猛虎の双眼じみたエメラルド色の瞳は睨み付けるだけで生者を塩に変えるという。

祐理にとって最大のトラウマの元凶であり、恐怖の対象である。

「同感です。だから私たちも草薙護堂が本物だとは信じてこなかった。いや、信じたくなかった。しかし、様々な状況証拠が積み重なりました、そうも言えなくなってきたのです」

「状況証拠といいますと？」

「グリニッジの賢人議会によれば、草薙護堂は今年の一月イギリスのウェールズでランスロット・デュ・ラックを倒したとされています。またすでにこのときもう一つ別の権能を所持していてそれを用いて戦った可能性が高いとか」

「それではすでに二柱も倒していると言うことですか！」

祐理から驚きの声上がる。

それも当然。日本中いや世界中の魔術師たちを集めてもたった一柱の神すら倒せないかもしれないのだから二柱も倒したと聞いては驚かない方がおかしいというもの。

「ええ、それに関して私たちも調べてみたのですよ。草薙護堂は中学校の三年間をイギリスで過ごしてましてね、その間の資料はわたしたちのもとにはほとんど無いんです。また小学校も原因不明の病で長期入院していてほとんど行っていないようです」

「それではやはり二柱ともイギリスで倒したと言つことでしょうか？日本にいる間は外出もままならなかつたでしょうから」

外出できなければ神と関わることもない。祐理の意見は至極当然のものと言えた。

だが、冬馬は頭を振ってこう答えた。

「いえ、我々は草薙護堂が最初に権能を得たのは日本であると考えています」

「それはなぜでしょう？」

「あくまでも状況証拠からの推測なのですが、三年前のフェーズ6をおぼえていますか」

『フェーズ』とは日本における霊的災害の規模をあらわす呪術用語である。1が最も低く6が最大。

まつろわぬ神の降臨はフェーズ6にあたるのだ

「はい大変な事件でしたから。確か降臨なさつたのはアマテラスとオオクニヌシで空港を中心に戦われていたとか……まさかそのときに？」

「調査の結果、当時、その空港からのイギリス行き便を草薙護堂が予約していたことがわかりました。アマテラスがオオクニヌシを倒しその後草薙護堂に倒されたというのが我々の見解です」

「つまりこの方の権能はアマテラス……太陽神の力」

「イギリスでの戦闘跡から炎に関係のある力であるとされています」

からほぼ間違いないでしょう。それにアマテラスは日本で最も高貴な神霊ですからね、元・御霊部の連中にも注意しなければなりませんよ。特に双角会は土御門夏目こともあって最近活発になってきていますから・・・まあ、そちらは呪搜部に一任してますからいいんですがね」

妙に疲れたような雰囲気醸し出す冬馬。

彼の服装がだらしく見えるのは決して彼がだらしないのではなく、ここ最近非常に忙しいだけなのだろう。たぶん・・・
気を取り直して冬馬が言葉を続ける。

「先日、草薙護堂はイタリアを訪れています。呼び寄せたのは魔術結社《赤銅黒十字》のエリカ・ブランドゥリ。しかも、帰国した彼は曰くありげな神具まで携帯していたそうで」

「神具」

その言葉が祐理の心に引っかかった。
媛巫女としての感が訴えていた。これを無視してはいけない。と
つつもない災厄を呼び込むことになる。

「草薙護堂という方について詳しくお教えてください。私たち同様、何らかの呪術を修めた方なのですか？それとも武芸の心得がおりとか？」

この件全力で取り組む決意を固めて、祐理は訊ねた。

ここで指名されたのも何かの縁、なによりも媛巫女としての使命感が祐理から恐怖を取り去った。

「呪術や魔術に関しては、素人のはずです。権能を使わないのであ

れば武術も同じでしょう。本来なら神と戦うどころか関わることもできない家の出なんですけどね……これを渡しておきます」

甘粕がカバンから書類の束を取り出し、手渡してくれた。

中を見てみると草薙護堂に関する調査報告書だった。彼の能力、個人情報、人柄などが推測まじりに記されている。

斜め読みしていたときふいに祐理の手が止まった。祐理が見ているページは護堂の関係者に関する情報が顔写真付きで載っており、その中に祐理は見覚えのある顔を見つけたのだ。

「この娘は……」

「ああ、それがもう一つの理由ですよ。こちらは完全に偶然だったのですがね……」

祐理の言葉にかぶせるように甘粕が話す。祐理自身、奇妙な巡り合わせに目を丸くしていた。

まさか、そんなところで草薙護堂との縁があるとは思いもしなかったのだ。

第五話 巫女と忍者（後書き）

ついに祐理が出せた！レイヴンズネタも出せた！東京レイヴンズを知らない方はぜひ読んでみてください。black blood brothersのあざの耕平先生の最新シリーズです！！

第六話 妹の追求

ローマから帰国して数日が過ぎた。

週も半ばの木曜日、四月も残りわずかとなり、ゴールデンウィーク前独特の浮ついた雰囲気のある学校を出て少ししたところだ。

もっとも護堂が通うのはいちおう進学校であり、長期休暇前の課題がたつぷりとだされてしまっていたのだが、『千の言語』を持つ護堂にとって英語や国語はあつてないようなもの、よってまじめに取り組むのは数学だけなのだった。

最近の護堂の日課は、自室の押し入れに眠るゴルゴネイオンをあらゆる角度から鑑賞することである。

以前、妹の静香が押し入れをあさろうとした際、見つかるのはまらずいと必死で阻止した結果、なにやら白い目で見つめられてしまったのは記憶に新しい。

エリカ曰く『あれは石に見えて石でなく、神々の叡智を記録する記号に過ぎないから決して朽ちず、決して滅びない』というデータメな代物らしく、護堂の好奇心を大いにくすぐってくれた。

決して滅びないというのでいろいろと試してみたが、結果は言うまでもない。

わかったことはふたつ、メダルにはかすり傷一つつけられないということと触れば支配することはできるということだった。

護堂の自宅は東京都文京区の根津、地下鉄の駅近くにある商店街の一画にあるつぶれた古書店

店主である祖母が四年前に亡くなり、しぜんと店をたたむ形になったのだ。

ちなみにこの商店街には、それなりに東京下町の風情が残っている。

地元民はあまりぴんと来ない人も多いが、そう評する人は多い。かくいう護堂もそのひとりだ。

実際、護堂はこの家での生活をほとんどしたことがない。小学校時代のほとんどは病院で、中学三年間をイギリスで過ごしていたからだ。

記憶に新しいローマやイギリスの町並みとは大違いだ。

「おかえり、おにいちゃん……感心だね、今日は早く帰ってきてじゃない」

いきなり声をかけられた。あいては当然妹の草薙静香である。

護堂はイギリスにいた間一度も帰国しなかった。不定期で連絡を取るだけですませていたのだ。

つまり三年間顔を合わせなかつたわけだが、それが一月前、ちょっとした騒動を引き起こした。

護堂は留学している間に三十センチ近く身長が伸びている。体つきもしっかりとして、顔立ちも子供のそれから、青年のそれに近づいた。もちろん静香も年相応の成長をとげている。

そんな彼、彼女が三年ぶりに再会したらどうなるか？

簡単だ、相手が誰かわからないのである。

もつとも、再会の場は草薙家であり、護堂が先に帰宅し、祖父・一郎と談笑したのち、祖父が外出し、その間に静香が帰宅したという状況だったので護堂は消去法的に静香に気がついたが、妹・静香のほうはそもいかない。

我が家に帰ってみると見覚えのない男（護堂）が戸棚（お菓子入

れ)を物色しているのだ。

まさに驚天動地の心境だっただろう。

一般的にこういった状況の場合、悲鳴を上げるか、逃げて警察へ通報するか二択だが、そこは静香クオリティー。

第三の選択肢 『迎撃』を選択してしまったのだ。

こうして護堂は、三年ぶりの我が家で祖父が帰宅するまで、リアル妹にリアルバットでリアル鬼ごっこイベントへの突入を余儀なくさせられたのだった。

「なあ静香、今の発言おかしくないか？俺はこのところ早めに帰ってきた日のほうが多いはずだ。遅くなるのだって部活のほうに顔を出してるからだぞ」

こうみえて護堂は書道部に所属している。学校でもダントツの身体能力をもっているので書道部だというたびに驚かれるのだが今は関係がない。

「ここ何日かはね。でもさ、土曜日の朝に出てったきり日曜の夜にも帰ってこなくて、月曜は学校さぼったよね。いったいどこで何してたの？」

一つ年下の妹は学ランの護堂と違って制服姿ではなかった。

両手のエコバックに野菜や牛乳、鮮魚といった品々が収まっているところを見ると、夕飯の買い物をしてきたようだ。

「だから泊まりがけで友達の家に行っていただけだって何度説明させるんだよ」

かなり辟易していた護堂は投げやりにならず答えた。このやりとりもほぼ毎日繰り返しているものだ。

「じゃあ聞くけど、その友達って誰？やっぱり女の人？」

「……女だな、うん」

「やっぱりそうなんだ！まだ高一なのに女の人家に泊まりに行つて学校までサボるなんておかしいじゃない！相手はだれ？エリカって人？」

まくしたてるように静香が問いつめてくる。

護堂は女の人の家に泊まりにいったわけではない。きちんと旅行者用のホテルに寝泊まりしていたし女性を部屋に入れることもなかった。

そう訂正しようとした護堂だったが静香の言葉に聞き捨てならぬい単語を見つけてしまった。

なぜその名をしっている！？

護堂が絶句していると静香が言葉を続ける

「実はね、今まで黙ってたんだけど、土曜日にお兄ちゃんがいなくなった後でその女の人から電話があったの」

逃げ道は完全にふさがれた。いや、逃げ道などはじめから無かったのだ。

決定的な証拠を握りながら、あえて護堂を泳がせていたのだ。エリカだけでなく静香までこのような策を弄するとは。

「エリカさんのところで何やってたの？人様にいえないこと？おじいちゃんが予想したとおりになるとはねー。イギリスでもそういうことやってたの？」

「じいちゃんは何て言ってたんだよ！？」

「行き先も告げずに女の子のところへ行くのだから、複雑な事情があるんだろう。自分にも覚えがあるって。ねえ、事情って、なあに？」

突然口調が変わり、子供でも諭すような声質になる。しかしその声には明らかな怒りの成分が含まれている。諭された子供は間違いなく泣き出すし、大人でもすくみ上がるだろう。

怒りが最高潮に達したときの静香は一部のファンから『城楠の白い魔王』と呼ばれその独特のイントネーションは大騒ぎするクラスの男子たちをそれだけで鎮圧した伝説を持つ。

特に頭に血が上り逆上していた男子に対して放った「少し、頭、冷やそうか・・・」はあらゆる行動を強制停止させる究極の言霊として彼らの心に刻み込まれた。

あえて呪術的解釈を求めるなら乙種言霊とでも言おうか。

護堂はまさしくへビにいらまれたカエルだ。だがここで怖じ気づいてしまうとさらにつけ込まれてしまう。ここは兄として毅然とした態度をとらねば・・・

「後ろめたいことは何もない。俺はじいちゃんとは違う。あいにくと恋だの愛だのってのはまだよくわからない。だからおまえが思ってるようなことは絶対無い。神に誓う」

『神に誓う』などという台詞は死語と言っていいかもしれない。ましてすでに神を二柱も殺している護堂が神に誓っても全く説得力がない。

だが、ここで護堂は伝家の宝刀を抜く。

静香の頭にポンと手を乗せ、落ち着かせるようになで回す。昔から静香はこうすると落ち着きを取り戻すのだ。三年たってもそれは変わらない。

「説得力はない・・・とはいえないけど・・・じゃあ今度からは絶対嘘はつかないよね。口先でごまかせるほど私は甘くないからね！」

「ああ、この話はこれでおしまいな」

「おや、ふたりそろって帰ってくるとは珍しいな」

書棚の古書を眺めていた祖父・一郎が言う。

清潔感あふれる服をパリッと着こなし、物腰も知的かつ穏やか。七十過ぎのくせに色気すら漂わせるおそろしくあか抜けた男だ。

「もしかすると、静香はついに護堂を締め上げたのか？首尾はどうだった？」

「なんていうか微妙って感じ？女って言うのは認めただけど、ただの友達って感じなんだよね！。まあ、今後のお兄ちゃんの態度次第で真偽ははっきりすると思うけどね」

「ふたりそろって物騒な会話はやめてくれ！静香！この話はおしま
いって言っただろ」

まるで全て見ていたかのような鋭さで事情を見抜く祖父。
兄への信頼感を欠いた妹の発言。

失ってしまった平穏な日々を思って護堂はため息をついた。
それにしても失ったものなんと大きなことが。

にっこりと笑う祖父の笑顔の裏は『そう堅いことを言っ
な、おまえももつと羽目を外しなさい』である。

一家の大黒柱が実質騒動を認めてしまっているのだ。自分のばか
げた体質のこともある。これではいつまでたっても平穏な日々を
手に入れることはできない。

その答えに至り、護堂はさらに大きなため息をつくのだった。

草薙家の食事は基本的に一郎が担当する。その日の夕食も当然一
郎の料理だ。

メバルとタケノコにつけ、タコと大根の煮物にサラダ、それに
ごはんやみそ汁など。和食中心の献立だ。

祖父の舌は非常の肥えているようで、味にはうるさく料理がうま
い。帰国当初、護堂は大げさにも涙してしまっただけだ。

これほどうまい料理は少なくとも三年は食べていない。

きれいに食べ終えてみんな後片付けをしているときだった。
居間の隅に据えられた電話機が鳴り出した。

「あ、いいよ、あたしが出るから。――はい、草薙です。
どちら様でしょう？」

と、洗い物をしていた兄と祖父に言っつて静香が出た。

「ま、万里谷先輩ですか？ いったいどうなさったんですか、あたし
の家にお電話をくださるなんて……」

洗い物を終えて戻つてくると話はまだ続いているようだった。

「は、はい。たしかにいますけど……どうして先輩がうちの兄
に？ 確かクラスちがいましたよね？ あ、いえ、そんな気になさらな
いでください。はい、はい、わかりました。ご、ごきげんよう……」

「ごきげんよう！？ 護堂はおどろいた。

自分の話をしているようだったが、別れの挨拶ほどではない。

電話の相手は自分と同学年のようだが、ごきげんようなどと自然
に出てくる猛者がいようとは

「……お兄ちゃん。ちょっと座りなさい。今から聞くことに正
直に答えてね」

これはまさか

護堂は直感的に危機を感じ取った。静香から唇間と同じような気
配が漂ってきたからだ。

「お兄ちゃん。いつの間に万里谷先輩と仲良くなったの？」

「は？」

「いったい何が来るかと身構えていたのに、妹の質問は全く持つて意味不明だった。」

「誰だ、その人？俺の知ってる名前じゃないはずなんだけど」

「ほんとうなのそれ？じゃあこの話は置いて。城楠の高等部でだれが一番美人かって知ってる？」

「知らない。誰？」

「私の茶道部の先輩で一年生の万里谷祐理さんよ。並び立つものはないってくらいで、中等部の頃から有名だったんだから。おまけに頭もいいの。成績は常に五位以内。しかも超お嬢様なんだから」

途中から妙に自慢げに話す静香。

自分の知り合いにすごい人がいると、ついつい自慢したくなるという人がいるが、どうやら静香はその類のようだ。

そのおかげか怒りのバロメーターが大幅に下がったように見える。

「それで？なんか俺の話をしてたっばいけど、なんだったんだ？」

「ああ、そうそう、万里谷先輩がね、急な話で申し訳ないんだけど、お兄ちゃんと会ってお話したいことがあるんだって。お兄ちゃん、まさか万里谷先輩が世間知らずなのをいいことに、言葉巧みにたぶらかしたりしてないでしょうね！？」

「見ず知らずの人間にそんなことできるか！」

「じゃあ何でお兄ちゃんに会いたいなんて電話がかかってくるわけ？そっちのほうがおかしいじゃない！」

「だからほんとに知らないって。そもそも違うクラスの美人に接点があるわけ無いだろ！」

悲しいことに、日本に護堂の知り合いはほとんどいない。家族とクラスメイト、あとは商店街の幼馴染みの徳永明日香くらいのものだ。

しかし、静香は冷ややかに兄を見つめながら言った。

「どうかな？最近のお兄ちゃんはたたけばホコリが出てきそうなことばっかだし・・・あ、そうだ。万里谷さん、最後に言ってたよ・・・お兄ちゃんが最近東京に持ち帰ってきたものを見せてほしいって。これ何のこと？」

この伝言で疑問は一気に氷解した。

ゴルゴネイオン以外の心当たりはない。

あの魔術師共の同類ならばどんなに奇天烈な人間でも不思議じゃない。むしろ納得というものだ。

平穏な日常は二度と戻らないのかと、憂鬱になる一方で心の片隅にこれから起こる厄介ごとを心待ちにするかのような好戦的な感情が生まれていることに護堂自身全く気づいていないのだった。

第六話 妹の追求（後書き）

長くなつてしまいましたね。 なんとしてもここまでは終わらせたか
つたんです。

いや、それにしても静香が、ちょっとね、うん、なんかすいません

第七話 王と巫女と闖入者

明くる日の放課後、護堂は七尾神社を目指していた。しきりに同行したがる静花を説き伏せ、いったん帰宅し、私服に着替えて外出する。

だいたいの場所は事前に調べていたが、実際に向かってみると、入り口が何ともわかりにくい。

やっとのことで参道を見つけ出し、やけに高い石段を登り切った。護堂は七尾神社に到着した。

鳥居をくぐり境内に足を踏み入れる。

出迎えてくれたのは巫女装束の少女だった。

「よくいらしてくださいました、草薙護堂様。カンピオーネである御身をお呼び立てした無礼、お許しくださいませ」

と、巫女さんは頭を垂れた。巫女装束といえば白と赤のコントラストだと思っていたがなぜか目の前の巫女は白と深緑のコントラストだった。

彼女が顔を上げた瞬間、護堂はなぜ静香があればすごいと言ったのか理解できた。

「万里谷祐理と申します。昨日はいきなりお電話をおかけして、失礼いたしました」

やや淡い色合いの、栗色の長髪が揺れる。

万里谷祐理は、たしかに吹聴したくなるような美少女だった。美しいだけでなく、しっとりとした上品さと聡明さが顔を眺めるだけで伝わってくる。

エリカもまた美しいが、やはり日本人とイタリア人の美しさは違

うのだとここで護堂は実感した。

「あー、君も魔術師って奴？日本の連中に会うのは初めてだ。」

「あまり十把一絡げにくくられたたけはないのですが、魔術師というご認識に大きな誤りはありません。」

「へーなるほどね。日本の魔術師って言うと陰陽師か坊さんくらいしか思いつかないんだけど、君は陰陽師かなんか？」

「確かにこの国において陰陽道は最も普及している呪術体系ですし、一般的な魔術師はまず始めに『汎式陰陽術』というものを習いますが、その多くはそこから自分の得意分野を選び極めていきます。私の場合は、霊視術を得意としております」

汎式陰陽術というのは第二次大戦後に整えられた最も新しい陰陽道で、大戦中に魔術の軍事利用をもくろむ政府と近代最高の陰陽師土御門夜光によって打ち立てられた、日本に存在するほぼ全ての呪術を従来の陰陽道と融合させた『帝式陰陽術』を下地として、戦後、そこから宗教色を抜き取った‘わかりやすい’陰陽道のことだ。

全ての呪術を取り入れたが故に、汎式陰陽術を学ぶだけで全ての呪術の基本を学んだことになるのだ。

なるほどね・・・だいたい読めてきたぞ。

護堂の質問にしっかりと答えてくれる万里谷だが、もともと護堂に魔術の知識はないのだから汎式などといわれてもピンとこない。

このやりとりの中で護堂が注目したのは、政府と魔術師が協力関係にあるということと『霊視術』という単語だ。

ここから護堂は今回の呼び出しの裏には政府の意図が絡んでいる

のではないか、そしてその目的は霊視術を使ってゴルゴネイオンの力を確かめるためのものではないかと推測したのだ。

途中から気になっていたのだが、この神社、人に気配がない。辺りを見回してみても人っ子一人いない。

「・・・ええと、万里谷さんひとりだけ？誰か他に人はいないの？」

女性とおつきあいをしたことのない護堂としては、こんなにきれいな娘と二人きりというのは精神的にきつい。

恋愛には興味がないと公言している護堂であるが、別にホモではないし、人並みの羞恥心もある。

ただ男友達と騒いでいる方が楽しいというお年頃なのだ

「はい。今は私一人しかおりません。ですから、御身の逆鱗に触れるような失態がありましたも罪は私一人のものとなります。どうぞ、お怒りは我が身のみ下されるよう、ご寛恕を請い等ございます」

「あの、万里谷さん？今変なこと言わなかった」

「荒ぶる魔王たる御身のお怒りは、私ごときを殺めたところで収まるものではないと承知の上で申し上げます。何卒、関わりなき無辜の民を戯れに踏みつぶすような真似は、お慎みくださいませ。全ての罪はどうか私一人に帰するものとご容赦ください」

やたらかしこまった口調で訴えられた。

「・・・これはもしかして、諫言というやつか？暴君や暗君にたいして、命をとって家臣がいさめの言葉を奏上するというアレか？」

「いや、あのな、俺はべつに君をどうこうするつもりはないし、怒ったからと言って人に迷惑をかけるようなことはしないぞ。カンピオーネだからってそんなにかしこまらなくてもいいって」

「ご謙遜を。私は以前、草薙様の同胞たるヴォバン侯ともお会いしたことがございます。そのときのことは生涯忘れることはないですよう……」

そういうことか……

護堂は得心がいった。

カンピオーネの中で最も恐れられる存在。デヤンデール・ヴォバンと遭遇したことがあるのならカンピオーネ＝恐怖・魔王となってもおかしくない。

自分も彼のことは噂程度だが知っている。わがままし放題の偏屈じいさんらしい。

今回この娘が自分の相手をしているのもその経験を買われてのことだろう。

だからこそ護堂は彼女から『強さ』を感じ取った。

カンピオーネに対して恐怖を抱いているのなら、きっと今このときも役目を放り出して逃げてしまいたいという思いに駆られていることだろう。

しかし祐理は逃げることなく、たった一人で自分と向かい合っているのである。自分と同じ年の、まだ十五の少女が、である。

何て健気なんだろう……

護堂は彼女に好感を持った。ここはなんとしてでも誤解をとかなければ……

「俺はヴォバンのじいさんとは違うぞ。そうだ、万里谷さん同い年なんだからその話し方やめてくれ。タメ口でいいよ。俺もそうするからさ」

できるだけ祐理のトラウマを刺激しないように注意して相手の相手の目線に立つことを意識する。

自分を信じてもらうために、最も必要なことだと思っている。

「申し訳ございません、私の口の利きように至らぬ点があったのですね。失礼をいたしました。……ところで、タメ口とは何のことでしょう？」

なんと、お嬢様の辞書にはタメ口は載っていない言葉だったのか。しかし普通は友達同士の会話とかで出てきたりしないのだろうか？もしかするとお嬢様すぎて友達が……そこまで考えて護堂は思考を止める。これ以上人の都合を詮索しても無意味だ。

「敬語はなしにしてくれってことだよ。おれは君のことを万里谷って呼ぶから、君も俺のことは草薙でも護堂でもあだ名でもいいから」「そんな！？困ります。身分だってちがいますし、男性を呼び捨てにしたことなんてありませんし……」

「俺がカンピオーネっていうのを意識してるんならやめてくれ。妙な力を持つてはいるが、一介の高校生に過ぎないんだから……」

それに、俺なんかよりも君のほうがずっとすごいと思うぞ」

この発言に祐理は泡を食ったように取り乱した。

「えっ、ご、ご冗談を。あなた様はその気になれば私など、なすすべもありません」

「確かにそうかもしれない。でも、そんな相手に君は逃げずにたった一人で対峙してる。俺なら逃げるね。間違いなく。だから君はすごいんだよ。もっと自信を持っていい。あと、タメ口忘れてる」

警戒心を解くように語りかける。ここで笑顔も忘れない。表情のない相手よりもずっと親しみやすいからだ。

「は、はい・・・努力いたします、その、草薙、さん」

よほど男性と話したことがないのだろう。顔を真っ赤に染めてややうつむきながら話す祐理に、護堂はうなずいた。

同い年の娘に『さん』付けされるのもくすぐったいが、『様』よりは百倍ましだ。

「では、草薙さんにお願ひがあります。あなたがローマから持ち帰ったという神具を、お見せいただけませんか？」

まじめな表情にもどって、祐理が訴えた。

「ああいいぞ。でもその前に確認したいことがある。このメダルの

ことをどうして知ってるんだ？やっぱり監視か何かされてたつてことか？」

護堂とて、自分の価値くらいそれなりにわかっているつもりだ。自分が日本人である以上、日本の魔術師から何かしらのアプローチがあってもおかしくはない。

そう思っていたところにエリカたちと自分しか知らないはずの情報を知っている人間が現れたのだから自分の近辺を探っている者がいるであろうことは想像に難くない。

「監視の有無まではわかりませんが、少なくとも日本に調査員が口ーマに派遣されたことは確かです。」

「調査員ね。たしかこの国には正史編纂委員会とかいうのがあるんだつてな。世界的にも珍しい国営だとか」

これもエリカに教わった知識だ。魔術面に関しては彼女にはとても助けられている。

「よくご存じですね。正史編纂委員会というのは魔術に関する国家機関で日本の魔術師を統御し情報操作などをしています。私のような呪力をもつものは彼らに協力する義務があるのです」

日本の魔術組織が国営なのは理由がある。

古来より日本は呪術を政治の中心においてきた。天皇は政治的権力者であると同時に呪術的権力者でもあったのだ。

強い呪力を持つ者は政治的にも強い発言力を得る。そのため政府は平安の時代より魔術師を手元で管理する必要性を認め、そのための国家機関として陰陽寮を組織したのだ。

この陰陽寮は明治維新とともに廃止されるが、第二次大戦中に土

御門夜光を長官として復活する。

これが今現在の正史編纂委員会となっていくのだ。

「私が草薙さんをお呼び立てしたのは、あなたが真のカンピオーネが見極めよと委員会に指示されたからでもあります。たまたま同じ学院の生徒で、静花さんと親しかった縁もありましたし」

「万里谷たちもいろいろと大変なんだな」

話を聞いて護堂は同情した。

護堂がバッグから取り出したのは黒曜石のメダル。これこそが神具、ゴルゴネイオンである。

蛇髪の妖女を描いた肖像。――――それを一目見るなり、祐理はハッと息をのんだ。

「やっぱり危ない物なのか、これ？」

「おそらくは。古い、ひどく古い神格にまつわる聖印です。蛇神、オロチの印……いえ、もっと根源的な、母なる大地と巡る螺旋の刻印」

目を細めながら、祐理がいう。

「これはただの直感ですが、このメダルは北アフリカで出土した物かもしれません。エジプト、アルジェリア……その辺りのことが何となく思い浮かびます」

「思い浮かぶ？それが霊視ってわけだ。それにしても北アフリカか……イタリアの連中はこれをゴルゴネイオンって呼んでたんだ。」

蛇の髪の女が描かれてるし、メデューサあたりだと思ってたんだけどな」

しかし靈視というのはいした力だ。本来なら資料から調べなければならぬ物を見ただけでここまで……

「草薙さん、一つ質問させてください」

感心していると、いきなり祐理が訊ねてきた。

「これはあきらかに『まつろわぬ神』の神具です。カンピオーネであるあなたがそれに気づかないはずはありませんよね？」

「ん、まあそうだな。やっぱり神様からみだよなあ」

「あなたは、この東京に禍つ神を呼び寄せるおつもりですか！？地元住民の安全をなんだとお思いですか！」

頷いた瞬間に雷が落ちた。

護堂はまじまじと祐理の気品あふれる美貌を見つめ直した。今まで臆長けた風情の淑やかさだったのに迫力が半端ではない。

「それは俺も気になってたけどさ。古代の遺物だぞ？持っていていいって言われたらもうどうだろう？」

カンピオーネ全体に言えることだが、彼らは自分の主義主張を何より優先させる悪癖がある。そして厄介なことにそれらを買き通すだけの力もあるのだ。

護堂の場合は気に入った物は何でも手に入れようとする収集癖だ

ろうか。

「もらいません！大いなる力には大いなる責任が伴うと申します。だというのに、草薙さんはあまりにも無責任すぎます。こんな曰くありげな神具を女性にせがまれるままに持ち帰るなんて」

「女性つてなんだよ！、それにせがまれた訳じゃない」

必死に身の潔白を訴える護堂。なにやら勘違いされているらしい。

「おとぼけになられても無駄です。調べはついてるんですよ」

と、祐理は束になった書類を差し出してくる。護堂に関する調査報告書だ。

「ここになんて書いてあるのか知らないけど、女性関係でやましいことなんて何も無い！イタリアに行ったのだってあいつが半ば強引に・・・」

「まあ、草薙さんたら女性に責任を押しつけるなんて。ますます男の風上にも置けませんね嘘に嘘を重ねるのもいい加減になさいませ」

ついに最後まで言わせてもらえなくなった。ピシヤリと言い放った祐理の顔にはいつの間にか微笑が浮かんでいた。ただし、目は笑っていない

夜叉だ。護堂は確信した。しかもこのプレッシャーは昨日の静花が放ったものと同種、いやそのさらにワンランク上の物だろう。

しかし今回のゴルゴネイオンに関してはそのただの興味本位に持ち帰ったわけではない。きちんとした理由がある。

「あのな、万里谷、聞いてくれ。今イタリアにはカンピオーネないんだ。そんな状況でこれが出たんだから向こうとしても他の国のカンピオーネに頼らざるを得ないだろ？」

「それはそうですが、東京都民の安全というものがあります」

「確かにそうだが、東京には俺がいる。でもイタリアにはいないんだ。それとも助けを求めてきた相手を見捨てて神に蹂躪されるのを見てるってのか？」

「ここまで言えば反論されることはないだろう。祐理の言うことともだが護堂の意見も正論だ。」

「まあ、なるようになるさ。神様が来たら俺が責任もって戦ってやるぞ」

「わかりました。そこまでおっしゃるのですしたらもう何もいません。」

やや不服そうだが何とか納得してくれたようだ。

「……そして気づいた。」

軽やかな足取りでこちらに向かってくる、やたらと見覚えのある人物に。

「待て。おまえが何で、そこにいる？」

「久しぶりね、護堂。また会えて嬉しいわ。何かおもしろいことになっていたようだけど、もう終わったの？」

おもしろいことは何もなかったが、この急展開に護堂はツッコム

のを忘れた。

- 驚く護堂の視線の先には、いるはずのない人物 - - -
- - - エリカ・ブランドツリの姿があった。 - - -

第七話 王と巫女と闖入者（後書き）

日に日に長くなっていく。

とにかくっ、次は待ちに待ったvs女神……まではいいこととおもいます

第八話 再会

「どうしたの？まるでメデューサにみつかった侵入者みたいな顔をして」

蜜と黄金を溶かし込んだような声でエリカが言う。

本来心地いいはずの呼びかけに、護堂はため息をついた。

「そりゃ、会うはずのない人間と出会ったからだろ。何でおまえが日本にいるんだよ？」

「あら、そんなの護堂の手伝いに来たからに決まってるでしょ？まさか私たちが厄介ごとを人に押しつけて放置するような恥知らずだとも？」

近づいてくるエリカはやれやれといった様子でそう言いはなった。なるほど確かに誇りを重んずる彼女たちイタリア騎士ならばこれくらいしても不思議ではない。

「そうか、そりゃありがたい。それで何か進展はあったのか？こっちは北アフリカから出土したものらしいってことくらいしかわかってないんだが」

エリカたちも自分にゴルゴネイオンを預けてから今まで調査を続けているはずだ。神様について何か新しい情報を持ってきてくれていたかもしれない。

「残念ながらほとんど進展はないわね。ただ一つだけ、女神様はもうこの国に入ってしまったってことくらいね」

「なっ！もう入ってる！？」

祐理の顔色が蒼白になっている。巫女の靈感とやらで不吉な前兆を感じているのかもしれない。

「そ、それで降臨した『まつろわぬ神』は今どこに？名前は？神の御名は何とおっしゃるのですか？」

護堂に『わかってるわよ』とうなずいてから、エリカは祐理へ向き直った。

「少し前から聞いてたんだけど、あなたは霊視能力者のようね。ちようどいいから、どこの神様が来たのか託宣してちようだい」

「託宣？そんなことできるのか？」

「たぶんね。今ここにはゴルゴネイオンがあり、あの女神と直接であつた護堂もいる。その娘が真の霊視術師なら可能なはずよ」

霊視術というのはそんなこともできたのか。だったらはじめからそうしていれば早かった。

「ということなんだけど、もし良かったら協力してもらえないか？この通り」

護堂は祐理に頭を下げた。

神と対峙する際、相手の正体を知っているのといないのでは明確な差が出る。

神の名がわかれば、その能力が予想できる。神話をもとに対策を

練ることもできるかもしれないのだ。

「まったく……仕方ありません、やってみましょう。その石をお貸しください、護堂さんも手をお預けください……。あなたは以前に『まつろわぬ神』と遭遇したときどのような印象をお持ちになりましたか？」

右手にゴルゴネイオン、左手に護堂の掌を持ちながら、祐理がささやく。

ひどく厳粛な雰囲気護堂の体が自然にこわばる。

「そうだな……。あのときは……。夜かな。夜の神様って感じだったな」

「夜……。夜の瞳と、銀の髪をもつ幼き女神……。いえ、幼いのではなく、その位と齡を剥奪された女神……。故に小さく……。故にまつろわず……」

一言も教えていない女神の特徴を祐理がつぶやいている。霊視つてすごい力だな、と護堂はあらためて感心した。

「その御名は……ええ!？」

不意に祐理が目を見開き、絶句した。

護堂とエリカは目配せし合った。そんなに驚くほど、すごい名前が出たのだろうか。

「神の御名は……。日本に到来したという神の御名はおそらくアテナのはずです。信じられません……」

見る物全てを石に変えた蛇髪の妖女、メデューサ。

その女怪を討ったのは英雄ペルセウス。

彼を庇護し、導いたのは知恵と戦いの女神たるアテナ。それが、護堂の知るアテナという女神の筋書きだ。

厄介そうな神様の出現に、護堂は頭をかきむしりたくなつた。

アテナの名が判明した直後、護堂たちはあわただしく神社を飛び出した。

もちろんアテナの捜し物であるゴルゴネイオンは持ち出していない。祐理に預かってもらっている。

アテナの居場所はエリカが事前に調べていた。

戦場となるのは千葉県習志野市内の海の近く。

アリアンナの運転する車に乗ってきたために、二人そろって顔が真っ青である。

「アンナさん、どこで免許とったんだ？あの運転で合格させるなんて教習所には問題があると思うんだが」

「言っておくけど、あの子が免許とったのって日本でらしいからね」

それはまたおかしなことだ。なぜイタリアの魔術師が日本の教習所にわざわざ通う必要があるのだろう？

神様に関係のないことを話ながらも、護堂はこれから相まみえる女神とどう戦うのか思案していた。

時刻は午後五時、後もう一時間ほどで日が暮れる。できることな

ら戦いたくはないし、日が暮れてしまつと護堂にとって少々厄介なことがおこる。

身のない話をしながらも、二人は進む。

あの銀髪の少女『まつろわぬ女神』と再会したのは、十分ほど後のことだった。

どこで手に入れたのか、彼女は薄手のセーターとミニスカート、黒いニーソックスなどを着込んでいた。銀髪の上には青いニット帽までのせている。

護堂的にはニット帽がネコ耳っぽく見えるところが高ポイントだ。

「久しいな、神殺しよ。妾はあなたと再会できて嬉しく思う」

見た目は静花と同じくらいなのに、言い回しが妙に古風だ。

護堂は洪面を作り、無愛想に答えた。

「俺は嬉しくない。あんたたちは平和に生きている人間を巻き込んで、いらん騒ぎを引き起こすからな。はっきり言つて迷惑だ」

「エピメテウスの申し子にしては、良識ある発言だ。あなたは珍しい神殺しだな」

どうやら神様は人間の良識を理解した上で大暴れしているらしい。やはり神々の思考は人間には予測できないようだ。

「まずは名乗ろうか。妾はアテナの名を所有する神である。東方の神殺しよ、あなたの名を聞きたい。これより古の《蛇》を賭けて対決する我らなれば、互いの名を知らずにすませる訳のもいくまい」

ただ淡々と、アテナは言葉を紡ぐ。

「草薙護堂だ。言っておくが俺はあんたと戦う気はないぞ」

「あなたは古き都よりゴルゴネイオンを持ち去った。ヘルメスの弟子共に請われての行いであろう？《蛇》を妾より遠ざける者は、何者であれ妾の敵だ」

「さて草薙護堂よ、重ねて問おう。ゴルゴネイオンはどこにある？」

「あんな、俺がおとなしく答えるとても？」

「思わぬよ。が、まずは聞いておきたい。闘神としての妾の心はあなたを敵と認め、戦えと叫んでおる。しかし、知恵の女神たる心は警告を発しておる・・・うかつに手を出せば手痛い反撃を受けそうな・・・そんな気がしてならぬ。故にまずは問う。その返答によって対応を決めよう。和するもよし、争うもよし。さあ、あなたの答えはいかに？」

「できれば和を取りたいんだけどな、俺は」

ただでさえ強力なアテナを、さらに強める神具を渡すわけにはいかない。

「断るよ。ゴルゴネイオンは渡せない。ゴルゴネイオンは諦めてこのまま帰ってもらえないかな？無益な戦いで傷つけ合う必要はないと思うんだ」

もちろんアテナはゴルゴネイオンを欲しており、もともと力づくで奪うつもりだったのだ。当然、護堂の提案はアテナにとって何の

利益もない。

護堂の目的はなんとか会話を続けることで互いの妥協点を見つかることだった。

意外と理性的な女神の姿勢に、話し合いで何とかなるかもしれないと思ってしまったのだ。

・・・これがいけなかった。

歩み寄るアテナに対し、ついを警戒心を緩めてしまったのだ。

「確かに。神々と神殺しの闘争は互いを際限なく傷つけ合う、何処までも不毛なもの。だがな、それ以外にも解決策はある」

すぐ近く、手を伸ばせば届く距離にまでやってきたアテナは突然両腕を護堂の首に回し、引き寄せた。

そのままアテナはつま先立ちで伸び上がりその桜色の唇を護堂の唇に押しつけた。

いきなりのキスに護堂は絶句した。

「諦めよ、草薙護堂。あなたの息吹を、あなたの命を妾は強奪する。暗き地の底、冷たき冥府の荒れ野へと旅立つがよい」

唇を合わせながら、アテナは言霊をはき出す。冷たい吐息とともに、護堂の体内へと流し込んでいく。

この言霊は『死』だ。

急速に体は冷え、足に力が入らなくなっていく。

なぜ知恵と戦いの女神がこんな言霊を使えるんだ？

神々が持つ力は神話に忠実である。

炎の神は炎を司るし、水の神は水を操る。『まつろわぬ神』となってもそれは絶対に変わらない。

変わると言うことは『神』としての自己を否定することにもなるからだ。

「あなた・・・死神の・・・類・・・だったのか・・・」

護堂はつつぶせに倒れながらも女神をにらみ返す。その口から紡がれる言葉はときれときれで弱々しい。

「トロヤの昔よりだまし討ちも戦の作法。うかつすぎなのだよあなたは・・・それにしてもあなたは『太陽』にまつわる神を倒したのだな。あなたの中から我が仇敵の力を感じたぞ・・・だからこそうかつなのだよ」

『太陽』が『仇敵』？

アテナは知恵の女神であり、戦いの女神。『天空神』ゼウスの娘・

いったいどこに『太陽』を嫌う要素がある？

蛇に深く関わり、闇を漂わせ、死すら操る。この女神の正体はいったい何だ？

「賢しげな目をしておる。しぶといな。まだ意志を保つか。それならば冥土のみやげに一つ教えてやろう。たしかに『闇』にとって『太陽』は天敵だが、『太陽』にとっても『闇』は天敵なのだぞ。この二つが雌雄を決したとき、先手を取った方が圧倒的に優位に立てるのだよ・・・」

護堂の跳ね返りを愉しむかのような、アテナの声。

・・・視界も薄れてきた。アテナの闇が命の火を消し去っていく。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！主よ、何故我を見捨てたもう！？」

絶望の言霊をエリカが謡いあげている。エリカの持ちこたえる最強の呪文だ。

たいした奴だと護堂は感服した。

魔術師とはいえただの人のくせに神を相手に戦いを挑もうとしている。

エリカのような賢い奴が勝算もないだろうに立ち向かおうとしている。

その理由は間違いなく自分を救うためだろう。だったらここで死ぬわけにはいかない。

幸い、まだ日は沈んでいない。護堂は太陽の力を燃料に命の火を燃やす。

護堂は意識を失うその瞬間まで『太陽』の力を使い続けた。

第九話 復活

意識が鮮明になってくる。

気づけば、護堂は固い寝床に横たわっていた。

「気分はどう？もう起きられる？」

「ここはどこだ？あれからどれくらいたった？」

「どうにか逃げ延びた先の、公園のベンチ。あれから二時間半ってとこね」

護堂はゆっくりと上体を起こした。頭の下だけ柔らかく感じたのは、エリカが膝枕をしてくれていたからのようだ。

「悪い・・・迷惑かけたな」

「迷惑だなんてことはないわ。そもそも原因は私たちにあるわけだしね。にしてもどうやって生き返ったの？そういう権能は持ってなかったわよね？」

護堂のもつ権能は二つ。

武芸者として最高の技術を持ちその手に触れたあらゆるものを己の神具と化して支配する『ナイト・オブ・オーナー』と太陽神の炎を操る『アマテラス』だ。

死の淵からよみがえるような権能ではない。

「それに関しては、ほとんど賭けだったんだよな。ほら、アテナが『闇』と『太陽』は対極にあっってお互いに天敵同士だっていった

だろ。だから、体の中で『アマテラス』を活性化させて呪詛を中和したって感じかな？」

「なにそれ？そんな理屈？なんか釈然としないんだけど……」

とにかく体は動くようになった。立ち上がってみても問題はない。今すぐにもアテナを追いかけたいところだが、敵の正体が不透明な今うかつに攻めるわけにはいかない。相手は自分の天敵であり、何より自分の中に『アマテラス』の力をほとんど感じない。かなり弱まっている。

「それより護堂、今『アマテラス』はどこまで使える？アテナと戦うならやっぱり『太陽神』の力は心強いわ」

「ほとんどだめだな。アテナの『闇』に力を使いすぎた。それに日も沈んじまったし」

護堂の『アマテラス』には使用条件がある。日の光の届かない闇の間では自分を『信頼』してくれる仲間や『笑顔』が必要なのだ。イタリアでの決闘の際、夜間でありながら使えたのは、エリカの『信頼』や街から生まれた『笑顔』があったからだ。

それがわずかでもあれば『アマテラス』をつかえるのだが、今回は『闇』に先手を取られたためか力そのものが弱っている。

「なあ、エリカ。あいつと戦うために情報が欲しい。どうしてアテナが『闇』やら『死』やらを使えたんだ？」

「あれは護堂が考えているようなただのアテナじゃないってことよ」

「ただのアテナじゃない？」

意味がわからない。どういうことだ？

「手短かに説明するからよく聞きなさい。アテナは常に蛇と関わりの深い神だった。さらに言えばフクロウとも」

エリカの解説が始まる。毎度思うことだが、魔術師というのは知識が豊富すぎないだろうか。

「メデューサとアテナは本来同一の女神だった。北アフリカの大地からギリシャに招来される前まではね。つまり元をたどればアテナこそが蛇の女神だったのよ。さらにいえばアテナの母とされる知恵の女神メティスも元は同一の神よ」

カンピオーネとなって以来、神話を読むように心がけてきたが、その神話の来歴に至るまで調べたことはない。そのようなことをすれば膨大な時間がかかってしまう。

エリカの豊富な知識に護堂は感服する。

「アテナは元々北アフリカで生まれ、地中海全域で崇拝された大地の女神よ。エジプトのイシスやバビロニアのイシュタルとおなじルーツをもつ古き太母神。大地の女神であると同時に冥府を支配する闇の神であり、天上の叡智を司る知恵の女神でもあった。三つの属性を常に併せ持つ、三位一体の女神……それがアテナの正体。どう？わかった？」

「まあ大体は……」

俺はおまえがどうしてそこまで知ってるのか不思議だよ。

「アテナの絡繰りはわかった。あとは追いかけるだけだな」

「追いかけるにしてもどうやって？ 言っただけでなかつたけど、東京のほうは今大混乱しているそうよ。あらゆる光が消えて車も動かせないって」

アテナがその本質を解放したことによる霊災だ。闇の力によって光を発するものは照明であれライターであれその力を失うのだ。車のエンジンも同じ。

「大丈夫だ、俺に考えがある」

都市としての機能を完全に麻痺させる異常事態。

大も小も問わず、全ての照明が失われた。

あらゆる車両が動かなくなり、電車の運行もストップされた。

時刻は夜の九時を少し過ぎている。

人通りは昼間よりも少ないとはいえ、仕事帰りの人々や地元住民の姿はそれなりにある。

こんな形で足止めさて、あるものは怒り、あるものは不安そうに周囲の様子をうかがっている。

東京はまさしく混乱の極みにあった。

「東京全域にフェーズ6が発令されたと先ほど各魔術機関に通達がありました。」

七尾神社でゴルゴネイオンを守る祐理のもとに報告に来たのは、正史編纂委員会のエージェント、甘粕冬馬である。

幸い、七尾神社は未だに闇の領域に入っただけではなかった。だがそれも時間の問題だろう。闇の領域は驚くほど早くその勢力を広げている。

すでに江戸川・高等・中央区の三分の一から半分ほどが闇に呑まれ、いまや港区まで浸食が始まっている。

「闇に呑まれた人たちは大丈夫なんですか？」

「今のところ人体に影響が出ているという報告はありません。アテナは人に仇なす邪神でもありません。傍迷惑であっても大惨事にはならないでしょう。もっともこのまま続けばどうなるかわかりませんが」

これはいよいよ、早急に退散願わなくてはなるまい。

だが、ある懸念がだんだん祐理の中で大きくなってきた。

数時間前に草薙護堂は女神に会うと行って出て行ったきりだ。その彼は一向にもどってこない。代わりにアテナのほうがやってきた。

しかも居場所を隠すでもなく狼藉三昧。

近くにカンピオーネがいるにしては無警戒すぎる。

「まさか草薙さんアテナと戦って、もう負けてしまったとか？」

祐理はその可能性に気づき不安になった。

もしそうなら、それは最悪のシナリオだ。

アテナに対抗できるものはおらず、東京は闇の女神の思うままに蹂躪されてしまう。

「あ、あの方と連絡を取ってみましょう。甘粕さん携帯電話を貸してください」

「どうぞ、ご遠慮なく、もし可能であれば、彼にアテナを撃退してもらえないか要請してください。もう、それ以外の方法で収拾はつかないでしょうしね」

相手の返事を待たずに伸ばした祐理の手に長方形の電話機がのせられる。

護堂の番号は別れ際にメモで渡されていた。

すぐに数字を打ち込む。・・・ややあつてから、応答があつた。

『もしもし?』

「万里谷です。草薙さんですね。今、どこにいるんですか!？」

『ええと・・・荒川の近くだから、葛西の辺りだな。そっちは今どこにいる?』

「七尾神社です。今までどこにいらして・・・ッ・・・」

ついに七尾神社も闇の影響下に入った。祐理の巫女としての感がアテナの接近を感じ取っている。闇そのものがゴルゴネイオンを求めるアテナの触覚に思えてならない。

だが闇に吞まれても通話機能は生きているようだ。

『どうした?何かあったのか?』

「い、いえ。神社もアテナの領域に入ったようです。それよりも草薙さん。今まで何をしたらたんですか？アテナはもう港区まで到達してるんですよ！」

『面目ない。実はアテナに出し抜かれてさっきまで死にかけてた』

「死につ！大丈夫なんですか？もし身動きできないようならすぐ迎えに――――」

『ああ、大丈夫大丈夫、カンピオーネって寝てればたいい回復するから。――――今そっちに向かっているけど、アテナに追いつくのは難しいかもしれない。もし俺がつく前にアテナと出くわしたらゴルゴネイオンを捨てて逃げてくれ』

「わかりました。ですがわたしとて武蔵野の媛巫女です。このまま何もしないわけには生きません。ゴルゴネイオンを人気のないところまで何とかもっていきます」

『……わかった。絶対に無理はするなよ』

そこまで話すと祐理は電話を切った。

すでにここはアテナの支配下。いつ何時現れるかわからないのだ。行動は早いほうがいい。

「聞いての通りです。甘粕さん、わたしはこれからゴルゴネイオンをもってどこか人気のないところまで移動します」

そう言うやいなや祐理は神社を飛び出した。

目的地はこの付近にある広い公園か公共施設、これだけの騒動だ、

人はいないだろう。

「待つてください。それならば私も同行します。さすがに神様の相手はできませんが私の力は役に立ちますよ」

「……わかりました。よろしくお願いします」

常にひょうひょうとした態度で緊張感に欠ける男だが、これでもプロの魔術師なのだ。特に夜目のきかない祐理にとってはありがたい助っ人だ。

闇に閉ざされた市街をゆりは早足で進む。

頼りにできるのは月と星々、そして先を歩く甘粕冬馬だけだ。いつもは夜でも明るい。

オフィス街のビルは夜でも窓から明るい光を放っているし、おびただしい数の街灯が夜道を照らしてくれる。

それが現代の常識であり、光のない生活など考えられないだろう。だが今はその常識は通用しない。真の闇がこの一帯を支配していた。

目をこらして腕時計を見てみると、もう夜の十一時に近かった。元々深夜のオフィス街だから、夜更けとなれば昼間よりも人はぐっと少なくなる。

だが、この辺りに住んでいる人もいるし、遅い残業から解放された人もいるはずだ。

無人になるというのは本来ありえない。

しかしあたりを見回してみると人っ子一人いない。皆、家や勤め先に閉じこもり朝を待っているのだ。

祐理が持つ包みの中にはゴルゴネイオンが入っている。

これを持ったままアテナの掌中ともいえる暗黒から逃れられるとは思っていないが、草薙護堂と女神との対決を少しでも被害が少なくなる場所で行わせたい。その一心で、暗闇の街を歩く。

普段、祐理が生活しているのは都心近くだ。そのため、光一つない暗闇というのをほとんど経験したことがない。

言い知れぬ不安感と孤独感に身を震わせていたとき。不意に後ろから声をかけられた。

「見知らぬ神に仕える巫女よ。そなたの持つ蛇の印を渡してもらいたい」

聖なる存在の濃厚な気配が、一步一步近づいてくる。振り返る。

ゆつくりと近づいてくる少女がアテナだと、一目で確信できた。冬馬が祐理をかばうように前へ出る。顔はよく見えないがおそらくこわばっているだろう。

一流の魔術師とはいえただの人間である。ここまで至近距離から神と向かい合うことはありえない。

「古の《蛇》、ようやく見つけた。これで妾はかつてのアテナ、まつろわぬアテナへと戻れる。巫女よ、後代まで語り継ぐといい。三位一体の女王が甦り、再臨した一幕を」

アテナはただ、小さな掌を前へ差しただけだった。

ただそれだけで、祐理の包みはほどけ、黒曜石のメダル……

……ゴルゴネイオンは女神の手の中へと飛んでいった。

「これこそ古の《蛇》。ついに妾は過去を取り戻した」

さらに女神は天に向けて高らかに謡いだした。

「妾は謡おう、三位一体を成す女神の歌を。天と地と闇をつなぐ輪廻の知恵を。妾は謡おう、貶められた女神の唄を。忌むべき蛇として討たれた女王の嘆きを。妾は謡おう。引き裂かれた女神の詩を。至高の父に陵辱された慈母の屈辱を。我が名はアテナ。ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女。されどかつては命育む地の太母なり！かつては闇を束ねし冥府の主なり！かつては天の叡智を知る女王なり！ここに誓う、アテナは再び古きアテナとならん！」

この詠唱進むにつれて、アテナの姿が変わっていった。背が伸び手足が伸び少女の背格好から端麗な乙女へ。

外見だけで言えば十七、八ほどに見える。着衣も古風な白い長衣となっていた。

「まつろわぬ・・・アテナ」

間近で女神を直視した祐理にはその本質が理解できていた。大いなる地母の末裔にして、死と闇の支配者。天と地と闇を統べた落剥せし女王。

「お戯れはおやめ下さい！御身にはまだ戦うべき相手が残っています！」

「ほう。巫女よ興味深いことを申すな。そのものの名を告げよ。あるいは、今妾が思い浮かべている名と同じやもしれぬ」

「神を殺める羅刹の化身、草薙護堂が御身と戦います！彼に勝つまでは、かような狼藉はお止めくださいませ！」

おもしろがるアテナへ祐理は恐怖をこらえながら言い返した。

そのとき、祐理はアテナから冷たい気が漏れだしていることに気がついた。

その危険性を彼女は唐突に理解した。

アテナが発しているのは冥府の冷気だ。まともにあびればただでは済まない。

冬馬も気がついたのかすばやく懐から札を取り出す。

「悪しき冷気を焼き被え！急急如律令^{オーダー}」

投じられた火行符が炎の壁を作り出す。

もちろん炎である以上暗闇の中ではすぐに消滅せざるを得ないが、この一瞬の判断が二人の命を救った。

「ほう。その魔術師もなかなかやるではないか。妾の闇の中で炎を創るとは」

笑みを含んだアテナの声が響く。

「しかしこれからどうするつもりだ？そなたたちだけでこの窮地をどう抜け出す？それともここで妾と術比べでもするか？」

アテナがゆっくりと前へ進んでくる。本来神は人間に興味を示さないものだが、今のアテナはかつてないほど上機嫌だ。目の前の人間と戯れるくらいには。

アテナとの距離は五メートル弱。これ以上の接近を許せば祐理た

ちは冥府の気にあてられて命を落とすだろう。

.....これまでか

あきらめかけたそのとき、遠くからエンジン音が聞こえてきた。

音に続けて祐理の正面方向に光が見える。光源はひとつ。どうやらバイクのエンジン音だったようだ。

信じられないほどの速度でに目の前に現れたバイクは祐理たちとアテナの間に割り込みをかけた。

バイクにまたがる人物はまさしく祐理たちの救世主。神を殺し、その権能を篡奪した魔王。世界中の魔術師たちが王とあがめる存在。

カンピオーネ、草薙護堂その人だった。

第九話 復活（後書き）

なんか最後が投げやり。明日ちょっと忙しいんで。と、うーいいわけで勘弁してください（泣）

第十話 天照

「大丈夫か、万里谷？」

「……はい、何ともありません。こちらの甘粕さんにまもっていただいたので……」

草薙さんは大丈夫なのですか？と訊ねようとした祐理だったが護堂のまたがるバイクを見て言葉を失ってしまった。

見たところ普通のオートバイでありバイクに疎い祐理にはそれがなんというバイクなのか見当もつかないが、その車体からあふれ出す圧倒的な呪力はゴルゴネイオンと同格クラスの神具を思わせた。

「それが、草薙さんの権能なのですね？」

なぜただのバイクが神具級の呪力を持っているのか、霊眼をもつ祐理にはすぐわかった。

「ああ、こいつを使えばこの闇の中でもエンジンがかかるんじゃないかと思ってるね。機動力がはんぱないから、途中でエリ力を降ろしてこなければならなかったけど……さて、俺はこれから決着をつけるから巻き込まれないように下がってくれ」

「わかりました……草薙さん……御武運を」

「いくぞ！」

祐理との距離が二十メートルほどになったとき、護堂はアクセル

を全開にして、アテナへ突撃をかけた。

護堂の乗るバイクはもはや通常のバイクとは一線を画す。そのありあまる呪力を纏つての突進は上級魔術師の構築した結界すらいともたやすく引き裂いてしまう。

しかし、一瞬で時速四百キロオーバーとなつた護堂の攻撃をアテナはたやすくよけてしまった。

「ずいぶんと当世風の馬ではないか。草薙護堂！おもしろい。どこからでもかかってくるがいい！」

だが護堂はこの場で戦うつもりはない。

上機嫌なアテナに護堂は背を向けてそのまま走り出す。

「む？ほう。そういうことか。よろしい。妾は逃げも隠れもせぬ。あなたの選んだ戦場で雌雄を決するでしょう」

そう言うと、アテナは猛追を開始した。

アテナの召喚したフクロウや蛇の大群がいつの間にか爆走する護堂に追いついてきた。

さすがは女神の使い魔、ただの生き物ではないようだ。

護堂はハンドルから片手を離し、手頃な太さの看板を引き抜いた。常人ならば腕が吹っ飛んでいてもおかしくはないが、護堂ならばこの程度の芸当は朝飯前だ。

引き抜かれた看板が護堂の呪力で強化される。

「うおりゃああああ」

かけ声一閃。

振り回した看板が突風を生み出し使い魔たちを消し飛ばした。

「やはり『太陽』以外の権能も持っていたか・・・ならば妾も少し遊ぶか。かような石の都では妾の権能もいささかふるいがいはないのだが、この程度の芸はできる・・・それ！」

「・・・そんなのありがた」

つい振り返った護堂は背後の光景を見てあきれた。

大蛇だ。それも二、三十メートルはあるコンクリート製。

そう、アテナは自らの足下からコンクリートを根こそぎ引きはがしてしまっただ。

巨大な蛇がその頭に女神を乗せて鎌首をもたげる。

「くそ。好きかってやりやがって！」

護堂は愚痴りながらも走る。

もうすぐだ

もうすぐ人のいない場所までたどり着く。

汐留川をこえると背の高い木々が鬱そうと生い茂る森が右手に見えてきた。

----- 浜離宮恩賜庭園。

開園時間はとくに過ぎていているから、無人のはずだ。広い庭園なので、アテナや自分が暴れても誰かを巻き込む心配はない。

護堂はバイクから庭園を囲む壁に飛び移り、そのまま中へ侵入した。

「ここがあなたの選んだ戦場か。ずいぶんと貧相な森よな。人間共はよくこんな小賢しい真似をするが、この島の民は別してそうだ」

石造りの大蛇に乗ってついにアテナも追いついてきた。背の低い壁を薄紙のようにたたき壊し、松林を蛇体で押しつぶしながらの登場だった。

大蛇を相手に護堂は強化した鉄の棒を構える。看板部分は邪魔なものではずしてしまった。

「ふむ。すでに戦う準備はできているということか。以前あったときは大違いだな。さて、出会えば戦い、互いを討滅しあうのが我らの逆縁。あなたと妾、どちらの武が上か、はつきりさせようではないか」

それを合図にコンクリートの大蛇が護堂めがけて這い寄ってきた。いくらカンピオーネといってもあれだけの質量の押しつぶされたらひとたまりもない。

護堂はあわてて飛び退いた。

しかし、相手は蛇狙った獲物をやすやすと見逃すはずはない。素早く護堂にねらいをつけ、大口をあけて飲み込もうとする。

ここで護堂は迫り来る蛇の軌道からわずかに体ははずしてこれを回避する。と同時に地面に突き刺さった蛇の頭に飛び乗った。

「くらえ!!」

蛇の頭に飛び乗った勢いのままアテナに殴りかかる。

今度はアテナが飛び退いて護堂の攻撃をかわす。

「人の作ったただの鉄棒ですら神に届く刃とするか！人の傲慢さを形にしたかのような権能だな草薙護堂！」

「人間は生きるためなら何だってできるしな。人に迷惑かけるだけの神様を倒すことにためらいはないぞ」

蛇の体の上で護堂がアテナに襲いかかる。護堂のもつ鉄棒はもはやただの鉄にあらず。アテナの言うとおりに神すら切り裂き、打ち倒す剣と化していた。

後退する女神を追いながら斬撃を放つ。

「クツ……なめるな！」

その瞬間、護堂の足下が大きく震えた。巨大な蛇が主人の敵を葬らんと動き出したのだ。

「おわっ！あぶね！」

さすがに不安定な蛇の上に立ち続けることはできず、護堂は地面に降り立った。

「形勢逆転だな草薙護堂」

アテナもまた護堂を追うように大蛇の背から飛び降りた。

「なんで降りたんだ？蛇の上にはいたほうが有利だろ？」

「たいした理由でない。あなたは妾の手で倒さなければと思っただけのこと」

アテナが護堂の質問に答えた瞬間、その手に漆黒の大鎌が握られていた。

「さあ、いくぞ！」

アテナが護堂に向けて大鎌を振り下ろした。その速さは疾風迅雷。エリカの突きが可愛く思える。

「クツソオー！」

鎌の側面を鉄棒で叩き、軌道をそらす。

直後、女神はすばやく鎌を持ち替え今度は護堂の胴体へ横薙ぎの一閃を放つ。

これを大きく飛び退くことで回避した護堂に大蛇の尾が振り下ろされた。

護堂はなりふり構わず倒れ込むようにして真横に飛ぶことでかわす。

尾が落ちた瞬間爆弾が破裂したかのような轟音が空気をふるわせた。

見ると、地面が大きく陥没し、大地に蜘蛛の巣状のひびが走っている。

もし直撃を受けていたら……

護堂はぞつとした。アテナといい大蛇といい、一撃食らえばそれだけあの世行だ。

『アマテラス』さえ使えたら……

「どうした？逃げるだけでは何も始まらぬぞ？」

護堂の懐に入り込んできたアテナの鎌を鉄棒で受け止める。

同時にアテナの足下から冥府の冷気があふれ出し護堂の周囲を覆っていく。

闇がその濃度を増し、いつのまにか月と星々の輝きが消え果てて、庭園が漆黒の世界へと変わる。

.....寒い

まるでその一帯だけ真冬が訪れたかのような、肌を切る寒さだ。

「クツ。なんて力だ・・・」

アテナの細腕はその外見からは想像もつかないほどの力を鎌に込め、護堂の鉄棒を切り裂こうとしている。

両者一步も譲らぬつばぜり合いが続く。

これは護堂にとって、決して好ましい状況ではない。

時間をかければかけるほど漆黒の闇がその勢力を伸ばしていく。

やがては住宅街にまで到達するだろう。

今までの暗闇とはまったく違う、冥界の闇だ。魔術に耐性のない一般人にどのような影響があるか予想もつかない。

最悪、大規模な避難が必要になるかもしれない。

この暗闇の中で避難できればのはなしだが・・・

護堂の目は深淵のような暗闇を見通せる。.....だから驚愕した。

周囲に生える草や花があつという間に枯れ果てた。

木々もしぼんでいく

大樹も小木もことごとく萎え、一瞬で実は塵となり、枝はしおれ、幹は干からびた棒きれのように縮んでしまった。

.....これは『死』だ。

滅びと死をもたらず冥府神としての力。アテナは周囲広がる暗闇に自身が持つ最も危険な神力を注ぎ込んでいたのだ。

護堂の体も徐々に冷たくなってきた。

アテナの神力が体内に入り込み再び護堂の命を奪おうとしている。

-. -. -. -. 冗談ではない。

こんなところで死んでたまるか！

護堂は鉄棒に力を込めてアテナの鎌を押し返す。

崩れかけた体制を整え、片手でアテナの鎌をわしづかみにする。

訝しげに眉をひそめるアテナだが、知恵の女神としての力が警鐘を鳴らした。

護堂の手を払いのけようと鎌に神力を注ぎ込もうとするが、時すでに遅し。

漆黒の大鎌は護堂に完全に支配されていた。

アテナが目を見開いて驚く隙に、護堂は鉄棒で女神のこめかみを強打した。

同時に腹部を蹴って鎌を奪い、距離を取る。

たまらずアテナは後退する。そのこめかみからは紅い血がしたたり落ちている。

「ぐ、く、やってくれたな草薙護堂。まさか妾の鎌を奪うとは・・・
・だが今のであなたの力の正体がわかったぞ。」

アテナの鋭く、決るような視線が護堂を捉える。

「ランスロットだな！あなたが殺めた神は、ランスロット・デュ・ラックだ！湖の乙女に育てられた『湖の騎士』にして、ブリテンの

王に仕え最高の騎士と呼び称えられながら王妃との不義密通によって国を滅ぼした『裏切りの騎士』」

ゾクリと、護堂の背筋が震えた。

たった一撃、護堂の神力をその身に受けただけで護堂の力を看破してしまった。

この女神が本当に舐めるのをやめたら、とてつもなく手強い敵になる。

「かの騎士にはフェロットの謀によって丸腰にされた際、楡の枝で窮地を切り抜けたという伝承があったな。掴んだものを己の武器とするその権能、間違いなくその伝承から来たものだな。忌々しき『鋼』め！」

『鋼』という言葉に聞き覚えのない護堂であったが、今は気にしている余裕はない。

アテナの呪詛にかなり体力を持って行かれてしまった。次同じ手をくらえばおそらく力尽きてしまう。

ナイト・オブ・オーナーは見切られてしまった。知恵と戦いを司る女神に、一度見切った技は通用しないだろう。

やはりアマテラスの力が必要だ。

護堂は自身の中にあるアマテラスの力引き出そうと集中する。闇の女神を倒すにはもはや『太陽』にすぎるしかない。

発動するための条件は満たしているはずだ。この街には祐理がいてエリカがいて、静花もいる。その他多いとは言えないかもしれないが学校の友人たちも生活している。暗闇の恐怖から逃れるために、何かしらのゲームをして笑いを作っている者たちもいることだろう。

(いつまで寝てるんだよ、いい加減目え覚ませよ太陽だろうが)

アテナの猛攻をかくぐりながら己に、そして己の中の太陽に語りかける。

「わかっているぞ草薙護堂。妾の力に侵されて太陽神の力は使えぬのであろう。そして騎士の力もはや妾には通じぬ。あなたはよく戦った、だがこれまでだ。諦めるがよい」

再び大蛇の頭の上に舞い上がったアテナの双眸が、わずかに細くなる。

闇そのものをはめ込んだかのような漆黒の目が、視界に収まる全てを冷たく見下す。

.....邪視か！

石。石。石。石。石。石。石。

アテナの視界に入るあらゆるものは、全て石へと変わっていた。踏みしめる地面も石になっていた。風にそよぐはずの下生えの草も、可憐な花弁をもつ小さな花も生い茂る木々も石。

見る者全てを石に変えるというメデューサの邪眼を、アテナは行使したのだ。

「かりそめの死、石の棺。これもまた、古き母の力だ。これでは騎士の力も使えまい」

護堂の体も膝までが石化していた。

だが、周囲の全てはすでに石の骸である。それに比べれば被害は軽い。

アテナは視界内に存在する全てを石に変えることができるのだろ
う。その気になれば東京を石の都にすることもたやすいはずだ。

（祐理もエリカも俺のことを信賴して全てを託しているんだ。ここ
で倒れるわけにはいかないんだよ！）

護堂は必死になってアマテラスを甦らせようと力を振り絞る。

押さえ込まれたからといって、絶対に使えないわけではないのだ
から。

天を照らす太陽が、闇の負けていいはずが無い。

石化が下半身を覆い尽くそうとしたとき、ついに来た。

体の内側、魂の奥底から熱い何かが吹き出してくるのを護堂は感
じた。暖かく生命力にあふれる炎。

極東の太陽神が今度こそ闇の女神の前に立ちふさがったのだった。

第十話 天照（後書き）

とりあえずここまでで・・・

次でアテナを終える予定？

第十一話 決着

「ついに出てきたか」

目を細めて護堂を見るアテナ。

周囲の石化は止まっている。

どうやら、石化の呪力を護堂に集中させているようだ。

それでも護堂は倒れなかった。

体から溢れ出した『金』の炎が鎧のごとく全身を覆いアテナの力から護堂を守っていた。

それだけでなく、この炎は闇の力を無効化するほど強力なものよ。ようだ。

アテナに石にされた部位が自由を取り戻していく。その光をあびた周囲の木々も地面もその色を取り戻した。

「『金』の炎……これがアマテラスの本当の力」

いままでとはまったく違う、いや本質的には変わらないが、そこに宿る意志や力といったものがこれまでのアマテラスよりもずっと強力になっていることに護堂は気づいた。

「これで勝負は振り出しに戻ったか。まさか妾の闇をうけた太陽が再び顔を出すとはな……なにをしたのだ草薙護堂？」

「いや、べつに何かしたって訳でもないけど、強いて言うなら喝をいれただってかんじかな。あとはアマテラス……というかこの国の神の特徴的なの関わってるのかな？」

護堂自身、神についてそこまで知識があるわけでもないがそれでも、カンピオーネとなって以来神話等ある程度は読んできた。

神が神話の枠からはみ出さない以上、この変化も日本の神話から解き明かせる。

日本の神話に登場する神々は多神教であるが故に非常に数多く存在しているが、その大半がきわめて人間的な性格をしている。

彼らは人と同じように生きて死んでいく。

そんな中には、困難に立ち向かい、それを乗り越え、大きく成長する者たちがいる。

『嵐神スサノオ』は八岐大蛇を退治して、大神となっている。

これはただスサノオの武功が評価されたわけでない。

大蛇は『愚かな知』を意味し、欲望のままに働く知恵のことだ。

八つの頭はあれもこれもと考える愚かな迷いであり、その様子が八つの尾にたとえられている。

このことから八岐大蛇は人間の醜い姿を現しており、スサノオは自らの愚かさを切り刻み真の叡智を得た。

アマテラスもまた同じ。

一説によると、スサノオの横暴によって、天の石屋戸に閉じこもったアマテラスというのは現代で言うところの『いじめ』によって引きこもった状態といえる

いやなことが重なると人は心を病み、やがて生活もままならなくなつて引きこもる。このときのアマテラスはまさしくこの状態であった。

このアマテラスを天の石屋戸から救い出したのが『笑い』である八百万の神が催した祭りによってわき起こった『笑い』がアマテラスから復活しようという意志を生じさせたのだ。

こうして復活したアマテラスは心身共に成長し、スサノオを追放している。

護堂の変化も、アテナの闇が天の石屋戸、笑いがエリカや祐理の信頼、復活の意志が護堂の喝に対応させると説明できるのではないか。

「今は考えてるときでもないか」

まず女神を倒す。いろいろと調べるのはそれからいい。

護堂は炎弾を三発撃ちだした。

金色の炎はそれぞれが違う軌跡を描き、アテナへ向かっていく。

「まずは小手調べということか、舐められたものだな」

炎弾がアテナへ直撃する瞬間その右手に現れた黒い鎌によってすべたたたき落とされてしまった。

戦の神らしい空を舞うような華麗な動きだ。

護堂はすかさず次手をうつ。

小さな炎弾をマシンガンのように高速で連射する。鎌で防げず、避けられない連射型の散弾銃。

アテナの判断の速い。

避けられないと見るや、後方で控える大蛇の呼び出し、その陰に隠れてしまう。

一発一発の威力がたいしたことはないためにこの蛇を撃ち抜くことはできない。

ここでアテナに戦いの流れを渡すわけにはいかない。

大蛇ごと吹き飛ばすつもりで火球を創り出す。その直径は五メートルほどだろうか。

金色の太陽が蛇へねらいをつける。

「くうらええええ」

その熱量で地面を抉りながら火球が大蛇へ着弾する。

大爆発と強大な神力でコンクリート製の大蛇は跡形もなく吹き飛んだ。

しかしそこにアテナの姿はない。

「っ！後ろか！」

間一髪気配を感じ取り奪った鎌でアテナの鎌を防ぐ。

首ねらいの必殺の一撃だった。

護堂は全身から炎を吹き出してアテナを攻撃するがこれをアテナは真横に飛んで回避する。

護堂はそのままアテナに追いつがる。

闇と太陽は拮抗しているが接近戦では自分が有利だ。相手は戦を守護し戦士に加護を与える戦の神だがこちらは実際に戦場へ出て戦う騎士の神なのだから。

アテナ自身もそれを悟ったのだろう。

大きく後方へ跳躍して距離を取った。

「フフフ」

不意にアテナが笑みを漏らした。

「フフ、クック。理解したぞ草薙護堂」

「な、なにがだ？」

女神の突然の言葉に戸惑いを隠せない護堂。

「『闇の女神』と『太陽神』、『蛇』と『鋼』、『神』と『神殺し』。ここまで背反する力を持つ者が出会うことなどそう多くない、まるで天の星々によって決められていたかのようじゃないか！」

その表情には明らかな愉悦が浮かんでいる。

まるで、欲しがっていた玩具をやつと手に入れた子供のように無邪気な笑顔で、なかば興奮気味に語り出した。

「三位一体を成す妾と互角に戦い、逆境を跳ね返すその胆力。おもしろい。おもしろいぞ草薙護堂。今確信したぞ、あなたと妾は出会うべくして出会ったのだ。あなたが神殺しとなったのも妾と戦うために違いない。あなたとの戦いは、遙か遠き古の時代より定められた運命だったのだよ！間違いない！」

「間違いだらけだよ！！」

そんな運命はお断りだ。

この世の全てを自分中心に考えているかのような女神の意見に護堂は全力で反論した。

これが日常生活の中ならば、絶世の美少女から超熱烈なラヴコールと受け取れるのだが、残念なことにここは非日常の世界で、正しい解釈としては『わたしがあなたをボコボコにしてその首を刎ねちゃうのは大昔からの運命だったんだからね！』である。そして美少女は巨大な鎌を持った死神である。シヤレにならない。

「そらっついくぞー！」

大地を蹴って急接近してくるアテナ。興を覚え、心なしか神力がみなぎっているようにも見える。

「クソ！さっさと終わらせてやる！」

アテナの鎌に対し強化した鎌で応戦する。

武器がぶつかり神力が迸る。

発生した突風は渦を巻き、木々をなぎ倒す。

「つれないことを言うな。まだ足りんぞ！もっとだ草薙護堂！」

アテナは生涯の好敵手ともを見つけたかのように嬉々として護堂に斬りかかって来る。

今までのクールな雰囲気をかなくなり捨てて冷徹な知恵の女神から荒ぶる戦の神へ変貌したアテナの攻撃は、徐々に苛烈さを増してきた。

対する護堂も負けじと応戦し、隙を見つけては斬りつけ、炎を叩きつける。

戦局は完全に膠着し一進一退の持久戦となりつつあった。

「ああ！もう！この戦闘狂が！」
バトルマニア

「あまり興のないことをいうな。これは運命の一戦なのだぞ。愉しまずして戦いの女神は語れぬ！」

アテナの刃が護堂の頬を切り裂く。

反射にまかせて首を逸らしていなければ今頃は自分の体を眺めていたかもしれない。

護堂の全身には多数の切り傷があり、出血によって服のあちらこ

ちらが赤黒く変色していた。

カンピオーネの快復力ならばたいしたことのない傷だが、アテナの鎌には死の言霊が付与されている。

鎌が護堂を傷つけるたびに傷口から死の言霊が入り込み護堂の体力を奪っていく。

一方、護堂の持つ鎌にも死の言霊はの効果はあるが、もとはアテナの神力であるため鎌は純粹な武器としての力しかない。

このままでは押し切られてしまうのはだれの目から見ても明らかだった。

「そら！」

アテナの一閃がついに護堂をはじき飛ばした。

「うっぐあ」

大きく跳ばされた護堂は鎌を手放してしまい、受け身もとれずに地面に背中から叩きつけられた。

そのまま数メートル転がりかろうじて残っていた木の幹に衝突する。

全身を衝撃が駆け抜け、肺の中の空気が一気にはき出される。

「ゲホツゴホツぐっぐあ」

痛みにつめき声を上げ空気を求めて息を吸う。だが、受けたダメージが大きすぎたのかうまく息が吸えない。

「うっぐが！ガハ！」

のどの奥からこみ上げてきたものをはき出す。

紅い液体が護堂の口から溢れ出した。

立ち上がるうにも体に力が入らない。手足が棒になったかのようなだ。

疲労で意識がかすみ痛みすら消えていく。自分に向かってくるアテナがひどく遅く見える。

あとはただあの死神が鎌を振り下ろせば全てが終わる。

苦しむこともなければ戦うこともない。ただ流れに身を任せれば全て済む……のだが。

カンピオーネはそれを良しとしない。いかなる窮地も乗り越える真の勝利者なのだから。

相手が神であるからこそ、その運命には抗わなくてはならない！

「まっただだあ！」

気力で息を吹き返す。すぐに炎を練り上げ身を守らなければ！

護堂の命を刈り取らんと振り下ろされた鎌を金の炎が受け止めていた。

ただし、それを炎と呼ぶべきなのかわからない。

なぜならば、それは明確な形を持っていたからだ。炎のような揺らぎのない『楯』として。

「なに！」

これにはアテナも驚いた。

数瞬前まで虫の息だった者が不死鳥のごとく甦ったのだから。

「炎に形を与えたのか。フフツ。この状況で新たな力を手に入れるとは！それでこそ草薙護堂！そうでなければな！」

炎でアテナを遠ざけて、右手に神力を集中する。イメージするのは剣。闇を切り裂き悪を討つには剣こそがふさわしい。

金の炎は護堂のイメージ通りに形を成し、鋭い両刃の剣となった。「いくぞバカ女神！」

足の裏で炎を爆発させて加速する。

一気にアテナへ接近し勢いそのまま斬りつける。

もちろんアテナは鎌で防ぐが勢いまでは殺せない。アテナの足を地を離れ、護堂の勢いのまま二十メートル近く押されてしまった。

このまま押し切る！

小刻みにフェイントを織り交ぜながら猛攻を仕掛ける。アテナに反撃の隙を与えない。

やっと護堂が優位に立った。

『太陽』を凝縮した剣をナイト・オブ・オーナーで振るう。アテナにとってはこれほど厄介な敵は未だかつて存在しなかっただろう。

体格の差を利用してアテナを押され込む。

今、剣と鎌はつばぜり合いの格好になっている。

太陽の輝きに照らされてアテナの顔がゆがんでいるのがはっきりと見て取れる。

慢心し戦いを愉しむ心がこの状況を創り出したのだ。

護堂はこのまま剣の形を作り替える。

両刃の剣からより切れ味の鋭い日本刀型に。

集中し、ただひたすら目の前の障害を切り裂くことだけに神力を注ぐ。

そして

アテナの漆黒の鎌が。万物に死を与える死神の鎌が太陽の刀のよって両断された。

「ばかな！」

驚愕しながらも二の太刀をうまくかわす。

アテナは闇の神力を吹き出して再び距離を取る。

護堂は刀を構え、アテナは護堂を注視する。

その距離は目算で二十五〜三十といったところか。

「ここまで心躍る戦は久しぶりだ。だがこのままでは互いに消耗し、やがてはつまらぬ幕引きなりかねない……。だからこそ妾の全力の一撃を持ってあなたを打ち倒し、この戦の華としよう」

直後。大地が震え、闇がその力を増した。

アテナの神力が地面に浸透しそのまま大地を持ち上げた。

「じよ、冗談じゃないぞ！」

それは蛇だった。

ただし今までのそれとはスケールが違う。

全長はざっと百メートル近く、大きさ質量ともに桁外れだが、そこに込められた神力が見かけ倒しでないことを物語っている。

「さあ。雌雄を決しようではないか！草薙護堂！」

アテナの蛇が空から落ちてくる。

あまりに巨大すぎて回避のしようがない。
だからこそ護堂は腹を決めることができた。
大きな炎の矛を作りだして体をその陰に隠す。
力を一点に集中し、ナイト・オブ・オーナーで可能な限りの強化
をして蛇のあごに向けて体当たりをした。

「ふむ。何かしたようだが無駄であったな」

石造りの蛇の上で女神がつぶやいた。

その顔には勝利の喜びはなく、自身の勝利をありのまま受け入れている。

自分は戦いの女神。勝利は自身の下僕。勝利は当然のこと。
ただ少しだけ、それを残念に思っている心もあるが……

残念？なぜだ？たしかにあれとの仕合は心躍るものであったが、
あれは神殺しだ。打ち倒して勝利の美酒に酔いしれることはあれど、
それを残念に思うなどと。

戦いの女神が自身の敗北望むことはありえない。では、なぜ？

だがその物思いの長くは続かなかつた。

アテナの足下が突如高熱を帯び、融解してしまったからだ。

あわてて飛び退いたアテナの視界に一人の人影が現れていた。

「まさか……」

「自分の全力が破られて驚いたか？」

不敵な笑みを浮かべた草薙護堂が立っていた。

「あんたは見栄を張りすぎた。俺を倒すならこんなでかいのを用意する必要はなかった」

それこそがアテナの失敗。

護堂のように莫大な神力を凝縮していれば話は違っていたかもしれない。

しかしアテナはその力を無駄に巨大な蛇に使ってしまった。そのためアテナの神力はその巨体に均一に広がってしまい、護堂の特攻を防ぐだけの防御力を失ってしまったのだ。

「ここからは俺の全力を見せてやる」

護堂が両手を空へ突き出した。

その瞬間、上空に巨大な太陽が現れた。

直径三十メートルを超える金色の炎の固まりは闇を打ち払い一帯を真昼のように照らし出した。

「なん、だと。いつの間にこんな・・・」

アテナが太陽を見て後ずさる。

「はじめからだよ。金の炎が発現してから少しずつ蓄えてたのさ。もつとも使いどころが難しいし、使いこなせる自信も無かったんだけどな」

言葉を失うアテナを見て護堂が続ける

「それじゃあ、終わりにしよう」

護堂がてを振り下ろす。その動きに合わせて太陽が真下、アテナへと伸びていく。上空数十メートルからの太陽の滝だ。

「おおおおおおあああああああああああ！！」

アテナが雄叫びをあげて蛇を操りこれを迎撃する。

だがアテナはすでにその神力を使い切っており、蛇にも力が感じられない。

激突の後、石の大蛇は数瞬もたずに崩れ去り、アテナは金色の光へ吞まれていった。

街灯に明かりが灯り、遠くに見える家々にも光が戻ったことがわかった。

アテナの神力は消え、見慣れた東京の夜空が戻ってきた。

戦闘終了後、まずエリカが現れ、少し遅れて祐理と冬馬がやってきた。

「これがカンピオーネの力ですか。とんでもないですねえ」

戦場跡を見回して冬馬がごちた。

「それで、この迷惑な女神様をどうするつもりなの？あたしは早く

とどめを刺すべきだと思っけど？」

「私も同感です。アテナを放置すれば、いずれ禍根となるかもしれません」

彼女たちの視線の先には、拗ねた少女のような顔で座りこむアテナがいた。

炎に焼かれたからか、単に力を消耗しただけなのか、その背は縮み、数時間前と同じ少女の体型であった。

さすが不死の神性を持つだけのことはある。

あの炎にも焼き尽くされず、再生を遂げたのだ。

「……いや、ヤメにしよう……聞いたかアテナ。この連中があんたを始末しろってうるさいんだ。とつとと、この国からでてってくれよ」

「なぜそうしない？妾を屠れば、新たな権能を篡奪できるぞ。あなたはより強き神殺しとなれるのだ。その好機をなぜ見逃す？」

「おれはもう疲れたんだよ。今日はもう力使いたくないの。それにたかがけんかで殺せるかってんだ。だからおまえはさっさと帰れ。俺の気が変わらないうちに。言うこと聞かせるのは勝者の義務だろ」

長い沈黙の後アテナは頷いた。

「……よかろう。敗者は勝者に従うのみ。妾に土を付けた男の名、この胸に刻みつけておく。さらばだ草薙護堂！」

そうしてアテナは去っていった。

そのあとエリカから小言を言われたり、祐理が噴火したりと大変だったことをここに記しておこう。

第十二話 新たな災難

雲一つ無い青空が広がり、照りつける太陽がチリチリと肌を焼いていく。乾燥した風が砂埃を呼び、体内の水分を容赦なく奪っていく。

「はあ、暑い……こんなに暑いなんてリサーチ不足だったなあ」

手持ちのペットボトルに残った最後の水を飲み干して護堂はつぶやいた。

現在、護堂がいるのはイラクの首都バグダード。数年前まで大規模な戦争をしていた国だが、今は政治も落ち着き、民主主義国家として見事に再生を遂げたのだった。

イラク復興の原動力となったのは、当然石油であるが、それに加えて近年は観光にも非常に力を入れている。

メソポタミア文明発祥の地であり、特に首都・バグダードでは、歴史的建造物が博物館となっており、国を挙げた観光客の誘致事業もあって国籍、人種を問わず多数の観光客が押し寄せているのだ。

護堂もそんな観光客に一人だ。

五月に入り、部活動に入っていない護堂は、ゴールデンウィークを利用して、かねてより興味を持っていたイラクへの旅行を敢行したのだった。

初日は時間の都合もあってホテル近くの小さな市場を見て回っただけであったが、二日目である今日は、綿密な計画を立て、朝から

博物館巡りをしていたのだが……

さすがにこの暑さは想定外だった。

朝はむしろ寒かったのだ。日本と同じくらいには冷えていた。だから飲み水をあまり持たなかったのだが、日が昇って行くにつれて気温もガンガン高くなっていき、二時を回った頃には三十度を超えてしまった。

行く先で水を確保しようと考えていたのだが売り切れてばかり。

放射冷却の恐ろしさをかみしめて急遽、護堂は予定を変更し、イラク随一の繁華街であるラッ＝シード通りにやってきたのだ。

「どっかで水売ってないかな。もしくは喫茶店」

ところが文化の差異か繁華街なのにあまり食物がない。ほとんどがお土産様の工芸品か書店となっており、飲み水など全くない。

イラクは電力関係がまだ遅れているために冷蔵庫などが普及しきっていないのだ。

ただでさえ貴重な飲み水を炎天下の中で店先に置いておくことなどあり得ない。ましてここにある店の大半が露天なのだから。

「まいったなこりゃ。これじゃ熱中症になっちまうぞ、マジで」

噴き出る汗はとどまるところを知らず、のどが渴いて気管がくっついてしまいそうである。

しかもここ、客引きが半端無い。『おう、にーちゃんよってかない？』的な勧誘を何回受けたことか。

民族衣装に身を包んだおばちゃんがいいカモめっけとばかりに手

を掴み、足を掴み引き寄せようとする。
ただでさえ暑いのに人混みとおばちゃんの熱意のせいで体感温度が鰻登りである。

暑い！うつつういしい！何とかしてここから逃げなければ！

護堂は丁重に客引きを断ると、人混みを縫うようにおばちゃんゾーンから撤退した。

繁華街を出て少しすると近代的な町並みが突然現れた。
観光客を誘致するために再開発をしたのだろう。

歴史的、文化的町並みのラツ＝シード通りとは水と油。何ともミスマツチだ。

とはいえ、文句を言ってももらえない。
水分補給が最優先事項だ。

護堂は目にとまったの喫茶店に入ると、とりあえず水とサラダを注文し、一息ついた。

時刻はすでに午後三時を過ぎていたが、避暑地を求める客で店内はほどほどに賑わっていた。
窓から見える景色は一昔前の日本か中国か、先進国に追いつけ追い越せと頑張っているところがありありと見て取れる。

歴史文化を売りにしていることもあって、新しいものと古いものとがうまく具合に混ざり合って、見ていて飽きることがない。

サラダを食べながら通りを行き交う人々を何となく眺めていると

流暢な英語で声をかけられた。

「極東の魔王様は意外にもベジタリアン？」

「!?!」

『魔王』の単語に反応して素早く振り返る。

しかし声の主を見て護堂はさらに驚いた。

自分のことを王だと知っていることにも驚いたが、それが護堂の顔見知りだったというのは護堂の頭を真っ白にするには十分だった。

「おまえは、もしかしてリタか？」

「もしかなくてもそうよ。ハロー護堂」

目の前にいたのはイギリス時代の友人、一つ年下のリタ・モルデイオだった。

茶色味の強い短髪にベージュ色の綿パン、白のTシャツ、その上から空色の上着を羽織っている。

リタとはイギリス留学の一年目に大英図書館で出会ったのだ。

当時、友人がほとんどいなかったこともあり、学校帰りに大英図書館を利用するのが日課となっていた護堂は、同じように毎日のようにやってくる同年代の少女に気がついた。それがリタだったのだ。

「久しぶりだなー。何でこんなところにいるんだよ。つーかいきなり何も言わずにいなくなるからどうしたのかと思ってたんだぞ」

リタは出会ってから一年ほどで突然消えてしまったのだ。それ以

来何の音沙汰も無かったのだが。

「ああ。それね。いまはフランスのギルドにいんのよ『凛々の明星』フレイフ
ヴェスベリア」

「へー。フランスなのに英語っぽい名前……つーかおまえ何？
魔術師だったのか!？」

「いまさら!？あんたカンピオーネでしょ。気づいてなかったわけ
!？」

「気づく訳ねーだろ!大体あときはカンピオーネなんて知らな
ったよ!」

「ああ、なんか頭痛くなってくるわ。これだからカンピオーネは・
・」

リタは学者肌の人間だ、故に理論だとか理屈を重んじる性格なの
だが、そうだったものを根底から覆すカンピオーネはリタにとって
天敵なのだろう。

「ま、まあリタが魔術師なのはわかった。でもいなくなるなら連絡
くらい入れてくれてもいいじゃないか」

「そ、それはわかってたんだけどね。時間もなかったし……心
配してくれたの?」

「もちろん心配したさ。ただでさえ友達少なかったからな、イギリ
ス第一号がいきなりいなくなったら心配するに決まってる」

「友達……うん、まあわかってたわよ、心配してくれてたってことでこころはよしとするか」

「なんか言っただか？」

「いや何も！」

「？」

その後二人は互いの近況報告で大いに盛り上がった。

御堂はイギリスでの生活から、日本の様子、アテナとの戦闘などを話し、リタはイギリスにいられなくなった理由や『フレイク凛々の明星』について話した。

思わぬ再会で長居をしてしまった二人は支払いを済ませて店の外へ出た。

どうやら宿泊しているのは同じホテルだったようで日も暮れかかっていることもあり、一緒に帰ることになったのだが。

「なあリタ、なんか変な感じがしないか」

何か変だ。

護堂はそう直感した。

気味の悪い甘ったるい空気……というのがプレッシャーの様なものを感じる。

辺りを見回してみると人通りが異常に少ない、この時間帯は特に人通りが多くなるはずなのに。

そうこうしている間に人がいなくなり、幅の広い道の真ん中に護

堂とリタのふたりが取り残される形になった。

「ふん、あわてることはないわよ護堂。これはただの人払い・・・その上から防音結界も張ってあるみたいね。たく、どこの三流魔術師よ。穴だらけじゃないの」

「やっぱり魔術関係か！せっかくのGWなのに！」

「べつにあたしたちを狙ってるわけじゃ無いと思うわよ。この国、いま魔術師が二つに分かれて抗争してるみたいだし」

「全然治安よくねーじゃん。それで観光客誘致とかしてんのかよ」

護堂があきれたようにつぶやくのと爆発が起きたのは同時だった。

「っ！！」

「あつちよ！」

爆発現場は割と近い。細い路地を曲がったところにあった。

「結界のおかげで建物に被害はないみたいね。とするとさっきの爆発は炎系か爆破系魔術による攻撃・・・テロではなく純粋な戦闘ね」

するとまた爆発が起こった。二人の正面百メートルほどさきで粉塵があがる。

舞い上がるホコリの中から一人の少女が飛び出してきた。

特に特徴のない一般的な服装で顔立ちも日本人のそれに見える。

少なくとも外見からは普通の少女としか言えない。右手の日本刀を

のぞいて……

少女を追うように怒号をまき散らして現れたのは黒服の集団。黒服と言ってもそれはイスラムの伝統衣装だ。

護堂たちの目の前で黒服のひとりが火球を撃ちだした。

一流を見てきた護堂にしてみればなんてことない火の玉。

少女はそれを刀で鮮やかに切り払うが多勢に無勢、他の黒服が放った雷の直撃を受けてしまい崩れ落ちてしまった。

「なんだあれ！どうなってる！？」

「あの黒服、『死の天使』^{アスラ イール}！？破壊活動を繰り返す反体制派の魔術組織！」

「てことはあの女の子は助けないとはいけねえな」

護堂はバッグから携帯用の警棒を取り出し権能で強化、死の天使へ猛然と襲いかかった。

黒服たちは魔術で応戦したがカンピオーネたる護堂にかなうはずもなく、あっけなく鎮圧された。

「リタ、その娘の傷はどうだ？」

「そんなに深くないわ、治癒が苦手なあたしでも治せるくらいよ」

「そうか。それはよかった。ところでこいつ、なんで襲われてたんだ？」

「それは聞いてみないことには何とも言えないわね、政府よりの組織に『啓示の天使』^{ジッリル}ってのがあるんだけどパスポートからして日本

人だしね……」

リタが手に持っているのは少女の荷物に入っていたパスポート。そこには当然ながら顔写真とともに名前、国籍、住所までが記されている。

「明智光、十六歳の岐阜県在住……完全に日本人だな、いったい何が起きてるんだ、この国で？」

護堂の疑問は灼熱の風に流されて夜の闇に消えた。

美しい満天の星空も今はこの先に待ち受けている困難を暗示しているようで不安を煽るだけ。

アテナと戦ってまだ一週間もしていないのにまたトラブルに巻き込まれてしまった。

護堂は自分の運の悪さをまたしても痛感させられることになってしまったのだった。

第十二話 新たな災難（後書き）

やっとこさ投稿です。

予定を変更してリタ登場！！マイソロ3やったら出したくなかったです。

光秀オリverも出てクロスの様相を呈してきましたね。

ここで出てるイラクは完全にオリジナルの国と認めてください。

ではまた・・・

第十三話 作戦会議

リタが『啓示の天使』^{ジブ}に連絡を取って、黒服たちを拘束してから、倒れている少女・明智光さんを背負ってホテルへと戻った。

これからジブリールの担当者と情報の交換を行う予定なのだ。

「情報の交換といっても向こうが好意的であるとは限らないわよ。実際こうして一所に集められてるのも監視しやすいからだしね」

「そうなのか」

「あたりまえよ。外国の魔術師が自分たちの土地に入って術を使っただけだから警戒して当然でしょ」

「なるほどね。ところで『死の天使』^{アズラー}とか『啓示の天使』^{ジブ}てなんだ？」

「この国の二大魔術組織よ。知つてのとおりこの国は新体制になつてからは民族や宗教の融和を推し進めてきたわ」

「ああ、民族や宗教の枠組みを超えて一つの国としてまとまるうって考え方だな。最初はずいぶん反発もあつたって言う話したが？」

イスラム圏なのだから反発は当然。下手をしたら国が分裂する可能性だつてあつた。政府は飴と鞭をうまく使い分けてなんとか現状を維持しているのだ。

「さいしょはじゃなくて今もよ。特に魔術師たちの反発は強いわ。魔術つてのは神話とかを元にしてるものが多いから、この国の魔術

師たちは一般人よりも熱心な信者が多いのよ」

「ということは、融和政策に反対している連中が『死の天使』^{アズライール} そうでないのが『啓示の天使』^{ジブリール} なのか」

だとしたら面倒だ。政治やら宗教がらみのもめ事は力でどうこうできるものじゃあない。カンピオーネも思想に対しては無力だ。

「おおむねそれであってるわ。ちなみにアズライールってのはキリスト教でいうラファエルでイスラムでは人の死を司る天使とされてるわ。あとジブリールはガブリエルのことでイスラムにおける最高位の天使よ」

「そっか。ユダヤ教からの派生だもんな。それにしても死の天使なんて名前はどうかと思うがなあ」

「アズライールは四大天使のなかで唯一人を創ることに成功した天使だから、十分信仰の対象にない得るわ」

なるほど人類創造の天使だったのか。

イスラム教について何も知らなかったんだなあと思っていると

「う、ここは……」

明智さんが目を覚ましたようだ。

「目が覚めた？」

「あなたは……ここはどこですか？」

そこでリタと護堂はここに至るまでの経緯を簡潔に説明した。

「そうですね・・・すみません、ご迷惑をおかけしました。わたしは明智光といいます」

「リタ・モルディオよ」

「草薙護堂です」

「草薙護堂？」

光はなにやら考え込んでしまった。

そして何かに思い至ったのか、顔を青くしておそるおそる訊ねてきた。

「もしかして草薙さんはカンピオーネだったり・・・」

「ああそうだよ。やっぱり知ってたか」

日本で魔術師をしてるくらいだから名前くらい聞いたことがあっても不思議じゃない。

もう素生を隠す必要もないのであっさりと認める。

護堂としては正体がばれたとしてもこれといって不利益はない。

だがあっさり認められた側の光からしてみればとんでもないことだ。

つい数日前の東京におけるフェーズ6について光はある程度ではあるが知っている。

まつろわぬアテナと日本のカンピオーネとの決戦が周囲にどれほどの被害をだしたのか。

報道ではガス爆発やテロとして扱っているが、あの惨事を引き起こした主犯の一人が目の前にいるのだから

「も、申し訳ありませんでした。そうとは知らずご無礼の数々、全ては私の責任でございます。私はどうなってもかまいません。どうか私の家族だけはお見逃し下さい」

そういつて光はベッドの上で土下座した。
頭を深々と下げて必死に懇願する。

さすがの護堂もこれには驚いた。
まさか知り合っただけの女の子に土下座されるとは思ってもいなかった。

「頼むから顔を上げてくれ！おれは君にも君の家族にも何もしないつて。お願いだから普通にしてくれ！」

女の子を土下座させる趣味はない。

「リタからも何とか言ってくれ」

「はぁ・・・あんだ日本で何したのよ・・・てゆうか女の子にここまでさせる鬼畜に協力するつもりはないわよ」

リタは犯罪者を見る目つきで護堂を睨み付ける。
若干距離を取っているようにも見える

「ちょっとまで、なんだその冷たい態度！俺は何もしてないし鬼畜でもない！」

結局二人の説得には三十分以上の時間を要した。

「失礼します」

ノックとともに一人の男性が入ってきた。
服装は一般的な白いアラブの民族衣装。

「わたしはジブリールのベン・アリ。組織の中では大隊長を務めております」

大隊長とはジブリールにおいて部隊を三つ指揮することのできる有力者。

階級も上から三番目とかなり高い。

「大体の事情は何っておりますが、まだ不透明なところが多く、まずは明智さんが襲われていた理由から伺いたい」

「わたしが狙われたのは、アズラーイルが行おうとしていた大規模なテロの詳細を知ってしまったためです」

「テロ!？」

護堂が驚く中でリタとベンの二人はやっぱりそうかといった様子だ。

「それでその詳細とは？」

「彼らの目的は・・・首都バグダードにてまつろわぬ神を招来することです」

「なんだと！それは確かですか！？」

「間違い有りません。わたしがこのことを知ったのは二日前の晩のことです。わたしは長期休暇を利用してこの国に旅行に来たのですが、その最初の夜に不審な魔力の流れを感じたのです」

「そしてその確認を行ったと？」

「はい。明らかに人のいるところに使う術式ではなかったのです・・・そしてそこでアズラールにであつたのです。彼らの手には強大な呪力をもつた神具と見られる物体がありまして、彼らの術式はその神具に無理矢理呪力を流し込んで暴走させるように構成されていました」

「なるほどね。確かに神具を暴走させればまつろわぬ神が現れる可能性はあるわね。しかも失敗したとしても膨大な呪力は辺り一帯を吹き飛ばすには十分・・・」

神具や魔術礼装などの魔術的物品を専門に研究しているリタにはこの危険性をデータとして理解することができたのだろう。

もちろん護堂だって神具の危険性はいやというほど知っている。

「わたしはすぐにこのことをジブリールの方に報告しようとしたのですが、気づかれてしまってそれから敵から身を隠していたのです」

「なるほど……む？失礼」

ベンの持っていた携帯が鳴り出しすぐに応答する。

「朗報です。あなた方が捕らえてくれた敵魔術師が白状しました。どうやら連中はバグダード内でのテロを諦め、本拠地内で神の招来儀式を行う腹のようです。その場所もすでに特定できています」

「光さんに見つかったことが原因だね」

「ええ。この大規模な儀式には未だ時間が掛かる。露呈した時点で失敗したようなものでしょう。とはいえ我々に時間がないのもまた事実、よって我々ジブリールはアズラールに対して決戦を挑まねばならないわけですが……あなた方にも協力していただきたい」

「大それたことするわね。異国の魔術師に対して協力要請なんて」

「もちろんあなた方個人にも所属組織にも相応の礼はします。正直、今の我々にはすぐに動ける人材はあまりいないのです。まして神に對抗できるものなど、この国には一人もいません」

「それなら護堂一人でもいいじゃない。私たちまで参加させる理由は何？」

「敵は神具と儀式場を二つの都市に分けて儀式を行うようできて。草薙様には神具を、リタ殿と光殿には儀式場の確保に向かっていたきたいのです」

リタは天才魔術師だ。仮に儀式が始まっても途中から止めることができる。光は二日間敵と抗戦したことからわかるとおり戦闘能力が非常に高い。

「わかった俺は引き受けるよ」

「当然あたしも引き受けるわよ」

「わたしも戦えます」

「ありがとうございます……では作戦を伝えます」

ベンの言う作戦はほとんど総力戦とっていい内容だった。

日が出る前に出発し、儀式場と神具をもつ敵を同時に攻略、神具への呪力の供給を絶つというものだ。

儀式場はナーシリーヤの遺跡テル・エル・ムカイヤルの内部であり、神具はサマーワのワルカ遺跡にあるという。

どちらもジブリールが制圧できていないアズラーイルの最終防衛ラインであり、本拠地である。

想定される敵勢力はテル・エル・ムカイヤルに五百人以上。ワルカ遺跡に百人ほど。ワルカ遺跡にはカンピオーネが向かうということで、ジブリールのほとんどはテル・エル・ムカイヤルに向かうことになった。

第十四話 開戦

リタや光をはじめとするジブリールの大部隊はナーシリーヤの北部、都市を目視できる位置にまでやってきていた。

その数は優に千を超える。

その部隊が、気配遮断の結界を張りながら進軍しているのだ。

「ここから部隊を分ける。本隊はそのまま進軍し、敵をたたけ。我々は少数部隊を組織し混乱に乗り都市内へ侵入、目標の破壊を行う」

声を張り上げたのは大隊長であり本作戦の中核、ベン＝アリ。隊長にふさわしい威厳ある声で素早く指示を出す。

東の空が白み始めた。

太陽が現れたら作戦開始だ。

そしてその十分後。

超広域結界がナーシリーヤを包み込んだ。

「作戦開始だ!!!」

「オオoooooooooooo」

雄叫びを上げて都市内へとなだれ込むジブリールたち。
異変を察知して現れた黒服……アズライール
を各個撃破し怒濤の勢いで押し進んでいく。

「リタ殿、光殿、我々もいきますよ!!」

「わかったわ」

「わかりました」

ベンを筆頭にリタ、光そしてジブリールの魔術師が十人ほどで別
行動を取る。

念入りに自分たちの周囲に結界を張ってその存在を隠し、目的地、
テル・エル・ムカイヤルまで走る。

事前情報で得たとおり敵の人数はこちらよりも少ないようだ。

それでも時間とともに体制を立て直し統制を持って挑んでくるだ
ろう。

時間をかけるわけにはいかない。

「ファイヤーボール！」

リタの炎が遺跡の守備兵を吹き飛ばした。

「容赦ないですねっつ」

物陰から躍り出てきた敵兵を光が切り裂く。

強襲班は多少の妨害を受けつつも無事、遺跡に侵入を果した。

「ここからは慎重に行きますよ」

「ここは敵の本拠地……畏に注意しないと」

外から響いてくる爆発音が大きく、連続して聞こえるようになってきた。

戦闘開始から四十分ほど、敵が反撃に転じたのだろうか。

リタたちは薄暗い遺跡の中を細心の注意を払って進んでいった。

「ところでベン。アズラーイールと戦ってて疑問に思ったことがあるんだけど」

声を発したのはリタ。

「なんですか？」

「あの黒服たち妙に打たれ弱いというか……うん、弱すぎる。それに魔術の練度も低い、どうして？」

「それはあの連中の大半がもと一般人だから……正確には魔術を知らないテロリストなのです」

「アズラーイールの誰かがテロリストに魔術を教えたっの？」

「その通りです。そもそも彼らは体制を揺るがすほどの力のない超少数派の組織でした。それがあつた時、民間人や武装組織とつながつて、その数を増やしていったのです」

魔術師同士の戦いならばジブリールがここまで押されることはなかつた。

ところがアズラールはテロ集団。それも神のためなら死んでもいいと思つてゐる信者の集まりなのだ。

そんな彼らを選んだ戦法こそが魔術を使用した自爆テロである。

もともと一般人であるためにジブリールの監視をすり抜けやすく、たやすく町中へ侵入しては自爆する。

そして組織の上層部は表に出ないまま下部の者たちだけが死んでいくというきわめて厄介な組織へと成長したのだ。

「なるほどね・・・ストップ。畏よ・・・今解除する」

リタが壁に手をかざすとサッカーボール大の魔法陣が展開した。

「ふう。これでよしと・・・さあ気を引き締めていくわよ」

「さすがですね。ここまで用意周到に隠された魔法陣に気づくとは」

リタたちはその後もトラップをもともせず奥へと進んでいった。

「見張りですね」

「ざつと十五人でとこかしら」

一行は壁に隠れてその様子をうかがつた。

どうやら連中が守っているのはその背後にある大きな扉のようだ。中から魔力が漏れだしているのがわかる。

「あれが儀式場ね・・・さて、どうするか」

狭い通路で十五人と戦うのは難しい困まれやすく逃げにくい。魔術を放たれば直撃コースだ。

「わたしが切り込んで統率を乱します。リタさんはその隙に大きいのを一発かましてください」

そう提案したのは光だ。

彼女の愛刀・・・・・・・・・・斬魄刀というらしいそれを鞘に収め抜刀の準備をしている。

「わかったわ。でも大丈夫？」

「問題ありません。我ら明智は武士の家系。戦場こそが我が故郷・・・・・・・・です」

「そう。じゃあお願い。無茶しないでよ」

「もちろんです」

そういつて光の体がぶれた。

その瞬間光は敵のすぐ目の前にいた。

高速歩法・瞬動。

移動距離十メートル、直線移動しかできないなど欠点も多いこの歩法だが、使いやすいため多くの武芸家に好まれている。

敵に気づかれる前に正面の一人を斬る。続けざまに一閃。今度は二人同時に切り捨てた。

さらに敵の振るう短剣を首をひねって回避、手首を落とし、首を刈る。

これで四人。

そこまできて敵方も対応を始める。

剣を抜き、呪文を唱え、集団で襲いかかる。

光はそれを壁を蹴って天井を駆けるという三次元的な動きで回避した。

「っ!!」

目の前に炎の塊。

「このっ!!」

炎を刀で打ち払い、突っ込んできた大男の腹部を掌低で穿つ。

本来、掌低は威力の高い技ではなく護身術としても高い技術を要するものであるが、光のそれは一撃必殺の威力を持っていた。

大男を倒し次の敵にねらいを定めたとき、リタが飛び出してくるのが見えた。

「光!うまくかわして!ゴルドカツツ!」

敵守備兵の頭上に金色の光が現れたと思った瞬間、バゴンという音を立てて金色の何かが落下した。

光の粒をばらまくそれに押しつぶされ敵部隊は一瞬で壊滅した。

「……………猫？」

それはまさしく金色の猫だった。

「この状況でこれですか？なんとというか締まらないです」

「これは何とむごい……………これに圧殺されたとあつては彼らも浮かばれないでしょうな」

「う、うるさいわね。光が避けやすい術を選んだあたしなりの配慮よ……………」

「そうなんですか？でもリタさんは極度のネコ好きだとか……………ネコ語辞典とかネコ耳力チューシャとか持っていると聞きましたよ。これモリタさんの趣味なのでは？」

「な、何でそれを……………じゃなくて、そんな分けないでしょ！情報の出所は護堂ね。アイツ帰ったら殺す！絶対！」

「……………もういいですか」

一行は扉を開けて部屋の中へ入っていく。

石造りの部屋の内部はそこそこに広さで、祭壇が設置されており、

古代から祭祀に使われてきたことを伺わせた。

その中央に魔法陣が敷かれている。

「あれね。どうやらまだ発動してないみたいね。ちょっと待ってて、今解析する」

そういつて魔法陣に近づくりタ。

その他の面々は敵の襲撃に備えてリタを守るように布陣する。

「ふむふむ……ここがこうなって……それでここにつながって……」

「こうしてみると本当に研究者なんですね。私より年下なって思えませんね。ベンさん」

「……ふむ、そうだな」

「?どうかしました?」

「いや、なんでもない」

やがて - - - - -

「おかしい……魔力を遺跡の外に移すための『道』がない……それにこの術式は魔力を蓄えるためのもの……そしてその行き先は……っ!? みんなはやくそいつから離れて!!」

その瞬間、世界から音が消えた。視界が白く染まり体中を痛みが駆け抜ける。

「うっ」

気を失っていたのは十数秒。
辺りを見ると隊のみんなが地に伏している。
全員意識がないようだ。

いや、全員ではない。一人だけ……ベンニア

リだけは無傷で立っていた。
獰猛な笑みでリタを見下ろしている。

「やっぱりあんただったのね」

リタは痛む体に鞭を打って立ち上がる。

「ええ、そうですよ。ジブリアル大隊長にしてアズラール総裁それが私です。それにしてもギリギリで勘づかれるとは思ってませんでしたよ……さすがといっておきましょう」

「あんた魔術についてド素人何じゃないの？あの程度の仕掛けで隠せると思ってた？目的は何？何であたしたちをここに呼び寄せたの？」

「目的は汚らわしき魔術の撲滅。そう。この国から魔術という悪しき力を消し去ることこそ私の目的。あなた達さえいなければことはもっと単純だったのですがねえ。この国の魔術と関わった以上生かしておくわけにはいきません。かといって暗殺してしまつては、対外的に問題が発生する。だから……」

「だからあたしたちを戦争に参加させて戦死扱いにしようとした？」

「そのとおり。あなた達の所属グループに戦争参加の許可を出させ、確実に殺すために私のホームにまで招待したのです。あなた方を私が殺し、カンピオーネは『神』が殺す。そして完全無垢なイスラムの国をつくりだすのです」

目的はあくまでも魔術の撲滅。ゆえに神によってこの国が蹂躪されようとも気にしない。

仮に自分が死んでもそれは殉教。
天国に行けるのだから問題はない。

本来イスラム教において魔術は異端視されていた。

聖典『ハディース』に見られるように預言者自身が魔術の被害にあつたこともあり、治癒魔術・ルクヤ以外の魔術は禁じられていたのである。

しかし魔術を厳しく禁じていた預言者の言葉にもかかわらず、後のイスラム法学者たちはそれを全面禁止しなかった。

彼らは魔術を黒魔術と白魔術に分類し、黒魔術のみを禁じたのだ。もちろんイブン・ハルドゥーンのように魔術の全面禁止を謳ったものもいる。

この男もその流れをくんでいるのだ。それも過激な思想を持って・
・・

「それで仲間を全部裏切つてたつた一人で事をなそうってわけ？ふざけんじゃないわよ！あんたを信じてついできたジブリールの連中はどうするのよ！」

「ふん。ジブリールもアズラーイールも異端の術におぼれた愚者共だ。私にとって魔術を消し去るための駒に過ぎん。今日が革命の時！ジブリールもアズラーイールも外来の術者もこの時をもって消滅する。かつて預言者すら為し得なかつた偉業を成し、イスラムの歴史に名を刻むのだ！」

「そんなことは絶対にさせない！ここで倒れるのはあんたのほうよ

「！」

「その体で戦う気かね？この部屋の魔法陣によって私は圧倒的な力を有するのだが……まあいい、どうせ死ぬのだから、少しくらいは抵抗して見せよ！」

光の時と同じようにベンの体がぶれる。
しかしその速度は光の瞬動を上回る。

瞬動の上位歩法・瞬身。

速度だけでなく方向転換を可能とし、移動距離も飛躍的に高まっている。

あっという間にリタの目の前に現れたベンはもうすでに大剣を振りかぶっていた。

「くっ！！！」

振り下ろされる剣を真横に飛んで避ける。

岩を砕く音が聞こえ、直後、肩から固い地面に落ちた。

「今のを避けますか……少し意外です。接近戦はできないものとはばかり思っていたので」

「はっ！調子に乗るんじゃないわよ。あんた程度じゃ絶対に勝てないような剣士を少なくとも二人は知ってるわよ」

ギルドの友人たちを思い出し、弱みを見せまいと強気な口調で言

い返す。

しかし……

(まずい。いままで右肩をやった……右手が動かない)

打ち付けた肩が熱を帯びている。

痛みがないのは脳内物質の恩恵か。

「減らず口を!!」

「ファイヤーボール!!」

直進するベンめがけて三発の炎弾を放つ。

炎は直撃しベンの体を包み込むが止まらない。

リタは全身に身体強化を施しベンから距離を取ろうとする。

「このっ!スプラッシュ!」

ベンの真上から大量の水が滝のように落ちてきた。

「むう!」

さすがのベンも対応できず水にのまれる。

その隙を逃さない。

「無慈悲なる劫火は汝らの心をも燃やし尽くす」

「いのお」

ベンが立ち上がり追撃しようとする。

「遅い！クリムゾンフレア！！」

ベンを囲むように現れた橙色の魔法陣の中で紅蓮の炎が渦を巻いて荒れ狂う。

灼熱の炎に焼かれて大地が融解し、急激な温度の上昇で爆散する。

「ゼエ・・・ゼエ・・・さすがに終わったでしょ・・・」

肩で息をし、膝に手をつけて術の跡を見る。

黒煙によってベンの姿は見えないがああエネルギーをつけて無事でいられるはずがない。

だから、気を抜いた。ほんの一瞬だけ。

「がつー！」

リタの小柄な体が宙を舞った。

トラックが衝突したのかと思えるくらいの衝撃をうけて意識が明滅する。

「あっぐあう」

地面に叩きつけられ全身をしたたかに打った。トレードマークのゴーグルは無惨に引きちぎられ砕け散っていた。

いったい何が――

思考する前に再び衝撃が腹部を襲った。

「かふっ!!」

声にならない音が空気とともに口から漏れ出す。

見るとベンの太い足がリタの腹部を踏みつけていた。

「驚きましたよ。その歳であれほどの術を使いこなすとは」

「あ・・あんだ、その本。魔女狩りの術式を・・・」

ベンの左手にある一冊の魔導書を見てリタが言った。

「その通り。『全ての魔術師と全ての魔女を殺しなさい』・・・今日ほどこの言葉に感謝する日はありません」

魔女狩りの術式・・・ハディースにある預言者の言葉を元に構成された身体強化の一種であり、その最大の特徴は、魔術の無効化である。

もちろんカンピオーネほどの防御力があるわけではないが、上級魔術でも数発は耐えられる。

「『魔術師に課せられる刑罰は剣による一撃である』」

これもハディースにある言葉であり、呪文。

剣を用いてあらゆる防御を突破せんとする魔術師殺しの聖句。
みるみるうちに大剣が禍々しい呪力を帯びていく。

「終わりです。安心してください。大切なお仲間もすぐにあの世に送って差し上げます。地獄ですけど」

異教徒は天国へは行けないのだ。

「それは、どう、かしら・・・仲間ってのは、いいモンでね・・・自分じゃどうにもできないことも、仲間がいれば、何とか、なったりするのよ」

リタも昔は人を信じていなかった。

その才能故に忌み嫌われ、たった一人でいたこともあった。

そのリタを孤独から救ったのは一人の少年だった。極東の地から一人でやってきたその少年にリタは救われたのだ。

故郷を離れてからも、新たな土地で親友ができて、笑いあえる仲間ができた。

だから信じることにした。『仲間』ってやつが起こす奇跡を！

「さらばだ」

大剣が振り下ろされる。

今のリタにこれを防ぐすべはない。

それでも剣がリタの首を切り飛ばすことはなかった。

代わりに飛んだのはベンの大剣。

信じられないというような面持ちでベンは、鮮血をまき散らして飛んでいく剣とそれを掴んだままの肘から先を見つめる。

「ぐうううおあああ」

肘から先を失い激痛からうめき声を上げるベン。

リタの上から足をどけ、一歩二歩と後ずさってから、振り返る。そこにいたのは刀を構える明智光の姿。

「この私が不意打ちを」

ベンは右腕を押さえながら光を睨み付ける。

しかしそこでベンは奇妙な感覚を覚えた。

(なんだこの存在感の薄さは……まるで、そこにいないかのような)

「やっと気がつきましたか。これこそ密教に分類される法術。摩利支天陰行術です」

摩利支天とは、常にその姿を隠し障難を取り除くと言われている神。

インドにおいて日月の光や陽炎を神格化したもので、護身、遠行、得財、勝利を司っており、日本では武士の守り本尊とされている。

この術はそんな摩利支天信仰を利用し、己の存在感を極限まで封じ込める陰行術の一種だ。

故にベンは光を視界に入れていながら、その存在を感じ取れないのだ。

「リタさん、気がつくのが遅れてしまい申し訳ありません」

「結果オーライよ。まずこいつを倒すわよ。前衛よろしく」

「わかりました！」

光がベンに斬りかかる。

武器を失ったベンに刀を防ぐことはできない。

それでも歴戦の勇士たるベンは光の動きについてくる。

斬撃をかわし、隙と見るや強烈なけりを放ってくる。

左手の摩導書、魔女狩りの術式が健在であるため、リタの攻撃は無視できると踏んでいるのだろう。

しかしそれは大きな勘違い。天才リタ・モルディオと同じ構成の魔術は通じない。

「目覚めよ、無慈悲で名も無き茨の女王、アイヴィーラッシュ！」

ベンの足下、石畳を砕き極太の茨が現れ体に巻き付こうとする。

これを飛び退いてかわそうとするがそこで

「させない、散れ千本桜！」

光の斬魄刀が真の姿を見せる。

刀身が千の刃に分割され、宙を舞う桜の花びらのように、それでいて強い呪力を帯てベンを襲う。

「ぐおおおお！？」

ベンは千本桜に体を切り刻まれ、茨に拘束されてしまった。

「なぜだ！？魔女狩りの術式は確かに！」

「イスラムと発祥を同じくするキリスト教にある魔女狩りを参考に
対抗呪文を重ねがけしたのよ。効果観面でしょ……さーと
どめと行くわよ」

リタが両手を前に突き出しとつておきを発動する。
肩の痛みはもう気にならない。

「万象成しえる根源たる力、太古に刻まれしその記憶」

朗々と謡われるそれは彼女の研究成果。

リタを中心として正方形の角の位置に四種類の魔力で構成された
巨大なエネルギー体が現れた。

それぞれまったく違う、火、水、風、土の四属性。

「ばかな！！四種類の属性を同時に扱えるはずが……」

「我が呼び声に答え、今ここに甦れ！エンシエントカラストロフィ
！！」

呪文の詠唱が完了すると、四つのエネルギー体は中央のリタに向
けてその力を解放した。

四つの力はリタを核として混ざり合い反発して指向性を持つ一つ
のエネルギーとして拘束されたベンへ向かって放出された。

「あがあああああああ……」

ベンの断末魔の叫びは真っ白な光と轟音の中に消えていった。

同時刻、サマーワ・ワルカ遺跡にて・・・

大地を揺るがす大魔力の奔流とともに、アズラールと抗戦していた護堂たちの前に一人の男が現れた。

光り輝く金色の鎧を纏い、その目は燃えるように紅い。

それがまつろわぬ神であると、その場にいる誰もが直感した。

それと同時に護堂は戦慄した。その神が内包する強大な力に。

ただそこにいるだけで体を押しつぶしかねない圧倒的な重圧。存在そのものが今までに出会った神を遙かに上回っている。

あのアテナでさえこの神のように、根源的な恐怖を覚えたりはしなかった。

その神は煩わしげに護堂たちを見下ろした後、こう言った。

「地を這う虫けらが誰の許しを得て面を上げる？」

一言一言に込められた強烈すぎる意志が護堂たちの魂まで縛り上げる。

「貴様らは我を見るに能わぬ。虫けらは虫らしく、地だけを眺めながら死ね！」

その神は、真紅に燃える双眸で護堂たちを見下ろしながら、無表情に、それでいて明確な殺意を持って、その場にいる全ての命に対

して死刑宣告を下した。

その直後、護堂の視界をまばゆい金色の輝きが埋め尽くした。

第十四話 開戦（後書き）

今回はめちゃくちゃ長かった……

二つに分割も考えたんですがやめました。きりが良くないと思って。

今回の主役はリタでしたね。やっとです。

それでは今回はこの辺で……

第十五話 黄金の王

「ぐ、う」

とっさに炎の壁を創り、金色の光を防いだが、完璧とはいかなかった。

想像以上の威力を持ったそれらは金色に輝く炎の壁を打ち砕き、護堂、ジブリール。アズラール、イルの魔術師たちを跳ね飛ばした。

不幸中の幸いと言っていいのか。壁の後ろにいた者たちはなんとか助かったようだ。

護堂は周囲を確認するように見回す。

ワルカ遺跡はもともと崩れかけた遺跡だった。天井はなく遺跡と言うよりは遺跡跡といった方がいいような古代の遺産。

しかし今の一瞬でそれが遺跡であるのかどうかさえわからなくなってしまう。

護堂の周りに刺さっているのは膨大な呪力を内包する剣。

あの神は剣を飛ばすことで護堂たちを攻撃していたのだ。

「ほう・・・神殺しが紛れていたか」

金色の神が護堂を見下ろして言う。

「人でありながら神を殺し、その権能を篡奪したもの・・・ふん。人の身で神に手を伸ばす愚者。その有り様は我にとつて好ましいものではない・・・だが！」

今度は、護堂の後ろ。傷つきながらも助かった魔術師たちへ視線を向ける。

「この我が死ね^{オレ}と言ったのだ。疾く自害するのが礼であろう！」

標的は生き残った魔術師たち。

神の背後に二十挺はあろうかという剣が浮かび上がり、射出された。

「くっそお！させるかあ！！」

護堂が再び炎の壁と作り出し剣の進行を妨げる。

先ほどよりも分厚く、強度を高めて作られた壁は剣を何とかはじき、魔術師たちの命を救った。

「今の内に速く逃げるんだ！」

壁を消す前に後ろに向けて言い放つ。

護堂に後ろを振り返る余裕はない。

生き残った魔術師たちは、所属組織に関係なく助け合い素早く撤退していった。

壁が消えた跡に残っていたのは、遺跡の残骸と物言わぬ死体、護堂と金色の神だけ。

「貴様あ」

増悪のこもった声で神が言う。

「王の裁定を邪魔だてするとは……万死に値する。死ぬ覚悟はできているのであろうな!!」

現れたのは剣の他に槍、鎌、矛、その他あらゆる形状の武器。

一つ一つが必殺の威力を持つてあろうそれは、三十の切っ先を全て護堂に向けている。

「これはヤバイ」

あわてて射線から出ようと走り出す護堂。

逃がすまいと打ち出される武器の群れ。

「うわああああ」

なんとかかわした護堂であつたが発生した衝撃に体を打たれた。

かすめてもいないのにこれかよ……

もはや原型をとどめないほどに破壊され尽くしたワルカ遺跡。

その破壊をもたらしたものが、爆弾等ではなく、刀剣の類だと誰が信じようか。

「やられて……たまるか!」

炎の剣を作り出し、ナイト・オブ・オーナーで強化する。

形状は両刃の西洋剣。黄金色に輝く刀身に黒い線が網の目状に走っている。

二つの神力によって作られた剣であるが、目の前の神にどこまで通じるか。

神の攻勢はますます強くなる。

数え切れない武具が高速で且つ連続で射出されつづける。

護堂はこれを剣でいなし、見切り、かわしていく。

防ぐだけで精一杯。皮一枚でかろうじて持たせているそんな状況。隙を見て攻撃、等という考えは浮かばない。そんな余裕はない。気を抜けばすぐに死ぬ。

「そろそろそろ！休んでいる暇など無いぞ！！」

凶悪な笑みを浮かべて、護堂を攻撃し続ける黄金の神。

その立ち位置は現れたそのときから一步も動いていない。

いったい何丁はじいただろうか。

数えるのも馬鹿らしくなるような、途方もない数をさばいた様な気がする。

それでも敵の攻撃がやむ気配はなく、精神力も体力も削られ続けている。

無心にはじいていられるのは今の内だけ。

まさにギリ貧。このままではそう遠くないうちに限界が訪れ、串刺しになってしまうだろう。

一瞬の隙を作るためだけに全力を注ぐ。

三度目の炎の壁。

今度はドリル状で回転をかける。

正面からただ受けても破壊されてしまう。回転を加えたドリルで剣を逸らしはじき返す。

「小細工を！」

神は真つ正面から破壊することにしたようだ。
圧倒的な破壊力を持つ剣群が巨大なドリルを叩き、ひびを入れ、突き刺さる。

その隙に護堂は射線から抜け出し右腕に太陽の力を込める。
そして掌から特大の炎を放つ。

「くだらん」

一言だけ。

放たれた炎は金色に輝く鎧に焦げ目すらつけられず一刀のもとに切り裂かれてしまった。

「ッ！」

護堂は反射的に首をひねる。
頬に一筋の赤い線。

なんだこの神は。

剣にまつわる神かとも思ったが剣技で勝負してくるわけではない。
攻撃の手段は剣だが用法が根本的に違う。

まるで無限に剣を所持しているかのように剣を湯水のごとく浪費していく様は圧巻。

そしてその中には剣以外の武器も多数混入している。

一つ一つが名工の手で作られたであろう名品の数々。いくら神とはいえこれほど多数の宝物を持ちうるのだろうか。

ましてやそれを使いつぶすような真似をするだろうか。

最大の疑問点は真つ先に全員を狙ったこと。

またしても嵌ったこのど壺。
しかし護堂には先ほどのように迫り来る劍群をはじくだけの余裕はなかった。

「グウ！」

はじき損ねた劍が護堂の右太ももを切り裂いた。続いて頬。脇腹。今度は左の肩。

そして終に一本の劍が護堂の右足に突き刺さった。

「がつ！！！」

「そろそろ限界か、神殺し」

あざ笑うかのように劍の投擲を止めた神が話しかけてくる。

「まあいい。雑種風情にしてはよく耐えた。褒美に我の財を見せてやるっ」

そう言っつて神が得意げに取り出したのは小さな短劍。

それを優雅に一降り。

短劍から白い呪力が吹き出し護堂に襲いかかった。

「グッ」

炎の劍を楯にこれを防ぐ。

白い気が通り抜けた跡は凍り付いた道となって残っていた。

「フン」

鼻を鳴らし取り出したのは巨大な鎌。

死神を連想させるその鎌を真横に降ろす。

その直後、護堂は自分の真横から呪力を感じとっさに剣を向ける。

「がつ！」

しかし間に合わなかった。

空間を裂いて現れたのは鎌の刃。

これが護堂の右腕を貫き血に汚れた頬にさらなる傷を付けていた。

無造作に鎌が引き抜かれ崩れ落ちる護堂。

体中が悲鳴を上げ、限界を迎えようとしている。

「やはり所詮は雑種から奪った力。盗人程度ではこの我はオレ小揺るぎもせん」

まさかこの神は人間だけでなく他の神まで見下しているのか――

アマテラスやランスロット、アテナでさえこの神にとっては雑種にすぎないというのか。

桁外れの存在。

戦いにすらならない力の差。

それでもここで負けるわけにはいかない。

震える足に力を込めて剣を杖にして何とか立ち上がる。

そして刀身を上に向けてそこに込められた力を解放する。

アテナ戦で学んだ力の使い方。

凝縮した太陽の力をさらにため込み一気に放出することでその威力を上昇させる。

刀身が輝きを強める。

「なるほど。剣に凝縮した太陽の開放か……いいだろう。今日の我は機嫌がいい。我の秘剣で相手をしてやろう。この王だけが持つことを許される『エア』でな!!」

引き抜かれた剣がもつ呪力はまさしく桁外れ。

その形状は歪。

剣として機能するのかわるかさえ怪しいその刀身は円柱状をしており、禍々しい赤い呪力を纏って高速回転している。

「オオオオオオオオオオアアアア!!」

護堂が剣を振り下ろす金色に輝く光が刀身から放たれ、空気さえもを焼き尽くして神へ向かう。

「天地乖離す開闢の星!!」

真っ赤な呪力の渦が歪な刀身に沿うように黄金の光に向けて放出された。

ぶつかり合う両者。

「ゲウウオオオオオオオ!!」

護堂が全身の力を振り絞って剣に力を注ぎ込む。

しかし、無情にも神の剣が上回っていた。

護堂が放った太陽の光線は赤い呪力の奔流に削られ、押し返され、そして。

「あああああああああああ！！！」

護堂をも巻き込んで辺り一帯を無に変えたのだった。

「なにあれ！！！」

まつろわぬ神の招来の報を受けてサマーワに向かっていたリタが叫んだ。

目的地方面から身を震わせるような呪力の高まりがあったかと思ったら、真つ赤な閃光が走り、空間が『裂けて』いたのを確認したからだ。

遠見の術という不鮮明な千里眼ではあるがそこで見たのは間違いなく神も一撃。

「無事でいなさいよね………護堂」

第十五話 黄金の王（後書き）

……王様無双です。

第十六話 救助

「間一髪だったなあ」

大きな岩に背を預けてぐったりとした様子で護堂が言った。体の力は完全に抜けきっており軟体生物のようになってる。

今の護堂は生命維持が精一杯という有様なものだから仕方がない。切り傷は数十カ所に及び貫通している箇所もある。

（ヤバイなこれ・・・回復が追いついてない・・・）

意識がはつきりしない。血を流しすぎたのだ。

最後の勝負で押し負けると早々に察した護堂は、太陽光線を推進力として弾丸のような速度で戦場を離脱していたのだ。

それでも神の攻撃は避けきれずダメージをうけてしまった。

距離を取ってもそこは砂漠の上、遠くに街は見えるが、人がこのような場所まで来ることはないだろう。

（万事休す・・・か。静花には謝っておきたいか・・・った）

そして護堂は意識を手放したのだった。

「なんてこと……」

撤退してきた魔術師の報告を受けてから、ワルカ遺跡に到着したリタと光は思わず目の前の光景に息を呑んだ。

歴史的な遺跡があった場所は、その面影を残すことなく破壊され尽くしていたからだ。

いや、それを破壊と呼んでいいものか。

大地は裂け、巨大な蛇が通ったかのような深い溝ができていたから。

報告によると金色の神と護堂が戦い、護堂が敗北したらしい。

「とにかく護堂を探すわよ！アイツのことだからどっかではびとく生きながらえてるわよ」

「結界で呪力を探知しますね。神は他の街に行ったようですし大丈夫でしょう」

光が六枚の札を取り出して呪文を唱える。

手早く術を構成する。

リタから見ても光の手際の良さは目を見張るものがあった。

剣だけじゃなくて術も使えるのね、大騎士くらいの実力はあるぞうだわ。

などとリタが光を評価していると、早速反応があったらしい。

その場所は現在地から三キロほど進んだ砂漠の中だった。

「護堂！しっかりしなさいよ！」

「血が……草薙さん！しっかり！」

目的地付近を探索していた二人は岩陰に倒れていた護堂を見つけ、あわてて駆け寄った。

辛うじて息と脈がある状態。意識はなく、出血量が多い。カンピオーネといってもこれだけの重傷なら命を落とすこともある。

「すぐに治癒をかけます……急急^{オーダー}如律令」

光が護堂の胸に治癒符を押し当てて治癒術をかける。

汎式陰陽術の初級程度の治癒術ではあり、治癒符と急急^{オーダー}如律令という呪文、後は術者が対象者の呪力が強ければ呪術を修めていない素人でもある程度は効果を発揮するものだ。

当然ながら一流の光が使えばその治癒力は極めて高いものになるのだが……

「術が消える！？そんな！？」

「カンピオーネに魔術は効かないって聞いたことがあるわ。まさか治癒術まで無力化するなんて」

カンピオーネは魔術を無力化してしまう。それも自分に害がある

うが無かるうが関係なく打ち消してしまうのだ。

普段はこの高い抗魔力によって魔術攻撃から身を守っているが、傷を治すこともできないというのが大きなデメリットだ。

「そ、そしたらどうすれば……このままじゃ草薙さんが……」

「まって、カンピオーネにも術をかける方法があったはず。えっと……」

護堂に包帯を巻きながらリタが必死になって考える。いつもならすぐに思い出せることがこの重大な場面で思い出せない。

確かにあったはず……魔王に術をかける方法……

思い出せないことが焦りを生み、またそれが思い出すことを阻害する堂々巡り。

痛々しい傷、赤く染まる包帯、血の気の失せた顔。早く何とかしないと。

そして思い出した。

「昔話！昔話にあったわ！確かカンピオーネに我が身を捧げて封印を施そうとした乙女の伝説」

「我が身を捧げる？」

「そう。カンピオーネも内側からなら魔術が効くのよ。だからその、なんていうか」

「？」

光はとぎれとぎれになったリタに疑問符を浮かべる。内側からの意味がよく理解できないでいるのだ。

「だから経口接種よ！経口接種！魔術を口から吹き込むの！！」

「口からって……ええ！」

驚くのも当然か。つまるところキスをするということなのだから。

「……………」

「……………」

気恥ずかしさから無言になってしまふ。

しかしそうも言っていられない。この場にいるのはリタと光の二人だけであり、事態は一刻の猶予もないのだから。

二人の内どちらか一方はキスしなければならないのだ。

「わかりました。そういうことなら私が治癒をかけます」

「な、なにいつてんのよ。つい最近あつたばっかでしょ。ここはあ
たしが」

「いえ。リタさんは治癒に関しては不得手だと言っていたではありませんか。それならば私が適任です。それに草薙さんは命の恩人でもあります。恩は返さなければなりません」

「む、う」

これがオンガエシというやつなのか？

オンを返すためにためらいなく唇を捧げると？

それが菊と刀にあったギリなのか？

あたしでもちよつと躊躇ったのに？

それともサムライだからか？ブシドーなのか？どうなのベネデイ
クト先生！！

ともかく光のきつぱりとした態度に懊悩するリタは押し切られて
しまった。

「では、失礼します・・・ん・・・ふう」

護堂にキスをする光。

治療術が口移しで護堂の体内に入り、みるみるその傷を塞いでい
く。血色も良くなったようだ。

「むっ」

それでもリタは気に入らない。

護堂が助かったのは嬉しいことだ。だが、手放して喜べるかと言
えばそうではない。

なにせ三年だ。三年間好意を寄せていたのだ。護堂に。

それがまさかイラクで、会ったばかりの女とキスしているところ
をまざまざと見せつけられようとは。

しかもいつも間にか護堂を押し倒す形になっている。

「て、ちよつと！もういいでしょー！」

リタは慌てて光の襟首を掴んで引き離す。

護堂の体の傷はあらかた消えているのだからもう大丈夫だと判断した。

プロとして……他意はない。

「光……あんたやり過ぎ」

「え、いや、すみません／＼／＼」

光は指摘されて自らの行いを思い出したのか顔を真っ赤に染めてうつむいてしまった。

「とりあえず、護堂を運びましょう。ここは気温が高すぎるわ」

やや棘のある雰囲気でしたと言った。

日中下手をすれば四十度をこえる場所で目覚めるのを待つわけにもいかない。

よって二人は護堂を抱えて、街で確保した拠点まで帰ることにしたのだった。

第十七話 決戦直前

目が覚めた。

半覚醒状態のボーとする頭を持ち上げて周りを見回す。

どうやら見知らぬ部屋でベッドに寝かされているようだ。

そして記憶が鮮明になってくる。

金色の神との戦いに敗れたこと、今にも死んでしまっんじゃないかと思えるくらいの重傷を負ったこと。

体を確かめてみると、あらかたの怪我は治っているようだった。

「こ、ここはどこだ？」

状況がつかめない。何故自分はここにいる？

護堂がベッドから起き上がろうとしたとき、ドアが開いた。

「草薙さん、目が覚めたんですね！よかったー」

「護堂、体は大丈夫？」

光とリタが入ってきた。

光は手に籠をもっていて、その中からフルーツが顔を覗かせていた。

「リタ？光さん？えーとだな」

「ここはサマーワの宿よ。でてきた神様のせいで敵は壊滅。この町を簡単に落とせたみたいね」

護堂が疑問を口にする前にリタが教えてくれた。
結局、アズライールは壊滅し、この町はジブリアルが統制する
ことになった。

ジブリアルはジブリアルで面倒なことが起こったようだが、何と
かまとまっているようだ。

「で、あの神は今遺跡にいるみたいよ」

「あそこから動いてないのか？」

「いや、一回どこかに行ったんだけどまた戻ってきたのよ。遺跡の
調査にあたってた連中とは連絡がつかないわ」

遺跡の調査にあたっていた魔術師が誰かわからないが、あの神の
ことだ、まず生かしては置くまい。

「まあ今はゆっくり体を休めることね。はいリンゴ」

リタが綺麗に皮をむかれ、一口大に切りそろえられたリンゴを爪
楊枝でさして口元に持ってきた。

「ちょっとリタさん！？なにを勝手に！！」

隣の光が抗議の声を上げる。

このリンゴは光が用意したものだ。

皮をむいたのも切りそろえたのも光。

リタは図々しくもそこからリンゴを奪ったのだ。

「いいじゃない。光が皮をむいてあたしが食べさせる。完璧」

「完璧なわけないですよ！美味しいとこ取りじゃないですか！」

「美味しいとこっていったらそっちなんで護堂にあんなことしたじやない！」

「そそそ、それは緊急事態ですから！」

不穏な発言

「あんなことつてなんだ？」

「ぐ！？」

「えと・・・な、んでもないです」

「？」

急に二人して言葉を失ったことに護堂は疑問符を浮かべる。
光の言葉は尻すばみで最後のほうはほとんど聞き取れなかった。

「草薙さん！リンゴはこちらをどうぞ！」

光が復活。

心なしか顔が赤い。

包丁を置いてリンゴを差し出す。

「護堂！ほらこっちはダブルよ！」

二個同時刺し。

「そうなんですか、リタさん」

「あたしを誰だと思ってるのよ、天才魔術師よ。アレだけの力を見たら神様の予測くらい立てられるわ」

リタは霊視とは違い、積み重ねられた知識からまつろわぬ神の正体を導き出すことができる。

知識を溜め込むだけでなく応用が利くのがリタのすごいところ。

「アイツの正体はね、ギルガメツシュよ。まず間違いないわ」

「!?!」

「ギルガメツシュ!?!」

護堂にも聞き覚えがあった。

つい最近世界史の授業でその名が出たばかりだったからだ。

世界最古の叙事詩であるギルガメツシュ叙事詩の主人公。

紀元前の世界において神の血を引く最古の王だった存在。

人でありながら神になった存在としても最古なのではないか。

「なるほど・・・そういえばウルカ遺跡はウルクの遺跡でしたね」

「そう、そして最古の王なればこそあらゆる宝物を所持していてもおかしくない。護堂の言っていた神具級の武具はこの宝物のことでしょうね。空間を切った最後の一撃はエアの一撃なんだろうし」

断言はできないが説明を聞く限りは否定する要素が見つからない。

あの暴君な態度といい、授業で聞いたとおりの人格だった。

「あれがギルガメッシュだとしてどうやって攻略しよう」

「いや、護堂。はっきり言ってこれ以上この件に関わる必要は無いんじゃない？」

「なに言ってるんだ？」

「護堂はこの国の人間じゃない。あのバケモノを相手にする義務は無いのよ」

確かにそうだ。

他国の問題であり、ただ旅行に来て巻き込まれてしまっただけ。相手が神で自分がカンピオーネだからというのも命を懸けるには理由としては乏しすぎる。

戦いを心から楽しむサルバトーレのような者ならともかく、護堂にはここで手を引く権利がある。

「いや、ここまで関わった以上目を背けることはできない。アイツがここにいる限りこの町だけじゃない、この国全体が不安を抱えることになる。それは看過できない」

「草薙さん……」

（コイツは今までもずっとこうやって危険に首を突っ込んできたのね）

義務感や使命感ではない。当たり前のこととして危険に立ち向かい、戦うことができる。

それがカンピオーネ。

しかし、それは勇敢であると同時にひどく危ういものである。

(この人はいつでも死地に飛び込んでしまう、だれかが助けて差し上げないといけない)

はっきりと戦うことを宣言した護堂の目は本気だ。これからどれだけ説得しても聞き入れはしないだろう。

たとえ一人であろうとも護堂はギルガメッシュに挑んでしまう。止めようが無いのだ。

だったら自分にできることは護堂が無事に帰ってくることできるように手を尽くすことだけ。

リタと光はほぼ同時にその結論にたどり着いた。

「しょうがないわね。あたしも協力するわよ」

「わたしも微力ながら全力を尽くさせていただきます」

決して護堂一人で戦わせないという二人の決意だった。

「……わかった。ただしアイツの前には出るなよ」

「そこまではしませんよ。足手まといになってしまいますし」

まつろわぬ神に抗えるのはカンピオーネだけなのだ。

「護堂。ちょっとこっち向きなさい」

リタが護堂に呼びかけた。

どうした？とリタのほうに顔を向けた瞬間にリタの顔がドアップで目の前にあった。

「ん……」

「!?!」

「あ!?!」

リタが護堂に唇を重ねた。

それと同時に護堂は体の中に力が注ぎこまれてるのを感じた。体の奥底から力が湧いてくる。呪力の循環もよくなり、全身が活性化し始めた。

「ん……ちゅッ」

名残惜しそうに唇が離れた。

リタの瞳は潤み、顔は完熟トマトのように真っ赤になっている

「……あたしが知ってる限りの強化、防護、治療術式を可能な限り流し込んでおいた」

「そ、そうか。ありがとう」

「必ず勝ちなさいよね！命令よ命令!」

恥ずかしさをごまかすようにリタが叫んだ。

護堂を見る光の目がちょっと怖いが、とにかくこれでギルガメッシュに挑むための最低限の準備は整った。
護堂はベッドから降りると、そのまま外へ向かって歩き出した。

第十七話 決戦直前（後書き）

更新遅くなりました！。ほかにいろいろ手を出してしまったために遅れました！

更新サボってるあいだに新刊ができましたね。個人的にはショックな展開だったり・・・

第十八話 ギルガメツシュ

護堂は再びワルカ遺跡にやってきた。

「貴様、生きていたか」

当初、数千年の歴史の流れによって風化して崩れ、戦闘によって破壊されてしまったワルカ遺跡は神の力なのか在地の姿を取り戻していた。

神・ギルガメツシュはその遺跡の屋根部分に威風堂々と立ち、護堂を見下ろしていた。

「あんた、ここの王様なんだってな」

相手の威圧にくじけないように護堂は言った。

「然り。私の伝承を学んだか、神殺し。・・・だがな、我は貴様に死ねと命じたはず。再び私の前に出で来るとは不敬であろう」

ギルガメツシュの背後の空間が赤く染まり、光り輝く刀剣たちが姿を見せる。

「疾く、死ね」

ギルガメツシュが護堂を指差すと同時に、二十挺の宝剣が護堂目掛けて襲いかかってくる。

激しい轟音とともに砂煙が舞い上がる。

ギルガメツシュに敵を打ち負かしたという喜びはなく、紅い相貌に怒りをたぎらせてそこを見る

砂煙が晴れた後、五体満足で立ち続ける護堂の姿があった。

その手には輝く宝刀が握られている。ギルガメツシュが投擲した剣のうちの一本を掴んでその他の剣をはじいたのだ。

人間離れた超絶技巧。ナイト・オブ・オーナーの力による騎士の権能。

「私の剣に手を伸ばすか！ 駄犬！」

怒り狂ったギルガメツシュがさらに多くの剣を連続で撃ち出してくる。

どれ一つとっても必殺の威力を持つ剣の群れ。

そのなかを護堂は駆けていた。

飛来する剣を弾き、掴み、見切って、すり抜ける。

権能の力だけではない。リタの施した術式が護堂の体を極限まで強化していた。

（思ったとおりだ。この神には戦うための権能はない）

アテナと戦ったときのような、互いに技を競い合うような類の戦いではなく、武器の威力と物量に任せた殲滅戦がこの神の戦い方。それはまさしく戦争そのもの。今護堂はそんな怪物に単身立ち向かっているようなものなのだ。

「おのれ、小癩なア！！」

ギルガメツシュは自身の攻撃をかくぐり利用する護堂に怒り心頭だ。

攻撃はなおも苛烈さを増し、飛び交う剣はまるで流星群のように空に軌跡を残して飛んでいく。

「こ、のおー！」

さすがの護堂もきつくなってきた。はじめは一度に取り出せる本数に制限があるものと思っていたが、どうやらそれは間違いのようで、数がどんどん増えていつている。

その分、精度が甘くなるのが救いだが、このままではどの道避け切れなくなつて、いづれは串刺しになつてしまうことだろう。

剣を振るいながら炎弾を生成し撃ちだす。放たれた炎はギルガメツシユの剣と衝突し、弾けて、軌道をそらす。

護堂はひたすらに前へ進む。炎と剣を使い分け、自分に当たる攻撃のみを選別する。

多少の傷はリタがかけた治癒術が治してくれる。

リタが護堂に施した呪術はざつと二十以上。身体強化、治癒を中心としたもので、一つ一つが単独で効果を及ぼすのではなく、それぞれが相互に干渉しあつて、より強力な効果を生み出している。さすがは天才といったところか。

そのおかげで護堂は、ギルガメツシユと互角に戦えている。

「ダアリアアアアー！！」

護堂の頭を狙ってきた斧を掴み取り、ギルガメツシユの足元、遺跡の屋根部分へ投げる。

回転しながら飛んでいった斧は、勢いよく石の屋根に突き立つと

その衝撃で建物を大きく破壊した。

当然、ギルガメツシュも地に落ちることになる。

「キ、サマア。この我を同じ大地に立たせるかッ！！万死ですら生温い！塵も残さずに消えるがいい！！」

ここにきてギルガメツシュは徹底的に護堂を殲滅することにしたようだ。

だが、その決定は遅すぎたといえよう。

彼我の距離は残り十数メートルにまでなっていた。この距離なら一息に駆け抜けることができるうえ、剣の掃射も近すぎて効果を発揮できない。

護堂はついに接近戦にまで持ち込むことに成功したのだ。

ギルガメツシュが二挺の剣を引き抜き、護堂に切りかかる。

二刀流のギルガメツシュを護堂も二刀で迎え撃つ。

右手に奪った西洋剣。左手に太陽の力を凝縮した日本刀型の太陽刀。

剣と剣が火花を散らす。

「チツ！接近戦ならこっちに分があると思っただけだな」

「図に乗るなよ、雑種風情が！」

護堂の計画ではギルガメツシュは剣の神ではなく、武の神でもないことから、おのれの体を用いて戦うのは苦手であろうと推測し、接近戦を挑むとしたのだが、予想以上にできる。

護堂が剣を振り下ろせば、ギルガメツシュはそれを受け止め、逆の手に握る剣を持って護堂の体を両断せんとする。

その逆もまた然り。戦いは一進一退の攻防となった。

「護堂さん、すごい。あんな神様相手に互角」

「たしかに……でも、ギルガメツシュが接近戦もできるってことは想定外だわ。護堂が押しではいるけど決め手にならない」

光とリタが一キロほど離れたところから戦況を見守っていた。

護堂にはどうか分からないが少なくともギルガメツシュにはばれていない。

ばれていたら100%無礼うちになっているであろうから。たとえ気づいたとしても今のギルガメツシュに二人をどうこうする余裕はない。

二人の見ている前では、この世のものとは思えぬ剣戟の応酬が繰り広げられている。

が、そのとき護堂の腹にギルガメツシュの蹴りが入った。

まさかの一撃に思わず後退してしまう。

ギルガメツシュはその一瞬を見逃さなかった。

「天の鎖よ」

空間に波紋が広がり、何本もの鎖が現れ護堂を絡め獲った。

「し、まッガア！」

腕、足、胴に巻きついた鎖を引き千切るうともがくがビクともしない。

(なんだ、この鎖のいやな感じは?)

「終わりだ神殺し。その鎖に捕らえられた者は、たとえ神であって逃れることはできん。我に刃を向けたこと、あの世で後悔するかい」

ギルガメツシュが剣先を護堂に向けながら近づいてくる。

護堂は何とかしようとすするものの抜け出すことができず、迫り来る死を感じた。

「グランドダッシャー!!」

「!!」

ギルガメツシュが剣を振り下ろそうとしたとき、地面が割れ、ごつごつとした岩石がいくつも大地から噴出した。

魔術の効かないギルガメツシュだったが、これには驚き後退してしまつた。

噴出した岩石は横一列に並び、語堂とギルガメツシュの間に壁を作る。

護堂は見た。無謀にも戦場から数百メートルという距離にまで近づいて術を放つたリタの姿を。

「邪魔立てするか、小娘エ!!」

「リタ!逃げろ!!」

護堂が叫ぶが、もうすでにギルガメツシュは剣を三挺呼び出し、リタに向けている。

(予想通り食いついた)

リタは護堂が捕らえられたとき、その鎖の特性を看破していた。神を封じる対神格用の拘束具。

そして、賭けに出た。唯我独尊のギルガメツシュは横槍を絶対に許さない。

ちよつとつづくだけで注意をひきつけることができる。

ギルガメツシュがリタを狙うその僅かな隙に光が護堂を救い出す。

リタはできるだけ長くギルガメツシュの気をひきつけなければならぬ。光は正面まで近づくことになる。きわめて危険なミッシェンだった。

なによりも護堂を拘束している神具が不滅不朽の類ならば光ではどうすることもできない。

「天光満つるところに我は在り。黄泉の門開くところに汝在り」

リタはすばやく呪文を唱える。

神やカンピオーネに対して魔術は効果がないが、一部の魔術のみある程度のダメージを期待できるものがある。

世界各国にある神殺しの伝承を元にした魔術で、最高位の魔術師にしか使用できないほどの難易度をほこる。

リタが唱えている魔術もその一つ。

リタが習得した魔術の中で最も高い攻撃力を持ち、ほぼ全魔力を使って発動する大禁呪。

「インディグネーション!!」

ギルガメツシュを中心にして、その足元に青い魔法陣が現れ、つづいてその真上に何枚も浮かび上がり、光が収束する。

そして、収束した光は真下のギルガメツシュに向けて雷となって落ちた。

鼓膜を震わせる轟音が響き、空気が爆発する。

隆起した岩が壁となり護堂を衝撃から守った。

その直後、剣が粉塵を切り裂いて、リタに迫る。

ギルガメツシュがあらかじめ抜いていた三挺の宝剣。

「ッ!!」

リタは間一髪身を翻したが、着弾の衝撃で大きく跳ね飛ばされて、動かなくなった。

「地を這う魔術師の分際でこの私の鎧に傷を……許さん!!」

ギルガメツシュの黄金の鎧は傷つき、砂に汚れて曇っている。

逆立っていた髪も今では下を向いている。

強大な神ですら抵抗しきれない威力であったことの証左である。

ただの人間に傷つけられて、キレているギルガメツシュは護堂を無視してリタに止めを刺そうと剣を呼び出す。

「まで!止める!!」

護堂の静止に耳を貸すこともない。
鎖を引き千切ろうと力を込めたそのとき、キン……と唐突に鎖が切れた。

「!?!」

知らない間に、光が背後に立って刀を抜いていた。
明智一門の斬魄刀。それに対神格用の呪術的対抗処理を施し、神具たる鎖を断ち切ったのだった。

その整った顔は蒼白。
場に満ちた神の威圧による緊張と神道系の対神術に全力を注いだことによる疲労で限界を迎えていた。

天の鎖を断ち切った直後、それを確認して気を失い、崩れるように倒れこんだ。

「光さんありがとう」

護堂は倒れた光に礼を言い、ギルガメツシュに金色の炎を浴びせかける。

「なに!?!」

とつさに剣で炎を剣で防ぐが、その表情は驚愕に染まっている。

「貴様、どうやって我が天の鎖から逃れた!」

幸いなことに光の姿はギルガメツシュからは岩石に隠れて見えな
い。

「教えるわけないだろ。さっさとケリつけようぜ」

落ちていた剣を拾い、炎剣を創り、ギルガメツシュに切りかかる。ギルガメツシュは滞空させていた剣を護堂に向けて射出するが、リタから護堂へ狙いを変える間に護堂は炎剣をギルガメツシュの剣の数だけ創り、射出された剣にぶつけて相殺する。

「クッ！」

ここではじめてギルガメツシュが焦った。

後ずさり、距離をとって剣を引き抜く。

護堂は後方に炎を放ち急加速。勢いのままギルガメツシュの懐に入る。

「ハア！！」

剣を振るう。その剣をギルガメツシュは剣で止めるが、勢いを殺しきれずに再度後ずさる。そこに追いつがる護堂。

このまま押しして押し切る！

全力で剣を振るい、ぶつかった剣が互いにひび割れ、刃こぼれを起す。

だが、護堂の持つ炎の剣は刃こぼれをすぐに修正できる。奪った宝剣も炎で覆って強化、刃こぼれの修復を行う。

剣を抜く暇を与えない連続攻撃が戦いの流れを確実に護堂のほうへ引き寄せていた。

護堂に流れ込んでくる。

「決めたぞ、神殺し。貴様はこの我が手ずから裁く。次に我が降臨するまでの間、せいぜい生を謳歌するのだな」

そして、最古の英雄王は消えていった。

「王の決定は絶対であるということ。ゆめ忘れるな」

そう言い残して。

東京都、七雄神社の社務所の一室。少し前にゴルゴネイオンの件で祐理と冬馬が会話した場所。

その部屋で、祐理とポニーテイルの少女が談話をしていた。

「それじゃ、魔王様よろしくね。万里谷さん」

「はい、一之黒さん」

少女の名前は一之黒亜梨子。

もちろん呪術関係者であり、ここにいるのは最近都内で多発している霊災について祐理に話をするように上司から言われたためだ。

正史編纂委員会のなかで、祐理が最も護堂に近いということもあって祐理は魔王との窓口的扱いになっているのだ。

「どうだった？」

石段の半ばまで来た亜梨子に声がかげられた。

「大助いたの？」

「お前が呼んだんだよ！」

大助と呼ばれた少年は見たところ普通の高校生、唯一の特徴は頬の絆創膏くらいだ。

彼ももちろん呪術関係者。

普通、日本の呪術界は高校を出るくらいの年齢まではいわゆるモラトリウムとなっており、それまでに呪術の基本を学び、資格を取ってはれて一人前になる。

ゆえに、大助や亜梨子のような年齢ではあまり仕事はしないのだが物事には例外というのはつきもので、例えば緊急事態には協力が要請されることもある。

それ以外で言えば、希有な才能または強すぎる力を持っている場合は専門の監督者がついてもに活動したり、専門の学校などへの入学が強制されることもある。

この二人は後者。正確に言えば『生成り』である。

「そ・れ・は・置いといて、クレープをおくれ！」

「なんでそうなる！まさかそのために呼びつけたのか！？」

「いいじゃない。このまえは詩歌に奢ってあげたんでしょ？私がダメな理由は何？んん？」

ニヤニヤして迫る亜梨子に大助は観念した。
ここで断ったとしても、絶対に肉体的ダメージを負うことは経験
からいって分かり切っていた。

「なんでそれを・・・ああ、もう分かったよ！買えばいいんだろ
！買えば！」

「ありがとうさん」

亜梨子はそのままステップを踏むようにピョンピョンと石段を駆
け下りていき、そのあとをやや疲れた表情の大助が追っていた。

それは護堂の帰国一日前のことだった。

第十八話 ギルガメッシュ（後書き）

ギルウウウウー！やあっと終わったー。オリジナルの話は難しいです。

そしてやっとこさムシウタキャラが！虫憑きではないですが、能力は同じ様

な感じを予定してます。もうすぐ連載開始四ヶ月です！

第十九話 帰国

日本に帰国した護堂はまず家を何日も空けていたことで機嫌を損ねた妹、静花との関係の修復に努め、今度一緒に出かけるということを条件に機嫌を直してもらったり、気まぐれに買った宝くじが大当たりしたり（かなり高額）と家の中でのごたごたがあつたわけだが、それを差し引いてもイラクでのごたごたがウソのような落ち着いた（？）日常を楽しむことができていた。

イラクのほうはなにかと慌しくなつてしまつたようだがそれに関しては興味も関心もない。巻き込まれた上に解決までしたのだから何も言われる筋合いはない。

ナンクルナイサーの他人事の行き当たりばつたり。凡そカンピオ―ネがもつてあるう氣質を護堂もまた備えていた。

「うお、眩しッ」

明くる月曜。登校のため家を出た護堂は突き刺すような朝日に思わず眼を瞑つた。

五月も中頃。

青々とした木々の風景が心に染みる。ここ一週間ほど砂漠で死闘を繰り広げていたのだ。萌え出づる若葉の輝きが驚くほど新鮮だった。

「なにやってるの、お兄ちゃん」

「うっ！？」

玄関前で立ち止まり四季の移り変わりを感じていた護堂を引き戻したのは実妹の蹴りだった。

腰の辺りを足の裏で押すような蹴りで護堂は踏鞴を踏んで前方によろけた。

「男子を足蹴に！」

「いつの時代よ、それ」

玄関前、ついさっきまで護堂がいた場所に静花が立っていた。ややつり眼がちな双眸が護堂を見据えている。

男女平等が叫ばれて久しい平成の世に生まれた護堂に女性軽視の感覚はないが、なんとなく男のほうが生きずらくなっている気がする。それは護堂が男だからだろうか。

「それはそれとして、いきなり蹴るのはどうかと思うが」

「いきなりじゃないよ、声かけたでしょ」

「声と蹴りがほぼ同時だっただろ！！」

腰の辺りをさすりつつ護堂が言い返す。一方の静花は悪びれもしない様子だ。

「ドアのまん前で朝から黄昏てるんだから通行の邪魔になるじゃない」

しれっとそんなことを言う妹。だからって蹴るか、いきなり。

護堂が静花の言いように言葉を失うと、その間に眼に前を通り過ぎていった。

「ほら、早くしないと遅れるよ。お兄ちゃん」

態度を一辺。振り返った静花は向日葵のような笑顔を護堂に向けた。

静花はすこぶる機嫌がよかった。

理由は簡単で、兄・護堂と共に学校に行けるからだ。

思い返せば、静花は護堂と出歩いた記憶がほとんど無い。それは護堂がずっと入退院を繰り返す生活を送っていたため、やっと体調が戻ったかと思っただけならイギリスに三年も留学して帰ってこなかった。

三年ぶりに兄と会ったのはほんの一月と少し前。

兄と連れ立つての外出。例えそれが登校するだけであつたとしても、静花にしてみれば数年来夢想してきたこと。

何よりも喜ばしいものだった。

よって静花は機嫌がよかった。

ほんの数分前までは。

「……誰よ」

静花の視線の先には護堂と談笑する二人の女。

灰色がかった黒髪の日本人と自分と同じくらいの体格の茶髪の外国人。どちらも城楠学院の制服を着込んでいる。

護堂とあはは、うふふ、と話しているところに、まるで待ち伏せしていたかのように現れた二人に静花は完全に出鼻をくじかれてしまった。

「二人揃って何でいきなり？」

護堂も護堂でこの二人、リタと光が現れるとは露ほども思っていなかった。

「何でってそりゃ護堂の近くにいるためよ」

「草薙さんはカンピオーネなんですから、恩恵はどの組織ものどころか手が出るほど欲しいはずですよ」

曰く、もともとカンピオーネである護堂と知り合いだったリタと偶然であった光。リタの所属する組織『凛々の明星』ブレイブ・ヴェスペリアはVIPな構成員を抱えてはいるが少数であり新興組織。光は一族自体の力が全盛期に比べ非常に小さいものになっている。どちらもせっかく掴んだ魔王との繋がりを手放したくは無かったのだ。

「それでわたしたちは草薙さんのカンピオーネとしての活躍をお支えすることになったのです」

「護堂の行動も調べろって言われてるけどね」

「不穏当だな、それ。本人の前で言うことでもないだろ・・・それにしても仕事であっさり転校か・・・リタは学校行ってなかったからいいとして、光さんは岐阜の学校じゃなかったっけ？」

以前見たパスポートでは岐阜に住んでいたと記憶している。

「いえ、それは大丈夫です。転校の手続きもしましたし・・・それに、その、これはわたしの自発的なものですので無理強いされたわけでは、ないです」

「そう、なのか」

頬を赤らめて恥ずかしそうにする光。

なんとなく話しているこちらも気恥ずかしくなってしまう。

この空気をどうしたものかと思っていると、背後から猛烈な殺気が護堂を襲った。

「その人たち、誰？・・・お兄ちゃん・・・」

「ッ」

けっして怒鳴るわけではない。つぶやくような言葉の中に、怒りの力を凝縮させるのが静花の怒り方だ。特にその怒りが頂点に達したときの。

なぜ妹が怒っているのかまったく理解できないまま護堂は慌てて二人を紹介する。

「こっちはイギリスにいたころの友達でリタ・モルディオ。それでこっちが明智光さん。今度城楠に転校して来るんだ」

「なるほど、リタさんはいいよ。いや、よくないけど、でもさあ・・・それ以上に！岐阜から転校してくるような人となんでそんなに仲良

「い訳？おかしいでしょッ！？」

ついに静花が爆発した。天国から地獄に真つ逆さまに転落した反動が珍しく声も大きい。周囲に人がいないのが幸이었다。

そして同時に痛いところを突かれたとも思う。岐阜という単語を聞き取られていたのも痛手。

まさかイラクと一緒に戦争してましたとは言えないし、かといってイラクで知り合ったというのもそれがどうしてここにいる、となるだろう。進退これ谷^{きわ}まるとはこのことだ。

「いや、それは、なあ」

「なに誤魔化そうとしてるの？ねえ、何か言えないようなことがあるんじゃない？」

「ないからッ！少なくともお前が思ってるようなことは絶対無いからッ！！」

とりあえず全否定しておく。いかがわしいことはなにも無いのだと潔白を主張する。

もつとも、護堂の記憶には無いことだが、光は治癒呪文をかけるためにすでに護堂とキスしている。そのため渦中の光は内心そんなに力強く否定しなくても・・・とちよつとだけショックだったりする。

「本当に？」

「本当だって！」

猶も疑いの視線を向けてくる静花にどうしたものかと思っている

と。

「おはようございます、護堂さん、静花さん……どうかしましたか」

やってきたのは第三者、万理谷裕理だった。媛巫女という重要な職に就いている彼女と護堂がであったのはつい最近。この東京にアテナがやってきたことをきっかけとするものだった。あれから一月と経っていないが光同様、共にまつるわぬ神相手に戦った仲だ。

その裕理がここにいる。巫女装束ではなく、普通に城楠の制服を着て。

「な、万理谷先輩ッ!？」

静花は眼をひん剥いて驚いていた。裕理はこの前家に電話をかけてきたこともあった。しかしそのときは護堂が知らない人だと関係を否定していたのだ。それなのに極自然と話しかけてくるようになってるなんてッ!

「護堂さん、この方達は？一般の方ではないですよね」

静かの驚愕を知りもせず裕理は静花に聞こえないように声を細めて尋ねた。裕理の霊勘が光とリタが魔術側の人間であると告げていた。

「リタ・モルディオよ」

「明智光です」

今度は二人のほうで護堂よりも先に名を名乗った。

裕理のほうは明智という姓に少し眉を顰めたが一瞬で持ち直し自己紹介をした。

ここで裕理と光は視線を交わすと同時にその脳は激しく活動していた。

(・・・明智、まさかあの明智!? いまさらどうしてここに!? 目的は護堂さんでしょうか? そういえば甘粕さんが力を得るにはカンピオーネと懇意にするのが手っ取り早いと・・・いけませんそんなことはッ)

(万理谷裕理・・・国内最高クラスの霊視術師・・・武では勝てるけど、問題は彼女が草薙さんをどう思っているのか、ですね)

裕理は明智のお家柄、よからぬ目的で護堂に近づいてきているのではと邪推し、光は裕理を政敵、恋敵として牽制の視線を送る。

ちなみに冬馬は懇意の部分に穿った見方で説明している。

「なんかいきなり仲悪いな」

「万理谷先輩珍しい」

そんな二人を周りの三人はわけが分からないという表情で見つめる。

「あ、えっと・・・そうでした、護堂さんお願いがあるのですが」

「なんだ?」

「ええっと、ここではちよっと・・・放課後に七雄神社までいらし

てくださいませんか？大切なお話があります」

「ああ、いいぞ」

裕理のよく分からない頼みを二つ返事で了承した護堂。これは以前の経験から神かそれに関する厄介ごとでは無いだろうかと推測したからである。それくらいの大事でなければ、この人の良い巫女が他者にご足労を願うはずが無い。

が、事情を推察できないその他は啞然とするより無い。

「ちょっと待って！神社って日本の教会みたいなところでしょ？そんなところにわざわざ男呼び出すなんてなに考えてるのよ!？」

「いけません草薙さん。この女性は危険です。脚を踏み入れた瞬間に食べられてしまいます！」

「食べるツ!？な、何か深刻な勘違いをなさっていませんか？わたしは大切なお話があるというだけで」

「学校ですればいいと思いますけど？」

「護堂！ユリとはどういう関係なの!!！」

「わたしを置いて話を進めないでください!!……まあわたしも神社に呼び出す必要はないかと思えますし」

「静花さんまで!？」

突然の言いがかりに眼を白黒させていたところで、なぜか後輩が敵に回った。状況は裕理にとって一部を除いて四面楚歌。こういっ

たことに元来なれていない裕理は処理することができず唯一の退路に逃げ込んだ。

すなわち、護堂。

「護堂さん、なんとかしてください！」

「え？俺が？」

半ば縋り付くような裕理。それが周囲をヒートアップさせているのだが、もちろん裕理は気づかない。

「護堂」

「草薙さん」

「お兄ちゃん」

攻め立てる三対の視線が刺さる。

草薙護堂は神殺しである。『カンピオーネ』『羅刹の君』『魔王』などと呼ばれる真正正銘の神の力を振るう人間なのだ。そんな神殺しに安息はないと誰かが言った。たとえそれが戦場の外であったとしても変わることはないのかもしれない。

俺の平和な日常を返してください

そのちっぽけな夢が叶うのは一体いつになるのだろうか

第十九話 帰国（後書き）

お久しぶりデース。リアルが立て込んでる今日この頃。四分の一年ぶりの更新です！！

第二十話 王について

古い木造のドアを押し開けて甘粕冬馬は店内に入った。

そこは銀座のはずれにある知る人ぞ知る高級パブ。いらっしやいませ〜という華やかな声に迎えられた冬馬は目的の人物を見せの隅に見つけるとわかりやすいため息をついた。

「おーい、こっちだ甘粕」

その人物はブンブンと大きく手を振って自分の存在をアピールしている。

いくら、店内がにぎやかとはいえ、大の大人が恥ずかしい。そう思いながらも、呼び止められた以上

彼の関係者であることは店のものから見ても一目瞭然。立っているわけにもいかず、テーブル席に向かった。

「久しぶりですね。木暮さん」

木暮禅次郎。

甘粕冬馬の塾生時代からの先輩にあたる被魔局の若きエース。その他を寄せ付けない実力によって日本に十数人しかいない独立官という役職に就いている。

「なんだ、そのよれたスーツは。せつかくいい店に来たんだからピシッとしたかっこうして来いって言っただろ」

「冗談言わないでください。安月給の僕にそんなスーツは買えません」

やれやれこれだからエリートは、と首を振る冬馬。

禅次郎の服装は当人の言うとおりで、できる男を思わせるスーツ。それも、十代といっても通じる若々しい外見にもかかわらず、その雰囲気から会社の役員か、御曹司かと思われるような。

一方の冬馬は一見どこにでもいるような残業明けのサラリーマンそのもの。

それでも彼のスーツがだらしのないのは本人の性格によるところが大きく言い訳にはならない。

「まったくお前は変わってないなあ」

青春時代を思い出しているのか懐かしそうに目を細め、二人分のグラスに酒を注ぐ。そうしている間にも禅次郎は空いた手を別に動かしてテーブルになにやら指を這わせるしぐさをする。

「隠行ですか。そちらこそ、その術の冴えは相変わらずですね」

一般人には意味の分からない。というか気のもとめない行動を冬馬は目ざとく見つけ、正体を看破した。

この場にいる二人の存在を周囲から覆い隠してしまう呪術であった。

「で、こうまでして私を呼んだのはどういったご用件で。まさか旧交を温めにつけてわけではないのでしょうか?」

「それがないってわけじゃないが、ま、本題とは違うな。予想はついているんだろう」

「さて、私の所にある情報から推測するに、万理谷さんにした話が、双角会の連中の話か」

「さすがは忍者。大当たりだ。正確にはそこに王についての文言を加えたいところだな」

「忍者じゃなくて忍って言うてもらえませんかね」

軽口を返す冬馬であるが、正直内心衝撃を受けていた。

万理谷から一之黒亜梨子という少女が正史編纂委員会から正式な使者としてやってきたという話を電話で受けて、その背後に禅次郎を思い浮かべるのは簡単だった。

一之黒亜梨子という名は委員会でも有名な禅次郎預かりの『生成り』の少女だ。

確か、5、6年前のフェーズ4に巻き込まれた際に被害を受けたと記憶している。

重要なのはその後。王について、そして何より双角会という単語だ。

「性懲りもなくまだ活動してるんですか、連中」

「2年前の大掃除でも完全に排除できたわけじゃなかったからな。しかもこれまた面倒なことに活動を活発化させている節すらある」

双角会。

戦後を生きる近代陰陽師の祖にして天才陰陽師、土御門夜光を崇拜する魔術師の秘密結社。

その多くは現在でも謎に包まれており、目的も定かではない。その名が表に正史編纂委員会に出てきたのは2年前。『上巳の大祓』と呼ばれる大呪術儀式を敢行したことをきっかけとする。

日本国内における戦後最大の呪術によるテロリズムであった。

主犯は当時、最高位陰陽師の一人であった大連寺至道。彼はこともあろうに地脈を弄り、人工的に霊災を発生させただけでなく、その力を取り込んで自身を『鬼』と化したのだった。

「あれは、嫌な事件でしたな」

苦々しく答える冬馬もまた、事態の収拾に駆り出されていた。フーズ4の『タイプ・オーガ』となった天才陰陽師の力は圧倒的で、魔獣か神獣にも匹敵するものだったため、終ったころには多数の重傷者をだす大惨事となったのだった。

4月のアテナ襲来で迅速な対応ができたのは、この事件の教訓が生かされた好例である。

「大連寺は優秀だったがいろいろと危ういやつでもあった。アイツが夜光に入れ込んでいることもだいたい前からわかっていたんだが、場所が場所だけに、な」

正史編纂委員会の中には組織としては当然だがいくつもの部署が存在している。ただ、他国の呪術機関と一線を画すものとして、政府直属の公的機関であり、そこに勤める術者はその多くが国家公務員であるということだ。

特に環境省や国土交通省、警察庁や国家公安委員会などの繋がりはその役職上かなり深いのだが、そんな省庁のなかで呪術と切っても切れない省庁がある。

「『御霊部』はその名の通り、『御霊』、つまり荒御霊や和御霊をといった『神霊』や『英霊』を調査するのが主な職務だった・・・しかし」

「問題なのはそこが『宮内庁』の管轄だったということですね」

「そうだ。さすがに呪搜部でも怪しいからといって迂闊に手出しできなかつた。んで、いざ調べてみたら双角会の根城になってたってわけさ」

禅次郎はグラスを一気に空にして、二本目のウィスキーを開けながら言った。冬馬はまだ一杯も飲んでいない。ウィスキーをほぼ一本、一人で空にしてさらに飲むつもりだ。

冬馬はその飲みっぷりに顔を青くしつつも、話を進める。

「ですが、それが魔王・・・草薙護堂さんにどう関わるので」

「関わりはない。寧ろ関わらないで欲しい。一之黒にはそう言付けさせた」

「ははー、なるほど。魔王様に場を引つ掻き回されたくないということですね」

「連中は厄介だ。魔王を恐れて水面下に潜っていくかもしれん。まして、あの空港火災に双角会が関わっていたということがあってはな」

空港火災と聞いて思い当たるのは一つだけ。

3年ほど前のアマテラスとオオクニヌシを戦闘によって空港一つ壊滅したあの事件のことだろう。呪術界に激震をもたらした日本人カンピオーネ誕生につながる事件。

「あれが、双角会の仕業なんですか」

「最近になって可能性が出てきたというだけだがな。それでもアマ

テラスにオオクニヌシ。ともに宮内庁ならではの神格だとは思わな
いか」

たしかに。と冬馬は思った。アマテラスは何を隠そう天皇の祖と
される八百万の神の中の神。オオクニヌシもスサノオの子とされ、
天孫降臨以前の葦原の中国、すなわち日本国土を統治した神である。

共に日本国にとってなくてはならない神であり、あの空港での一
戦は国の覇権を争う意味合いも込められていたのだ。

「考えすぎ、とは言い切れませんね。とすると味を占めた大連寺は
同じ手順で神を自分に降ろそうとして失敗したとかそんな感じでし
ょうか」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。どっちにしろ、
今連中が表に出ているこのときが最大の好機だ。魔王の帰国で焦っ
ているあいつ等は近いうちに必ず行動を起こす」

「目的は土御門の次期当主。夜光の生まれ変わりといわれる土御門
夏目ですか」

「ああ、いくら才能があつて龍を使役しているとはいえ、まだ学生
にすぎない。本来なら双角会も時間をかけていく予定だったんだろ
うが、魔王がいる。しかもすでにこちらが接触しているとなつては
うかつかしてもいられない状況になつたんだろう」

御霊部はすでに解体され、双角会の構成員も数多く逮捕されてい
る。それでも、彼等もまた魔術を操る者。網の目を潜り抜けるよう
に捜査の手を逃れた者は多い。

「冬馬にはこれからさらに万理谷裕理を介した魔王様とのコミュニケーションに打ち込んでもらいたくってな」

「簡単に言いますね。てゆうか先輩がやればいいじゃないですか。部下の一人を使者にしようと丸投げですか」

「しょうがねえだろ。俺にはこっちの仕事があるし、ただでさえガキ三人のお守りやってんだ。お前、亜梨子や大助はいいとして、詩歌が暴走したらどうなるかわかってんだらうな」

「それは・・・」

それを聞いて、冬馬はぞっとした。生成りはある意味諸刃の剣だ。力をコントロールしているうちはちよっとした魔術師以上の力を引き出すことができるので心強い味方なのだが、一度制御を誤れば、その先はフェーズ3〜4クラス霊災となってしまう。

現在日本にいる生成りは十人に満たない。その中でも特に強い『魔』を宿した3人を禅次郎は教育係として指導している。

「3人とも才能はかなりのものだが、強すぎる力は危険だ。詩歌の能力が暴走すれば小さい町ひとつ軽く消えるぞ」

「破壊の雪、でしたか」

聞き知っている程度であるが、有名な話だ。杏本詩歌という生成りの少女の危険極まりない能力。一見すれば雪のように見える白い結晶を降らせるといふもの。しかし、その正体は破壊エネルギーの塊で、美しく見える光景も、発動直後から阿鼻叫喚の地獄が展開されるという。

「俺くらいになれば雪の中を突っ切れるが、他のヤツはダメだな。原形もとどめない」

それは自画自賛ではなく、純然たる事実。そうでもなければ彼が担当になることはなかっただろう。

「それはそうと、次だ。GWのときに草薙護堂がイラクで神殺しをしたことは知ってるな。その調査結果が出た」

禅次郎はかばんからA4サイズのレポート用紙の束を取り出して冬馬に渡した。

「見て分かるとおりだが、草薙護堂が倒した神は古代ウルクの王、ギルガメッシュである」と分かった」

「ほー、それはまた大層なビッグゲームですね。世界史の教科書にも出てくるくらいの神格ですよ」

「詳しいことはイラクでの情勢悪化があつて分かっていないのが現状だ。篡奪した権能もまだ使った様子はない」

「とすれば、伝承を当たるか、まつろわぬギルガメッシュの戦いから予想するしかないですが」

「ああ、幸いなことにギルガメッシュはかなり派手に戦ってくれたおかげで戦闘に関する情報はある。25項にあつたと思うが」

そついわれて冬馬はパラパラとページをめくる。

「ありました。えーと、神具級の刀剣を湯水のように射出。世界を切り裂くほどの破壊エネルギーを発生させる神剣を持つ。うわあ、えげつないですね。というよりよくこんなのに勝ちましたね」

「世界を切り裂くというのがどこまで真実か判断に困ることろだな。比喻表現なのか真実なのか。俺としては前者であって欲しいんだが」

「後者であれば、エアの剣とかですか。ヒツタイトの宝物庫に貯蔵されてたつて言う。ギルガメッシュとの関係はバビロニアがヒツタイトに侵略されたつてことくらいですが」

「どちらにせよ新たな権能がなんなのか。それを一刻も早く知りたいたいんだ。その後の行動調査では力を行使した様子はない。宝くじで結構な額を当てたくらいか」

「マジですか！？うらやましいわー。私も一発当てて悠々自適な生活したいですよ」

本気で羨ましがる冬馬。それに対し、あくまで真剣な禅次郎は予てよりの懸案事項を口にする。

「もしその宝くじが権能によるものだとしたらどうだ」

「・・・なるほど。金運を引き寄せる力。もしくは財宝か、それに類するなにかによる付属能力。そう考えてるんですね」

「可能性としてはな。ギルガメッシュは神格化されているとはいえ、具体的に神としての権能がどうかという神話ではない。ならば、その王としてのあり方が権能になっても不思議じゃない。なにより、

俺たちの予想が本当なら、日本そのものに与える影響もかなりのものになる」

禅次郎の懸念。それは、護堂の権能が金運を操る類の力であるのではないかということである。

カンピオーネ。その存在は魔術師の王であり、あらゆる法から自由となる絶対者。その極限の自由を保障されているのは単に彼等の持つ武力がどうにもならないほどに巨大だからに他ならない。

ところが、ここに金にまつわる権能が加わればどうなるか。

それはカンピオーネの権能が経済にまで影響を与えることになるということ。そしてそれは世界中の国々が経済で繋がる現代において本当に絶大な力を持つということになるのだ。

「バブル以降の不況にあえぐ日本にしてみればその力は喉から手が出るほどに欲しい力だ。うまくいけば一気に景気を引き上げられるかもしれない。日本経済に漂う閉塞感も多額の赤字国債も全部ひっくるめて何とかなってしまう。が、それは同時に劇薬でもある」

「経済を支配されれば国は完全に支配化に入るも同じ。人々の生活そのものに直結しますからね。機嫌を損ねて不況を呼び込まれてしまったら、日本は終わりますね」

金がなければ自衛隊を維持することも、政治を行うこともできない。経済の低迷はさらに、魔術師の懐事情にも影響してくる。

「それは確かに困りますね。ただでさえ少ないお給料がさらに引き下げられるなんて。そんなことになったら漫画もゲームも買えなくなってしまうじゃないですか！さらにアニメ会社まで飛び火して質の急落を招いてしまう！これはすなわち、萌えのピンチッ！！この不肖甘粕冬馬。カンピオーネ草薙護堂氏の権能調査任務全力を持

って当たらせていただきます!!」

冬馬は決意を新たに拳を握り締め、今年度最大のやる気を出して叫んだ。

幸いにして、その全力の決意表明は禅次郎の術によって外部に漏れることなく済んだ。

第二十話 王について（後書き）

今回はエーゼント二人が話しているだけでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7598r/>

カンピオーネ cross x cross

2011年12月11日03時51分発行